

レッシングが非難する詞彩繪畫より、少しも優れてゐない言語を見ることにならう。要するに言辭の魔術を有する者でさへも、往々失敗する。而して一人の眞正魔術師に對して二十の詐稱者があるのだ。

著者は今まで繪畫的及び音樂的暗示趣態の間に、明瞭な區別を立て、來なかつた。しかも色彩或は形象を暗示する藝術は、音響を暗示するものとは、明かに異つてゐる。この二藝術は一人の文學者に共存することもあらうが、普通には別々に備つてゐる。例へばシャトープリアンの散文は兩様の暗示趣態を有してゐるが、近頃のフランス文學者へ降るに従つて、分業とも言ふべきことが行はれたやうである。そこで、ラマルティンの靈魂は、彼自身の語を用ふれば『悲しい、美しい調をもつて蒸發する』。彼の詩は視覺上の暗示趣態において比較的貧弱である。一方、レコント、ド、リールと所謂バルナシアン派の大多數は、多少ゴージェ、ティエーの先導に従つてその韻文を彫琢し、或は設色し、造形的精度の驚くべき點に到達してゐる。レコント、ド、リールは言ふ『散文或は韻文を書く人の第一の心遣ひは、外界の事物の繪畫的方面を浮き出すやうに表はすべきことである』と。エレディアはこの細工人仲間の、恐らく最後の名工であらう。

さて叙述の大名人によつて喚起された精細な形式及び色彩に次いで、音樂的瞑想の無窮を熱望することが起つたのである。これはヴルレーヌ或はマラルメのやうな象徴派の運動に表現されたのである。ヴルレーヌは、この一派の信條とする詩の第一行目に『何よりも音樂』と言つてゐる。マラルメは音樂と詩の混淆に耽つてゐる。その誇張さ加減は、一世紀前のドイツにおいて、ノヴァリスの理論及びティークの實行に見えるものと匹敵するのである。

こゝに興味ある問題が起る。韻文の正當な音樂と、姉妹藝術の領内に踏み入る音樂との相違は何であるか。或意味に於いて、マレルブから始つてゐるフランスの新古典詩人等よりも、一そう苦心して調和あるやうに作らうとした詩人は無いのである。デポルトに關するマレルブの註釋を見ると、マレルブが非常に緻密な技巧家であることが分る。殊にこの詩的調和の事柄において、これを見せてゐる。彼は母音重複ハイニククス(語と語の間に、或は熟音中に、母音のみが續いて、その間に子音を缺く事)を攻撃するのみならず、母音と子音の結合からも、幾多を非音樂的として排斥してゐる。第三流の詩人ウァラーは、マレルブがフランス詩に貢獻したことを、イギリス詩のために爲した人と稱され、殆ど第一流の名聲を博した。それは、イギリス詩の韻律を磨

いて流暢ならしめたといふのである。しかし彼の詩には優れたものが極めて少いのである。韻文において最も完全な技巧家の一人であるラフォンテーヌは、マレルブの教訓から學んだのである。さて、今述べた意味の音楽的、即ち母音と子音を巧妙に混ぜて、少しでも不調音と氣づかれぬやうな音楽的韻文のイギリスの好例は、グレーの『墓地の哀歌』であらう。詩人はグレーが作つたよりも更に進み得ることは明白である。詩人は、詩術特有の調和を越えて、音楽家の調和に達することもできるのである。但し、それは瞑想を添附し、すべての暗示術をもつてすることに依つてのみ爲されるのである。例へばポーの『鈴』中の繰返しは、心理に殆ど催眠術的ともいふべき魅力を及ぼすために用ひられたのである。ポーは既にこの詩において、詩が安全に起居し得る領域の危険な外端に立つてゐる。ポーのフランス讚美者等は、(マラルメをはじめ)更に音楽的暗示趣態のエルドレードオ(南米の内地に在つて、金銀珠玉が轉がつてゐると稱せられた國、黄金郷の意)に向つて前進しようと試み、而してその企劃中に混沌へ轉げ込んだのである。この魅力を發揮するために、音楽的暗示を企てた詩人の作は、どうかすると普通の詩人から見て、甚しく不調音の連続と思はれるのである。その好例はテイクの『ヴァルフ卿物

語である。フランデス氏はこれにいつて言つてゐる。「讀者の神経は、Unke—Sturme—hinunter—begunnte—vordunkeln—verschlungen—Wulfen—Münze guldten—grossen Kluffen—rucke, Drucke—thuen, Zunften—jugen—bedunken—erschlage—anhube—mit tiefen Brunsten—vielen Unken, die haulten und wanken—zu dem Requiem des todten Wulfen, den der dunkel Satan mit vielen Wunden—erschlage なる音の連続で、半時ばかりの間に麻醉させられ、遂にその耳にはコトコトの音の外には、何も響かなくなると、彼は頂上に達したので、言語は音楽となり、彼は情緒的氣分の流れに浮び出すのだ」と。洒落でも何でもなく、全く日本語の夢うつゝの境である。なほ見落してならぬことは、ワグネルの理論と實行が、フランス類廢派の音楽と詩の混淆に尠からぬ影響を及ぼしたことである。

こゝに附言して置かう。所謂詩的散文の發生するのは、散文と詩を混淆することからばかりでなく、また散文が繪畫或は音楽の領域へ延びることからも來るのである。イギリス文學上の詩的散文、即ち想像的散文と異つてゐる一種の文體の最初の一例は『オッシュン』である。これには詩の措辭法と抑揚、及び散文のそれとの、やゝ粗笨な混合に依つて、この効果が達せられ

である。更になほ眞にロマンティックなものは、音楽の調和を暗示しようと苦心するド、クインシーの詩的散文である。レズリー、ステイヴンは言ふ『ド、クインシーの作中最も優れた文章は多少に拘らず、夢想追覆の題に表はされた思想を持ち出さうとしたくだけりである。それらは楽曲のつもりで作られたもので、言語は音符の役目を勤めるのである』と。

他の作家で、その強烈な繪畫的暗示趣態によつて詩的である人もある。ロマンティック型の詩的散文は、他の總てのロマンティック混淆のやうに、あらゆる形式的境界から溢れようとする情緒の重壓から生れる。その一そう洗練された形式は、著者が象牙の塔内における靈魂と感官の戯れと呼んだものゝ直接成果である。ゴージェーは言ふ、『我々の内、誰が詩的散文の奇蹟を夢想しなかつたか。これは節奏と脚韻律なしで音楽的であり、靈魂の抒情的衝動、冥想の起伏に順應するに十分柔軟なものである』と。而して彼は、この奇蹟はボードレルの『散文詩』に實現されたと見てゐる。その詩は、我々に『現實世界から遠く離れた處に、我々を連れ行く磁氣的睡眠の感覺』を起さしめる力において、ヴェベルの音楽に比較さるべきものである。但し、ルソーの『ビグマリオン』は近世の意味における詩的散文の最初の一例であつて、音楽

的冥想の産物である。

我々は今まで、主として前世紀の文學が音楽及び繪畫の仕事になさうといふ試みにおいて、暗示の總ての資源を利用した遣り方を述べて來た。こゝに音楽が同期間、詩的及び繪畫的ならうと熱望したことについて、一事を述べべきである。なぜなれば、音楽も平凡な、引込み精神を現すとは大に異つて、他藝術と歩調を合せ、不斷の努力をもつて、その中心を離れ、疑問の周邊の方へ向ひ、他の或物に移り入る點に立つてゐるからである。

第二節 標 題 樂

本書の著者は幾分臆して標題樂といふ題目を取るのである。これ一つには著者が、この事に關して不適任であること、また一つには、この全問題をめぐる論争の雰圍氣からである。標題樂(或は序列樂といふ譯語もある)については定義に關してすら一致が無い。『オクスフォード音楽史』には、標題樂(特にベルリオズ及びリストによつて發達させられたもの)は『奇な雜種、即ち詩の不満足な類の姿を装ふ音楽』と定義してある。他の權威者は甚だ漠然たる定義を下し

て「標題樂は唯一の高級音樂である」と結論してゐる（フレデリック、ニークスの「標題樂」）。なほ英國百科辭典を見ると、これは最初、渾名であつたが、今日ではアカデミックの名稱となつた。樂器の音樂で、語を用ひないで、音樂的でない思想を叙述するもの、音樂的音響を無造作に叙事に用ひるものである、と述べてある。他には、音樂的作曲で、叙事的性質であり、音樂の無限の雜多と技巧上の工夫をもつて、音樂的たるばかりでなく、繪畫的に印象を與へるものと説明したのがある。或は、光景または出來事の連續を暗示しようとするもの、或は樂器をもつて出來事、光景、氣分などの一定の筋書、即ちプログラムを運ぶ音樂であると説明してある。さてその定義や説明はともかくも、標題樂が我々の問題となるのは、それが他藝術と共に、印象主義に向ふ音樂の漂流を最も明白に示してゐるからである。實に前世紀における音樂の發達は、通例かなりの時間を隔てたが、實は文學運動に附隨したものに外ならなかつた。例へばリヒアルド・シュトラウス及びデブシーの音樂の多くに現れてゐる氣分は、若しそれが文學上に表現されたならば、既にやゝ古いと見なされたらうと思はれるものである。第十九世紀は音樂上でも他と同様に、廣漠混沌たる膨脹の時代であつた。その持てはやされた長所は、膨脹的長

所であつて、集中のそれではなかつた。

音樂上の近世主義と、著者がルソーと連結させた情緒的膨脹の典型の關係は、容易に探り得るのである。なほルソーが作曲家であり、音樂理論家であり、また同時に文學者であつただけに、それらの關係を見るのは、一そう容易である。彼は他の方面におけると同様、音樂においても、新鮮と自然發生の名において、形式的及び紀律的たる何物にも反抗したことを知り得るのである。我々は他方面におけると同様、音樂において、人文的及び宗教的見地が、漸次に感傷的自然派の見地に服從したのを見ることが出来る。個性、特異性、表情的などについての強調が高くなつたこと、或は獨創と奇怪、逆語的、突飛などの混同は、同じくこの方面にも顯出してゐるのである。ロマンティック文學者が心の無邪氣を保存し、ロマンティック畫家が眼の無邪氣を保存しようとしたやうに、ロマンティック音樂家は耳の無邪氣を維持しようとしたが、この耳の無邪氣を尙ふことは、實際には音樂の大傳統に關する無智と嚴肅な反省の缺如を暴露してゐることが多い。この獨創の觀念を押し進めた點で、或ロシアの作曲家に及ぶ者は恐らく見當るまい。ロマンティック音樂家は、慣例的及び技巧的から遠ざからうといふ熱心の餘り、ロマ

ンテック文學者と同様、正規、代表的、人間的からも、同時に遠ざかる危険を犯すのである。文學におけるやうに音楽においても、個人的のみならず、地方的、國民的特異の得意な近親繁殖がある。グリーグは、その次のソナタを今少しくノルウェー的でないやうに作つてはと、忠告された時に、喧嘩腰で答へた、「それどころか、次のは、もつとノルウェー的のつもりだ」と。地方色は、國民主義的形式においては、ヴェベルのフライシュツ（一八二一年）、また奇異と異國趣味においては、フェリシアン、グヴィドのル、デザート（一八四四年）におけるやうに、共に勝ち誇つてゐる。とりわけ音楽は近世氣分、即ち外界自然に溶け込む氣分を著しく顯してゐる。また音楽は感官印象相互間の暗示的交感を反映してゐる。シューマンはキルン大寺院に音樂的表現を與へようと試みた。リヒアルド・シュトラウスはニーチエの哲學に、リストはユーゴー或はシルレルの詩に、音樂的表現を與へようと試み、フーベルはアーノルド・ベクリンの繪畫の一を管絃樂に合はせようと試みた。そのベクリンは、この繪畫に『汎神教的自然詩』を色彩で表はさうと狙つたのである。かやうに我々は、一藝術から他藝術に移り往く印象主義的跳躍をたどり得るのである。かくて音楽は、それ自身の固有の調和に興味をもつこと少く、暗示

趣態の奇蹟作業に多く關心するやうになつた。即ち音調繪畫を描き、音調詩歌、或は交響樂的短詩及び民謡を書き、樂器上の物語を語る方に力を注いだのである。

前記した音樂上の全傾向に共通の要素は、音樂の形式に比べて、その表現の方に益々重きを置くことであると概説しても、相應に正確であらう。誰しも多分同意するであらうと思ふが、この近世運動の結果として音楽は非常に表情豊富となり、著者がルソーの場合に定義した自然發生の趣を大部分成し遂げてゐる。この自然發生は、グリーグに屢ば見えてゐるやうに、民族の原始的氣分の演奏に現れ、或はシューマン及びシューバンに見えるやうに、個人氣分の抒情詩的強調となつてゐる違はあるが、傾向は一つ物である。シューマンとシューバンは彼等自身の遺方において、ハイネ及びシューリーのやうに自然發生であつた。既記のやうに、ロマンティック音樂家は、その自然發生に従ひ通して、ロマンティック文學者のやうに、混淆した情緒總合へ導かれ、人と外界自然、並に異つた感官印象間の對應を感じ、従つて各事物を暗示に依つて、他の各事物の言葉で通譯するに至つたのである。近世音樂の表情趣態の増進は、實演上、音樂が一そう暗示的となつた事を十分に示したのである。而してこの新しい暗示趣態の利用と濫用の兩

方面は、標題樂に最も明瞭に露出してゐる。

音樂史家が十分に注意しなかつた著しい事實がある。著者が先に引用した文（一三七頁）中に、ルソーは音樂の暗示力について、先人に例を見ないほど、これを力説してゐるのみならず、また恐らく今日でも凌駕されてゐない程に、標題樂の定義を下して、音樂が暗示し得る事物の具體例を附け加へてゐる。ドイツに與へたルソーの大影響を念頭に置いて見ると、一七八四年にクネヒトが公にした『自然の音樂的描寫』と題する標題樂的交響樂は、ルソー思想の或物を實演する試みであつたやうに思はれる。而して順次に、クネヒトの標題樂は、ベートーヴェンの『田園交響樂』の作曲に、おそらく或影響を與へたであらう。ルソーは音樂と文章の兩方面に質樸な田園生活の夢を表現しようと思つたが、十分に成功したのは、文章の方のみであつた。ルソー中、最も詩的であるもの總ての靈魂たるアーケディアの瞑想は、ベートーヴェンの『田園交響樂』の出るまで、十分な音樂的表現に達せず、またその繪畫としての十分な表現は、コロの風景畫に到るまで、成就されなかつた。ベートーヴェンは外界自然の光景及び音響を暗示的に表はすに當つて、その藝術——即ち絶對音樂——の中心から、その邊境に向つて離れ往く

危険について、多少の不安を感じたのは明かである。彼は『田園交響樂』の複寫の一に、別題として、『繪畫よりは寧ろ感情の表出』と書いた。而してその一ノート、ブックには、『樂器の音樂における凡ての繪畫は、若しこれを押し進め過ぎれば失敗である』と書いてゐる。さて我々は、彼が『田園交響樂』においては、正當の範圍を越えなかつたといふ事で、彼に同意しても可い。しかしながらロマンティック運動のタイタン等が、音樂上の形式と、自由な表現の熱望との均衡を保つだらうとは、殆ど期待し難いことであつた。彼等は、我々が既に文學上に、觀察したやうな風潮に従つて、音樂と他の藝術を情緒的に融合させる方に傾くのである。

我々はこの情緒上の無抑制と、同時に拔群なロマンティック人物の例としてヘクトル、ベルリオズを擧げる。リストを別とすれば、彼は標題樂史上の最も重要な人物である。我々は先づ第一に、ベルリオズ及び敬虔の音樂、即ち畏敬、抑制の感想を伴ふ理性以上のものゝ表現たる音樂の近世派一般の弱點を述べよう。一八三六年から同三七年間に互つてベルリオズの作曲した『鎮魂樂』^{レクイエム}は、専ら騒音と煽情主義である。ダンロイテルに従へば『かくの如き音量は、バスティル占領後、パリにおいて聽かれなかつた』と。實に死者を安眠させるよりは、醒ますに足る

ものである。(バステイルはパリの牢獄で、壓制政治の象徴と見られたもの。一七八九年七月十四日、革命黨の爲に占領された。これが同國大革命の第一弾であつたのである。その當時の凄じい光景は、幾多の文學者または史家によつて傳へられた)。

ベルリオズ中に明白に見ゆるものは、上からの照明でなく、下からの暴動である。而して彼は蜂起的音楽とも稱すべきものにおいて、頗る得意である。例へば彼の『ハロルド、アン、イタリー』中の山賊の亂飲亂舞である。ベルリオズは容態ふりたがる眞のロマンティック本能を持つてゐた。彼は自身を舞臺の前面へ進めて、彼自身の情緒的生活において、最も強烈なものを描き、また演出しようとする。かやうにして彼はその標題樂の最も名高いものを作るに至つたのである。『空想的交響樂』がそれである。その挿話が何であつたかは、彼の音楽上の告白を補ふ日記の文章から推知されるのである。この中に彼は、イギリス、むしろアイアランド出の女優ヘンリエタ、スミスンに對する死物狂ひの熱情を語つてゐる。その熱情は次の場面となつたのである。

『彼女は私が愛せぬと言つて責めた。そこで全くうんざりして、私は彼女の目前で毒を飲んで

答へて見せた。ヘンリエタの物凄いい叫び。壯烈な失望。私の方には殘虐な笑ひ。彼女の物凄いい愛の抗議を見て復活の願望。吐劑。』

ベルリオズは同時代のユーゴーのやうに、偏頗といふ點で非難された。これは、よし醜でないにしても、とにかく尨大と出來損ひを偏愛する傾を難じたものである。此詩人と作曲家にはポリフィマスのといふ名稱が當てはめられた(ポリフィマスとはオディシー物語にあるサイクロピズ種族の酋長の名である。この種族は皆な額に只一つの眼をもつてゐる怪人種である)。さて明白な點はかうである。近世作曲家の多數にあつては、構造法則が弛んで、音楽的調和と均齊は嵐のやうな印象主義の犠牲となつた。ベルリオズに見えるやうに、表情趣態に比べて、美を無視する傾は同じくリストにも見られる。この兩人が共に音楽的形式に示した調子は、音楽の領内に直接に入らぬものを表はさうといふ希望に基づくのである。ダンロイテルには次の語がある。『ベルリオズの空想的交響樂の最初及び最後の音律、彼の交響樂「ハロルド、アン、イタリー」、リストの交響樂詩で、ユーゴーの詩に基づいた物(註釋参照)、またシルレルの詩からの「イデアール」のやうな曲の最初及び最後の音律において、聽者は、どんな音楽的意匠の原理

によつても説明し難い驚くべき合奏効果の連続に依てまごつかされる」と。これは當然のことである。なぜなれば、作曲家等は、この効果を起すのに、始めから音楽的意匠について熱心でなかつたのである。彼等は全く象形文字或は象徴を工夫したのである。それらは始から音楽としての價値の點から評價さるべきものでなく、むしろ人をして詩或は繪畫、或は歴史、或は演劇、或は哲學さへをも夢想せしめる能力の點から見らるべきのである。例へばベルリオズの『空想的交響樂』中、死刑執行の光景を見せるために、犠牲の頸に當る斧の音を象徴した凄じい響、或はリヒアード、シュトラウスの音調詩『ドン・ジャン』中にある致命の劍の突撃を表はしてゐる、刺し通すやうな、調子外れの、高音のラッパ音調、これらの音樂的價値は、どんなものであらうか。かやうな質問を掲げることが、彼等への返答である。

なほ音樂の暗示趣態は、文學の暗示趣態よりも、一そう不確實また主觀的である。かういふ事がある。或二人がシューベルトのマーチを聴いて、殆ど同様に、第十八世紀スペインの光景を思ひ浮べたと。しかし音樂が別々の人に同様の形象を思ひ浮ばせるといふ事は、非常に細いプログラムを伴ふのでなければ、全く例外であるのだ。すべての極端な印象主義派に蔽ひかぶ

さつてゐる不斷の威嚇は、不可解の象徴主義といふことである。多數の人は次にしるす人に同情するであらう。この人はリヒアード、シュトラウスが、その一音調詩の内に、風車に當る風の音を表はしたものと思つて、その表現に感じ入つたが、この大家が眞に表はさうと努めたものは、群羊の鳴聲であつたと聞かされたさうだ。一般に、音樂における暗示趣態を始めから重く見ることは、人をして主觀の淵に轉落せしめるのである。一人にとつて無意義の樂曲も、他人には夢の宮殿を開く魔法鍵たることであらう。モツァルトは本質的に美である。しかし、ジュラル、ド、ネルヴァルは揚言してゐる、彼の心眼に第十七世紀の城と、多分前世に此處で見た婦人の姿を髣髴たらしめた或古い音調のためには、モツァルトも、ロシニーも、ヴェベルも皆な譲り渡しても可いと。ジュラル、ド、ネルヴァルの『ファンテジー』と題する詩は、音樂の暗示力を歌つたもので、同時に詩的魅力と暗示趣態に富んでゐる名篇である。

音樂が何時も多少標題樂的及び暗示的であつたことを説明するのは、頗る容易であらう。ロマンティック徒は、音樂的暗示趣態の藝術を、特に人と外界自然の關係に用ひて、これを非常に發達させたが、彼等は必ずしもこれを發明したのではなかつた。過去の大音樂家は、博識ぶる

人でも、形式主義者でもなかつたので、ただ博識ぶる人や形式主義者のみが、詩的及び繪畫的暗示を斥けて、音楽を『絶對』たらしめようとしたのだ。音楽の暗示はそれ自身で效力を示すこと、文學におけるよりも一そう困難であるが、若し成功すれば愉快であり、またその事は正當である。しかし假に成功するとしても、どんな程度で、またどんな目的のために、これが用ひられるか、と言ふ疑問が残るのである。多數の近世音楽家は、表情的ではあるが、無目的であるといふ非難を免れない。どうかすると、彼等は何物をも欲するまゝに表現し得るが、不幸にして表現すべき何物をも持つてゐなかつたと言はれた文學者に似てゐる。さもなければ、彼等は完全な色彩家であるが、意匠の無い畫家に比べられるかも知れぬ。彼等はその色彩と印象に耽り過ぎて、これらを或高尚な物に服従させることを怠りがちであつたのである。この點で彼等はロマンティック詞彩畫家のやうに、同じ不節制をさらけ出して、同じ批評を蒙つたのである。彼等はその藝術の中心でなく、邊陲の地に居住すること長きに過ぎたのである。サント、ブーヴなら言ふであらう、彼等は音楽の都をローマからビザンシウムへ遷したので、かやうに帝都を、遠く離れた國境に移すと、野蠻人と極接近することになるのである。のみならず、近

世音楽並に他の藝術を感嘆する蕪雜體は、往々最も危険な性質をもつてゐる種類である、即ち過度の文雅から生起するそのものである。

第三節 色彩聽覺

ロマンティック詞彩繪畫及び標題樂の一そう極端な形式、また實に暗示趣態の一そう極端な形式の大多數は、色彩聽覺と密接に結合してゐる。例へば、フェリシアン、ダヴィドの『ル、デゼール』にある有名な曙の音調繪畫は、本能的に光線と音響を結びつける者、即ちいつも『太陽は雷の如く昇る』と感ずる者によつて、十分に會得されるだらうと推量されるのである。また最近の小説(ファン、フッテン夫人の著『ヴァイオリット』)の主人公には、道德法則及びその命令までをも含めた一切のものが、類似の色彩に排列された音響を暗示するのであつて、彼はまさしく標題樂の作曲に従事するのである。或暗示的詞彩畫家等は斷言する、各母音は彼等にそれ／＼異つた色彩を見せる、而して自分等に似てゐる讀者、即ちその感性の奥に、これらの母音が音樂的暈色をもつて反響する讀者のために書くと。會つてポストンに陳列されたシューマ

ン及びベートーヴェンの音楽の或部の着色畫は、若しその畫題に順應するものならば、また色彩聽覺の鋭い角度を意味してゐると思はれる。實に色彩聽覺は、異つた總ての印象を混合すると、即ち近世の耽美派が夢想する神祕的總合感——「只一つで見たり、聞いたり、味つたり、嗅いだり、觸れたり」するといふ感官に、一定の生理學的基礎を與へるやうに見える。ワグネルの『將來の藝術』即ち總合藝術——その中には、別々の藝術すべてが肉慾的に融合する——それを樂むに必要となるものは、疑もなくこの感官である。

最近の音楽辭典（ストークス著『音楽百科辭典』）は、色彩聽覺について「ルソーの言語起源論が、音調と色彩の類似を勝手に主張するやうな愚妄の胚を蒔いたのである」といふ語で、無愛想にこれを片付けてゐる。ルソーがその論文中に「音が色彩の印象を生ずる場合よりも、一そう効果あることは決して無い」と述べてゐるのは眞實である。また、彼はディドロのやうに、すべての近世的混淆への途上にあることも明かである。しかもなほ著者一人としては、この特別な事において、それがルソーの誤謬であると言ふに躊躇するのである。ロックの語に、盲人で、ラッパの音は眞紅だと言つた者があるとある。この他、更に古い頃の参考事項で、著者の

氣付かぬものもあらう。若し色彩聽覺が、時として斷定されるやうに、確實な生理學的基礎を有するものならば、それは人性と共に古いものであらう。さて色彩聽覺一般に關して、どう考へるにしても、それが文學上重要となつたのは、全く近世の印象主義の進出からの事である。こゝで當然疑問が生ずる。この全運動に珍しくない神経過敏と、これとは、どの位の程度で關係を保つてゐるか。著者は色彩聽覺は不健全に興奮した感性の徴候であるのが常であると主張したのでない。これは専門家の研究に委すべき問題である。しかし著者自身の觀察を進めた限では、かうであらうと思ふ。音を色彩の辭で翻譯する習慣は、どんな特殊な神経過敏なくとも存在するが、光線或は色彩を音の辭で翻譯する習慣は、先づ何時も神経不整調の徴である。しかし既記のやうに、色彩聽覺は、神經質派と言はれる仲間の文學的表現にのみ、見られたのである。これはドイツ、ロマンティック徒の音楽狂、即ち音楽を崇拜するのみでなく、他のすべての藝術を音楽に歸せしめようとする傾向と結んで現れてゐる。例へばティークの作は既にこれを最も鋭い形式で現してゐる。彼は『プリンツ、ツェルビノ』中、花について書いてゐる、『花の色は歌ひ、その形は鳴り響く……色と香と歌は皆な一家族たることを聲明する』と。彼の

『マゲローネ』中に、音楽は「青い光の流れの如く」消えるのである。エルンスト、テオドル、ホフマンには、更に明白に病的である感官印象の混淆が見えてゐる。この混淆は特に彼が睡眠と覚醒間の状態に在る時、生じたのである。彼は言ふ、かやうな場合「殊に澤山の音楽を聞いた時には、色彩、音響、芳香の混淆がはじまる。それらは恰も同じ光線から神祕的に一緒に跳ね出し、結合して豈妙なコンサートを奏する様であつた。深紅のカーネーションの香は、異常な魔力をもつて私に働きかける。私は吾知らず夢見るさまとなつて、甚だ遠い處に、角笛の音の、かつ響き、かつ消えるが如きを聴く」と。彼は「クライスラー樂詩クラブ」と題するスケッチ中に、音響と色彩間の對應を作らうと試みたのである。その一部にかう書いてある。「(音楽の)芳香は、不思議な混ぜ合せの、燃ゆる輪の中に閃いた」と。

序に言ふ。ホフマンは公然のルソー徒であつた。彼は二十九歳の時の事を日記(一八〇四年二月十三日)に書いてゐる。「私はルソーの懺悔録を読んでゐる。たしか、これが第三十回目である」と。彼が始めてこの書を読んだのは、十四歳の時であつた。「私はルソーに非常に好く似てゐると思ふ」と。實にホフマン及び他のドイツ人は、ルソー主義から極端な結論を引き出し

て、フランス類廢派に先んじたのである。

色彩聽覺及び類似の現象は、初期フランス、ロマンティック派には、際立つて現れてゐない。アルフレッド、ド、ミューゼーが色彩と音を連結せしめたことは、殆ど偶然ともいふべきもので、この特異なことが、彼の詩に影響を及ぼしたとは言はれない。勿論、彼の詩には神經過敏の跡が多いのであるが、これは別物である。彼はジョーベル夫人に送つた書簡の中に、かう書いてゐる。彼の家族と議論して、*jaune* は黄、*rouge* は赤、ソプラノ聲はプロンド、コントラルト聲はブルネットであると證明しようとしたことを非常に遺憾に思ふと。彼はこんな事は論ずるまでもなかつたのだと考へたのである。この感官印象の混淆が重要となつたのは、全くボードレーからである。彼は「その諸感官が一つに溶解された神祕的變態」を夢想し、またそれを成し遂げるに、やゝ近い處まで往つてゐる。例へば、その一詩中に言つてゐる、「赤兒の肉の如く新鮮、タカイチゴの如く甘く、牧場の如く緑である芳香がある。其他、腐つたやうな、芳烈な、意氣揚々たるもの、龍涎香、麝香、安息香、馨香の如き、膨脹性の無數な物が、精神と感官の恍惚状態を歌ふ」と。ボードレーがこの詩中に、芳香を味はなかつたのは惜しいことだ。こ

れを味ひさへすれば、彼は五官全部、おまけに肉と精神の完全な混合に達したのであらう。彼は何時油断なく音を色彩に象徴しようと勉めたのである。かう言ふ逸話が傳へられてゐる。ワグネルがパリを征服しようとなつた時に、新音楽に十分の同情を向けてゐたボードレールは招待されてワグネルのピアノを聴くことになつた。ワグネルは最初、青い化粧ガウンを着、暫してから黄色ガウンに換へ、最後に緑色ガウンを着た。演奏の終つた時に、ボードレールは衷心からの満足の意を述べたが、羞しさうに一つ質問したいことがあると附加した。化粧ガウンの色の變化は音楽における何物かを象徴したのであらうかと。ワグネルは、このフランス人が自分を愚弄するのではあるまいかと、峻しい眼で見たが、ボードレールの誠意を諒として説明した。演奏中に暑くなつたから、重いガウンを脱いで、手近にあつた軽いものを着たので、色彩の變化は只偶然であつたと。(この逸話は一九〇八年十二月十七日の『ネーション』から借用したものである)。

ボードレールは洗練された『究極の薄暗いシュリー』(Théo.とは古代ギリシヤ人及びラティン人が世界の極北端の地を呼んだ語である。遠隔未到の地または極點の意)に到達したかのや

うに見える。然るにその門弟等は、尙更に珍奇な、遠隔な地へ進んだのである。我々はこの運動の最後の舞臺を代表するものとして、ユイスマン及び彼の小説『ア、レブール』(一八八四年)を挙げよう。ユイスマンは、この小説を著作するに當つて、ボードレールのみならず、ポーからも深く影響されたことが明白である。こゝで何故にアラン、ポーがフランスに重要な影響を及ぼした唯一のアメリカ文學者であるかが明かになる。ポーは只ロマンティックたるばかりでなく、極端ロマンティックで、我々がルソー及びその後裔中に研究した感性の表符を有つてゐた唯一のアメリカ著述家である。ボードレールとその仲間が、『モノスとユーナの對話』にあるやうな文章に吸引されなかつた筈はない。ポーのこの小説は、もはや呼吸こそ無くなつたが、未だ全く感覺を失ふまでに至らなかつた人の經驗を書いたものだ。精神は、もちろん他の存在状態からではあるが、その經驗を語つてゐる。『實に諸感官は、五の職能を勝手に執つて、偏奇ではあるが、異常に活動的であつた。味覺と嗅覺とは、解き難いほどにもつれて、變態的な、猛烈な一情操となつた。死の部屋に置かれた蠟燭の光線は、たゞ音響として私に感ぜられた。多數のランプがあつて、各ランプの焰から、私の耳へは、美しい單調子の旋律が絶え間なく流れ込

んだ。』神經遲鈍な者でも、この小説を読むと、奇怪な世界へ引きずられる。フランス象徴派が魅せられたのは當然のことである。

前記のやうに、ユイスマンは『ア、レプール』を書くに當つて、ボードレールばかりでなくポーからも刺激された。殊にポーの『片意地といふ腕白小僧』と題する一種の心理解剖談、及びポーが創造した異常な推理力や、洞察力を持つてゐるオーギュスト、デュバンの習癖に關する記述によつて、思ひついた事があるのである。『ア、レプール』といふ書名は、主人公デエセーントが、その意見及び動作において、世間とは正反對である事を意味してゐる。主人公の熱情は二重で、第一は平凡人に對してからかひ顔をすること、第二はポーの言ふやうに『彼自身を奇異な絶妙感に包み込む』ことである。彼は人生を藝術に、藝術を感覺に、而して感覺そのものを、夢想中において、各感官印象の音樂的總合のやうなものとする努力に歸着させようといふのである。この目的のために、彼はパリの寂しい郊外に『夢の村莊』を設立した。これは彼の五官に交響樂的變調を奏し、その曲から洗練された享樂の最大を搾り取れるやうに設計されたものである。例へば、デエセーントは食堂の壁にカポードを取り附ける。そのカポードには

相並んでゐる小桶の數列があり、各の小桶の底には、銀製の小さな栓が附いてゐる。彼はこれらの栓を互に連結して、鍵盤のやうなものとなし、その上に彼のロオルガンオルガンを奏し得るやうな仕掛になつてゐる。『オルガルが開かれたとする。笛、角笛、ツッ、セレスト天上音などと貼紙のある小抽斗が引き出されて演奏されることになる。デエセーントは、此處かしこから一滴づゝ飲み、自分の身内交響樂を奏し、音樂が耳に注ぎ込むと類似の感覺を、その咽喉に起して成功した』と。更にデエセーントに従へば、各種のリキル酒は味において樂器の音に相當する。キュラソーはクレリネットに、キョメルは鼻聲オーボイに、ミントとエニゼットは共にびりつとした甘いもので、笛に、キルシはラッパの鋭い響に、ジンとウイスキーはきい／＼いふコーニットとトロムボーン（共にラッパの一種）に、それ／＼相當する。その上、リキル音樂にも音調關係が存する。ベニディクティーンは青色シャートローズと知られたアルコールの長音階に對して近似の短調たるものであると。

『これらの原理がたびたび決定されると、デエセーントはその該博な實驗のお蔭をもつて、その舌の上に、無音の旋律、頗る壯麗な無聲の葬式マーチを奏し、ミントのソロ、ヴェスベトロオ酒

及びラム酒のデオを口に聴くことにおいて成功した」と。

ユイスマンは結んでゐる。だが、その夕、デセーントは『音楽の味を聴』かうといふ氣はなかつた。しかし彼は後に芳香のコンサートに耽る。各種の芳香は、彼の心眼にそれ／＼相應な光景を見せるのである。デセーントは確信をもつて、これらの對應は概して的確であると言ふ。しかし果してさうであらうか。一の芳香が二人の者に、同一光景を確かに暗示するであらうか。否、とにかく何かしら或物を暗示するであらうか。これがこの全事の難關である。一九〇二年に、ニューヨークのカーネギー、ライシウムで『アメリカにおける最初の實驗的芳香コンサート』なるものが催された。その呼物の中に『十六分間にて日本へ漫遊』といふのがあつた。これは入場者に、芳香の連続で漫遊の感を起させるのであつた。しかし夢の集會莊に到らうといふ試み、即ち全聴衆が皆な同一の様子で、覺醒上の暗示に應ずるやうにといふ、この種の如何なる計劃も、失敗の運命を擔つてゐるものである。恐らくそれは聴衆の覺醒に訴ふるのでなく、遙かに健全な官能、即ちユーモアの感に訴へるものである。ニューヨークの實驗に起つたことは、正にこれである。

音によつて色彩を暗示しようとする計劃（及びその反對の場合）と同様な計劃は、同じ運命の下に在るのであらう。これらの假定された對應は、救済して見ようもない主觀性に掩き込まれてゐるのである。音を見、色彩を聞くといふ習慣の人々の陳述を調べて見ると、笛は或者に赤と見え、他の者には空色と見えるさうだ。ラッパは或一人には緋で、他の一人には緑である。この他は推して知られる。アルツール、ラムポーは明言してゐる、aは黒、eは白、iは赤、uは緑、oは青である。ところがルネ、ジールには、母音は全く異つた色を暗示する。その言ふ所によれば、oは青でなく、赤であると。これがアナトル、フランスの名づけてゐる『マラルメのあまい眼の下に在る鋭敏な病身者』の議論を交へた點である。こゝでも他所におけると同様、ロマンティック暗示趣態の最後の段階は、不可解な象徴主義である。數年前、パリで色彩聽覺藝術の學校を設立しようとした計劃に似てゐるものは、永遠に無駄であらねばならぬ。色彩聽覺及び同様な現象は、藝術の一そう高尚な、一そう高雅な目的とは、殆ど關係ないものである。藝術及び文學の評論家には、これらも興味ある奇妙な問題であるが、それ以上何物でもない。これらは心理學及び醫學の研究者、又或場合には神經病専門家と一そう直接の關

係をもつものである。

實際のところ、ユイスマンの主人公は、自身に試みた様々な「該博な實驗」の後、遂に元氣沮喪して、小説の終には神経病専門家の手に引き取られるのである。ルメートル氏が言ふやうに、デエセーント自身だけ見れば、たゞ「甚しく複雑な愚物」であるのみだが、その頑愚な點において、普通よりも深い意義をもつてゐる。彼は一技藝の終局にふさはしい象徴である。その技藝とは、感覺の探索以上に出づることを拒み、なほ感覺の上に想像的幻影の魅力を投げかけて、この感覺を強めようとするものである。デエセーント一派の極度の誇張を示すものとして、彼の口オルガンは、著者が第三章の終に言つたやうに、教父カステルの色彩の樂器と共に等しく症候的である。何事をも暗示に歸する點において、デエセーントは只彼自身の行き方で實は益す一般的となるものを表現してゐるものである。我々は催眠術から治療學に至るまで、何事においても暗示力に關して發狂した時代に生存してゐる。舞踊術すらこれに感染して、單純に舞踊として立つことに満足せず、是非とも或他の事、例へばギリシヤの瓶とか、或はペートーヴェンの交響樂とかの象徴及び暗示たらねばならぬといふのである。さてすべての藝術が

このやうに落着かず、また印象主義的であるとすれば、その理由を探るに難くない。これは、これらの藝術を作る人も、またこれらを迎へる者も、共に印象主義的動搖の内に棲んでゐるからである。藝術が品位、求心性、沈着を缺いてゐるとすれば、それは現代の人々が中心を有せず、彼等自身の内にも外にも、固定した、もしくは不易な何物をも持たず、諸現象の流轉と印象の激流に對抗し得ないからである。約言すれば、混淆が藝術に侵入したとすればこれは一そう一般的な疾病の特殊な一面に外ならぬのである。即ち感傷的及び科學的自然主義の無節制の一面である。若し著者の診斷が正しいならば、西洋は今日この主義のために悩んでゐる。故にこゝに残つてゐる問題で、我々の考ふべきものはかうである。この自然主義に對し、相應な程度において反作用し得る何等かの方法があるかどうか。生動的と自然發生を終熄させることなく、又決して形式主義に歸らないで、人文主義の標準を蘇生させる方法はないかどうか。これが緊要な問題である。(感傷的及び科學的自然主義の區別については、附録「二」の「人道主義派の二典型」を見よ)。

第七章 結 論

第一節 自然主義の限界

前章に至るまで論評した藝術及び文學に關する理論を回顧すると、それらは兩極端間に生ずる振子運動のやうなものである。形式主義の極端に次いで印象主義の極端が起り、擬アリストオ徒が擬アリストートル徒に次いだのである。新古典派は諸藝術を客觀的に（通例繪畫の辭で）混淆し、ロマンティック派はこれらを主觀的に（往々音樂の辭で）混淆したのである。レッシンは言ふ、「どんな事にでも、爲し過ぎもせず、また爲し足りぬこともないのが古人の特權である」と。人間は自分を見て、眞理を愛する者と思ひがちである。しかし、今のやうな問題を歴史的に辿つて見ると、人はむしろ半眞理の愛好者であると言ひたくなる。勿論多數の人は、どんな有效意義においても、半眞理すら愛すると言ひ難い。人間は何よりも幻影に飢ゑてゐる。その幻影とても、必ずしも複雑であるを要せぬ。感官の極めて簡單な幻影でも、通例は十分に

ある。傲然たる一フランス道德學者は言ふ、普通の人間を作り上げる場合に入り來るもの總てには、少量の虚榮心と少量の肉慾耽溺が附くものだ。まさにその通りで、普通人の見解のためには一事を言ふべきである。彼は人生の幻影に——イラズマスは愚昧と呼んだらうと思ふ——公然と降服して満足する、その満足は、哲學者が眞理の困難な摸索から得る満足よりも、一そう強いものである。「愚昧のカップにもなほ泡の喜悅が笑ふ」。

若し哲學者が、殆ど進入し難い幻影の帷を越えて、或物の瞥見を得れば、それが善く見ても半眞理でしかないものを、全眞理と思ひながちのもので、かくて偏頗となり、狂信的となるのである。半眞理は屢ば組織立てられ、世界に向つて壓制的に押し及ぼされ、世人はその眞理が既にその役目を果した後までも、永くこれにしがみ附くので、この時、どちらかと言へば、その眞理の或反對面を強調する必要が起きるのだ。これが人性の盲目のおもな形で、ギリシヤ大詩人等は明かにこれを認めてゐた。死物狂ひの執拗さで、半眞理にしがみ附いて、ネミシス神の近づく影を見誤るのがこれである。この意味において、かう言ふも可からう。人はその長所の無節制から免れ得る位ならば、その短所について用心することなどは頗る容易であると。

人が半眞理に執拗に縋りつくのは、確信からばかりでなく、また怠慢の故でもある。人は流行となつた半眞理に専屬的に服従することを辯明するために、古からの怠慢の機嫌取りに用ひた無数の詭辯の一を常に用意してゐるのである。全くジ・シユア、レノルヅ卿の言ふやうに、人が「眞の努力即ち思索といふ眞の努力をこまかし、回避」するために、手頼りとしなかつた考案は一つもないと言つて宜しい位である。ジ・シユア卿が、模寫の作成は「心の努力を要しない」、また模寫をなすと「選擇なしに模倣し、確乎たる目的なしに働くといふ危険な習慣」を作るから、これを避けたと言つてゐるのは、彼が新古典派の怠慢に對して警戒してゐた事を示すものである。さて新古典派の機械的模倣といふ懶惰に代へるに、ロマンティック徒は冥想といふ懶惰をもつてした。たゞ放縱となつてしまつた自然發生がこれである。ワーズワースは我々に信ぜしめようとした、賢者たるには只「古色蒼然たる石」に坐して「冥想に時を費せ」ば足ると。勿論ワーズワースは、こゝに重要な半眞理を瞥見するのであるが、その半眞理は少くとも、それ自身において危険であること、ちやうどモデルの模倣に關する新古典派の半眞理のやうである。その上、ロマンティック懶惰は「確乎たる目的」即ち目標を有せず、また眞に選擇的でない

點において、新古典派の懶惰と似てゐるのである。

だから人間は、熱情と確信をもつて半眞理を固持するが、しかも興味ある見解に達するに比例してのみ完全になるといふ點で、生きたパラドクス（語逆理順の言）である。眞の人文主義的方法の要義は數極端の調停である。この調停は、勿論有効な思索のみならず、有效な自己修養を要するのである。古來、眞の人文主義者は極めて稀であつたといふのは、疑もなくこの故である。しかし、我々は或者が相反する長所及び半眞理を調和して、多少進歩したからとて、それで眞理に到達したと假定してはならぬ。絶對の全眞理は當然に無限であつて、人間のやうな有限貧弱な者の手に合はぬものである。どんな人でも、その爲し得る最上は、眞理の方へ向ふ事であるが、その人が或瞬間に到達した部分といふものは、これを残つてゐる部分に比較すれば、ほんの僅少なもので、非常に小さな斷片に外ならぬ。そこで人が、この僅少なものを公式にしようとするれば、そのためこれは偽の究竟性と凝結してしまふ危険が生ずるのである。どんな人でも、全眞理を得たと思ひ、これを公式に詰め込んでしまふ者は、自ら稱して神學者、科學者或は哲學者と言はうとも、それは理智主義的或は形而上學的幻影の誤謬と言ふべきものに

囚はれて悩むだけのことである。しかし、眞理は終に公式となし難いと言つても、人は公式を省略し得ないのである。眞理は人の作つた範疇外に何時も溢れ出てゐるが、しかも人は範疇を要する。だから人は公式と範疇を持たなければならぬが、これを流動するやうに保たなければならぬ。別言すれば、人は標準を持たなければならぬが、その標準は柔軟であらねばならぬ。人は法則に信を置かねばならぬが、信念は生動的であらねばならぬのである。

本書の第一部において研究した新古典の論者は、明かに法則を信じたが、その法則は餘りに硬く、文字通りのものであつた。彼等は流動と相對の世の中に、不易の法則を建てようと試みたのである。例へば、ブアローは、文學上の體制について、これは永劫まで固定したものゝやうに語つてゐる。またレッシングが、アリストートルの『詩學』はユークリッドのやうに絶對無謬であると斷言してゐる所は、餘りに頑固な法則感を示してゐる。彼は少くとも非ユークリッド幾何學の可能を許容すべきであつた。レッシングの劇法則の理解は、餘り窮屈に規定され過ぎてゐるが、しかもなほその行き方で生動的である。然るに初期アリストートル派に見えるものは、多少神學的精神のジズイットの修繕で、これを文學に應用したものである。この感化の下

に法則の概念は流動的また生動的でなくなつて、機械的規則と凝固したのである。

新古典規則の大多數は、それ自身において半眞理の重要な一組を示してゐる。ルネサンスの人々が、古代均齊を瞥見した場合に、彼等に見えた半眞理がこれである。ギリシャ、ローマの傑作と、中世紀の作品の對照は、彼等から見れば、有形式と無形式の對照であつた。リオナルドオのやうな人でさへも、古代均齊の回復において失敗したと歎いてゐる。しかし彼は少くとも古人を生動的に模倣した。然るにアリストートル派強辯家の多數は、古人を外面的及び機械的に模倣すること、古代均齊を回復し得ようといふ望を立てたのである。

強辯家が會得してゐた形式の名において、彼等は中世紀ロマンスに對して戰鬥を進めたのである。その戰役は嚴正な學者及び思想家によつて、從來よりも一そう用意周到に研究さるべき價值あるものである。スピング教授はその著『ルネサンスにおける文學評論』中に、叙事詩黨と、ロマンス黨の議論の概要を摘記してゐる。著者が既に述べたやうに（八九頁參照）ロマンスを攻撃し、またその目的の缺如を證明するために用ひられた武器の一は『實らしい事』といふ觀念であつた。ロマンスに對する攻撃の要旨は、強辯家等が會得してゐた意味における

統一、適度、目的を缺いてゐるといふことである。ロマンスは何處からでも勝手に始まり、また何處でも勝手に終る、これは省略と選擇の技藝を缺き、或一定の目的の下に、事件を服従せしめないものである。かやうに、アリオストは主人公の單一な重要行動を取扱ふ代りに、その詩の冒頭において、淑女等、武士等、軍兵その他様々の事を歌ふ。これは單にロマンティック冒險の雜俎に外ならぬと。そのためにアリオストは、強辯家の多數から非難され、タソクは古代均齊に、より多く接近してゐると賞讃されてゐる。然るに、かやうな事柄に關して價値ある唯一の標準、即ち心理學的試驗によつて判斷すれば、アリオストの方が、タソクよりも一そう古人に近いのは論の無いことである。別言すれば、強辯家等は表面以下まで及ばなかつた。彼等は、入念に抑制され、大いに統一され、無上に有目的である藝術及び文學を欲したのである。しかしその抑制、統一、目的を説明するに當つて、彼等は誤つて形式と形式主義を區別しなかつた。その上、新古典信條は集中の時代に、一定の形を取つてしまつた。その集中なるものも、生動的たるよりも、形式的であつたのである。そこで古人模倣には、専ら集中の長所を強調した。初期ルネサンスに當つては、集中の長所と共に、膨脹の長所をも説いたらうと

思はれるが、擬古典派に至つては、後者を等閑に附したのである。

だから膨脹の勢力が再び優勢であつた時には、新古典規則は只技巧的、慣例的であつて、生動的又自然發生である總てのものに致命的抑制を加へると感ぜられる様になつたのである。こゝに半眞理の一組から、他の一組に至る激しい振子運動が起つた。この運動は人類の歴史に珍しいものでなく、ルーテルが馬上の酔らひ農夫のぐらつく様子に譬へたものである。ロマンティック運動は大低の運動よりも、一そう強く既往の何物にも對抗しようとする野心によつて鼓吹された。新古典派は、統一、適度、目的及び法則そのもの、觀念を、たゞの形式主義に改めた。ロマンティック派は形式主義を驅除しようとして、同時に統一、適度、目的及び法則そのものをも逐ひ拂はうとしたのである。彼等は無目的、無法則で不斷のパラドクスに生存しようとして欲した。例へばテイクの劇である。これは諸藝術のごたませで、種々の體制、即ち叙事詩、抒情詩などの混合であつて、劇を支配するものと思はれてゐた法則すべてに對する深慮の挑戦である。我々は理論上、これらの法則は絶對のものでないことを許すが、さりとて實際の上では、眞の劇的效果を目的とする人が、テイクの爲したやうに、これら法則に向つて正面から喰つて

かゝることは、引力の法則に反抗すると同様に考へものである。この引力の法則とても、最近の學說に従へば、また絶対に遵奉すべきものでないが、これを全然無視することは、實際上變なものであらう。

特にドイツのロマンティック派の無法則と無目的について、かなり多くを語つたが、この點で他の多くの點におけるやうに、彼等の前には、ルソーといふ先發者があつたのである。ルソーは放浪氣分、即ち近世文學に滲透してゐる一定目的からの解放といふ喜悅を既に言つてゐる。しかし、その弟子の多數が持つてゐたよりも、一そう申分ない藝術で、これを表白してゐる。彼は言ふ、「私は、ほんに詰らぬ事に忙しい思をなし、百般の事を始めて一事をも完成せず、氣まぐれに往きつ戻りつし、各瞬間に計劃を變更し、蠅の運動すべてを追ひ、石を上げてその下に何が在るかを見、十年もかゝるだらうと思はれる仕事を熱心にやり始めて十分の後に惜氣なく止めることが好きだ。要するに、秩序も連絡もなく終日黙考し、萬事について刹那の氣まぐれのまゝに動くのである」と。この文章と、アリストートルの語、即ち總ての内て目的が最も重要であるといふのを比較すれば、人生と藝術の見解で、我々が想像し得る限り甚しく相違し

てゐる二つを見るのである。

ルソーが倦まず我々に語つてゐるやうに、彼はその情緒的衝動に加へられる如何なる抑制をも恐れたのである。彼は或特殊な障壁や限定ばかりでなく、障壁や限定ならば何であらうと、蹴飛ばすのである。彼が自由を語る場合は、代表的イギリス人（例へばバーク）の言ふ自由、即ち法則によつて規定され、制限された自由のことでなく、無規定の自由のことで、それは、たゞ同情によつて調節されたもの、又その同情は何物によつても加減されてないものである。無規定の自由と無選擇の同情とは、ルソーによつて開かれた運動の重要な二面、むしろ兩極であつて、この運動はその間を往復するのである。或ルソー主義者は同情を持ち上げて、殆ど自由を除外してゐるほどであり、他の者は殆ど同情を除外して、自由を稱揚し、また或者は同情と自由の兩方を崇めてゐる。その愛と自由といふ語の響で、彼等は熱情の波を起して、我々の足をさらひさうである。實に彼等は、これらの語を冷靜な検査にまかせるのは、殆ど瀆聖であると思つたのである。しかし、どんな法則の上へでも、殊に人間が、限りこそあれ、多少知つてゐる最高法則、即ち適度法則の上へ立たうとする愛と自由について、我々はどう考ふべきで

あるのか。愛と自由に關するこの概念は全く美質でなくなり、病的となるだらう。だから、この病を無政府的と言つても可からうが、無政府といふ語は、やゝ特別な意味をもつやうであり、また他に適當な語がないから、我々はこの疾病を指して、自由狂イリウイカノニアと言つてもよからう。

自由狂とは、たゞに外部及び人爲の制限ばかりでなく、制限ならば何であらうと、これを放棄しようとする本能であると定義して可からう。例へばフリードリヒ、シュレーゲルが『詩人の氣まぐれは、自身以上の如何なる法則をも許容せぬ』と言ふ場合は、自由狂的である。過去のどんな大詩人、例へばダンテには、かゝる發言は恐しい瀆聖と思はれたであらうし、さう考へるダンテは甚しく誤つてゐなかつたらうと思ふ。またトルストイは同情の思想において自由狂であり、ニーチェは自由の思想において同様である。實にこの二人は著者がルソー主義の兩極端と言つた處に立つてゐるのである。勿論或一人が、愛或は自由の強調において、どんな點まで無節制に傾いたかを決定することは、非常に面倒な仕事である。バイロンの自由思想とシリイの同情思想には、共に明かに自由狂が見えてゐる。しかし、これらの自由狂には、少くとも或辯解が成立するのである。これらは、その時代の社會にあつた保守主義コンセルヴァティズムの無節制に對する抗

議であつたのである。ところで今日、無節制といふ事は甚だ異つた種類のものとなつてゐる。社會は紀律と抑制の過多よりも、むしろその缺乏から惱んでゐるのは明白である。近世藝術家の多數巨匠は、例へば、ユーゴー、ワグネル、イブセン等は、いづれも自由狂であつた。過去一世紀以上、世界は反抗といふ同一料理で養はれて來た。だから、どんな人にも自由狂の氣味がある。その義務よりは權利と親交して、益す制限を甘諾しなくなつた。我々は皆な知つてゐる。近代女性に向つて、女性には何かしら『範圍』があると暗示するのは甚だ危険であること。實に若し男子が自由狂たり得るならば、何故に女子が同特典を拒まれるのか、と言ふ理由を見つけるのは困難である。そこで今の豫想はかうである。社會が眞の自由と同胞情態と、一方、狂を美化するルソー流藝術の特別な一形式に外ならぬ自由と同胞情態の差別を學ぶ迄にはその手を甚しく焼くことであらう。

我々は多くの現代意見の面前において、次のやうに斷言する勇氣をもつべきである。人は、普遍的同情の名においてなく、一そう高尚な法則の名においてのみ、外部法則を破棄し得るのであると。この點においてリヒアード、ワグネルとギリシヤ人の藝術の相違を明かにすべき

である。ワグネルはギリシヤ人の藝術精神を復活すると主張してゐる。そこで、ワグネルに従へば、諸藝術は自由の精神によつて鼓吹されて、肉慾的に融合するのである。しかるに我々が現にギリシヤ劇に見るものは、諸藝術と體制の柔軟な相互作用で、それは微妙な制限によつて支配されてゐる。アンドレー、シェニエーがギリシヤ藝術について言ふやうに、『いかなる體制も、規定された境界から踏出すからとて、國境を越えようとしなかつた。』ワグネルはアンティゴニー物語を、人道主義の象徴と作り替へようといふ企において、殆ど厚顔無恥に近いのである。彼は言ふアンティゴニーは、國家の苛酷な法律に對して、全人類のための愛を對立させると。しかし、實はかうである。アンティゴニーがクリオンの布告を犯すとすれば、それは彼女が斷言するやうに、更に高尚、更に神聖な法則に服従するためである。その法則とは、諸天において永遠な不文律であり、今日や明日のものでなく、無窮より存在し、また、それらが何處から發生したかは、誰も知らぬものである。

一言にすれば、ソフ・クリーズの描いたアンティゴニーは、自由狂的でなく、一個の文明婦人である。外部の權威からも、或は氣質の衝動からも異つてゐる或物としての大切な法則の感

を持つといふことは、一般に、最高或は唯一眞正な文明の證據である。

もちろん著者は内部及び外部の法則に對する熟慮の上の反抗が、近世運動全部の標であると斷言するのではない。この運動の只一面——ルソーと關聯してゐる一面——が故意に無政府主義的であつたので、近世運動は一人或は數人の仲間によつて代表されるには、餘りに廣いものであつた。しかし過去百年間に見られ、又實に多少ルネサンスから始つてゐる自然主義的人生觀に至る推移の或結果を見落してはならぬ。これらの結果の一は、人性の法則は、物性の法則と異つてゐる或物であるといふ觀念の衰弱したことである。エマースンは言ふ、『互に分離して、融和しない二法則がある。一は人の法則、他は物の法則である』と。然るに純自然主義者には、只一つの法則しかない。即ち物の法則これである。さて、誰でも人間と現象の自然を、科學的或は感傷的に同一視する者は、たゞ膨脹の長所のみを尊重するやうになるのは、殆ど避け難いことである。なぜなれば、自然法則に従へば、生長するとは膨脹することであるからだ。ディドロと同時代の人は、彼を膨脹的人と言つた。この點においてディドロはルソーのやうに、第十九世紀の本當の祖先である。見本的に第十九世紀人であつた者は、皆な膨脹的であつ

た。例へばディケンズを見よ、その人生観はいかに純粹に膨脹的であつたか。又彼の天才は疑ないものであるにも拘らず、その藝術は膨脹趣態の無節制から、いかに損はれてゐるか。諸家の評はこれを指摘してゐる。感傷的自然派は、情緒的に膨脹しようとして、情緒に制限を加へようとする何物をも嫌ふ。科學的自然派は、永久に知識と能力を増加しようとし、この増加に限界を定めると思はれる何物をも尻目にかけるのである。

科學的及び感傷的自然主義者に頓着せず、我々は、人と物とに各の法則があると言ふことのみならず、この二法則は何故に分離し、また融和しないかといふ實際の理由を示し得ると主張しなければならぬ。若し自然現象としての人が、膨脹によつて成長するとすれば、人としての人は集中によつて成長する。人は活動する能力を有してゐると言ふ事よりも、活動を避ける能力を有してゐると言ふ點で、自然以上であることを證明するのである。エマーソンに従へば、東洋人は神そのものを定義して「内部の抑止」と言つてゐるさうだ。著者は、この通りの語のある東洋書籍を見たことはないが、洋の東西を問はず、眞に宗教的である各書籍中には、この思想が見られるのである。

知識と同情の擴張の主な効用は、集中及び選擇の緊要な瞬間、乃ち、人がその特殊な職能を活用する瞬間のために、一そう十分な準備を調へるといふことであらねばならぬ。さて正しく選擇するには、正しい標準を持たねばならぬ。正しい標準をもつことは、實際上、人は自身の衝動に常に制限を置かねばならぬと言ふ意味である。人が人性に適當な完全状態に達するのは抑制と克己の發達に大約正比例するのである。故に新古典の人文主義者が集中法則——統一、適度、目的の法則を最高法則と見たのは、結局正當であつた。たゞ彼等は、この法則をたゞの形式主義と化してしまつたから悪かつたのである。しかし感傷的自然派は、形式主義を排除すると同時に、統一、適度、目的をも棄て、只の情緒的膨脹に身を委せてしまつた點において、新古典派よりも一そう重大な間違をしたのである。これは實際において、人性の特別な法則に關する思想を放棄することを意味するのである。法則といふ語は實際において、或孤立の事實或は現象の或數の間に、因果律の連鎖を立てることを意味する。而して人性の事實間に、因果律の連鎖を立てようと眞面目に試みる者は、膨脹の外に、他の勢力あることを、直ちに認めるであらう。かつまた、過去の經驗すべては、恰も數千の舌のやうに、その經驗を不完全ながら

公式とした種々な信條及び組織を通じて、最高の人間法則は集中法則であると叫ぶのである。そこで感傷的自然派は、此過去の經驗の何物をも要しないのである。彼は「彼以前、何人も生存しなかつた」やうに生存し、純粹に膨脹的に續けて往かうとて、理性以上の物の代りに、理性以下の物を祭り上げようとするのである。著者は現に聞いたことがある。ソファクリーズは「コロナスのエディパス」を書いたから、ロマンティックと稱すべきだと。しかし、子供の驚異の念と、この劇の後半を覆うてゐる宗教的畏敬との間に、どんな關係があるのか。かやうな差別を見落すのは、子供らしいのではなく、子供たることを暴露するものである。

前世紀のロマンティズム全部が、皆なルソー主義の型であつたといふわけでない。その多數は、人間精神中の常態なロマンティズムと呼びたいものに外ならぬ。原因結果の搜索よりも、むしろ假作物、不思議、冒險、意表へ向ふ嗜好がこれである。しかしロマンティズムすべての形式は、自然主義的運動から、大きな刺激を受けた。サンタヤナ教授は「ロマンティック劇には、偶然の出來事が、過敏な冒險者の無意味な幸福或は不幸を作る」と言つてゐる。今日、ロマンティック劇は重要な體制でなくなつたが、しかもサンタヤナ教授の言は、現今、勇氣と活

力を得た唯一の文學形式——小説——に應用するも、大概の場合、均しく適切であらう。

小説は一の體制で、新古典派はこれを規定しなかつた。これは疑もなく一つには、彼等がこれについて勞する程の値打がないと思つたからである。小説には形式上の法則も、限界もなかつたから、ルソーが「新エロイズ」に示したやうに、自由な情緒的膨脹には見事適合したものである。小説は文學形式中、有目的たること最も少く、感情の漫步、又ロマンティック意味における「靈魂」の氾博な横溢には、頗る自然に役立つものであるのみならず、なほまた寫眞的寫實主義——即ち選擇なしの藝術を極めて容易に容れるものである。小説の勝利は、形式に對する無形式の勝利でないにしても、少くとも集中に對する散漫の勝利であつた。フリードリヒ、シュレーゲルが、小説を稱揚して、文學形式すべての混淆のやうなもの、即ち彼が夢想した人性混沌の眼に見える具體的表現であると言つたのは、彼自身の見地からすれば正當であつた。彼はその小説「ルチンデ」中に、殊更に諸體制の混淆を試みたのである。

感傷的自然主義と第十九世紀における小説の異常な發達の關係は明かである。その發達と科學的自然主義の關係は、さほど明瞭でないが、しかも深いものである。なぜなれば第十九世紀

は、數世紀中、最もロマンティックであつたのみならず、また最も分析的であつた。第十九世紀は人生を純粹に冒險として見るとは遙かに異つて、活潑に原因結果の突きとめに従事して、法則の觀念に到達したのである。ところで、その詮索した法則は現象界の法則、即ち「物の法則」であつた。さて自然に關する科學的研究とルソー派の言ふ自然との感傷的交通とは、一見すれば根本的に違つてゐるやうである。殊にロマンティック徒の多數が、科學に向けた攻撃（これはルソー自身から始つてゐる）を想ひ出すと、さう見られるのである。しかし、この相違は本質的たるよりも外見上だけのものである。第一に、科學者は分析の破魔的効果を歎くロマンティック派の言を、決して大眞面目に受取らなかつた。科學者は、彼自身の覇權は、いかに多數のロマンティック派が押し寄せようとも、脅かされるものでない、彼は一そう強力な、一そう男性的な個體であると知つてゐる。なほまた科學者は、ロマンティック論旨に眞理の一要素を認める。科學者は分析が事物を干物にし、その美觀を殺ぐことを認める。科學者は、この美觀を回復すること、自然發生と無意識に跳び込むこと、また純樸と原始的を涵養すること、これらの必要を感じる（勿論、すべて分析に當然の服従をなしてのことである）。ジョン、ステュアート、ミル

が、ワーズワースの詩を読んだのは、この精神であつた。これは實に科學者のみならず、近世人一般の藝術文學に對する常態の關係である。近世人は、のぼせ上つて物質の征服と、この目的に必要な嚴密な因果律的連續の探究に従事してゐる。彼が文學に來る時は既に分析と原因結果で腹一杯になつてゐて、むしろ心を弛緩させる或物、純樸、非論理的、豫想外の或物を渴望してゐるのである。彼は暫くの間、不思議國におけるアリスの角度から人生を眺め、或はピーター、パンの見地に納まり、或はまたおもちや國の赤ちやんの一人とさへなるのである。彼は軽い小説、狂文綺語、喜歌劇などを待ち受けてゐる。而してロマンティック徒は、これらの物を彼に供給する用意をしてゐるのである。なるほどロマンティック派は、しきりに莊嚴な理想家であると主張する。しかし、一定の人間法則の感と、それが意味する訓練を失つてしまつたので、眞實のところ、ロマンティック徒の役廻りは、分析からの休養を欲する人々、即ち疲れ切つた語學者、或は疲れ倦んだ實務家、これらの人々に食物を調進する方に縮少されてゐるのだ。こゝに、近頃における小説のすばらしい流行の説明、並に藝術と文學が、専ら婦人及び男性的でない氣分の男子に訴へるやうになつた理由があるのである。（ミルはその自傳中にかう言つて

ゐる。ワーヅワースの詩が予の心理状態に良薬となつたのは、それらが外面の美のみでなく、美の躍動の下に感情及び感情によつて彩色された思想の模様を表現するからである。その詩は予が求めてゐた感情の教化であるやうに思はれた。ミルは思索生活の結果、心理の均衡を保つためには、感情の涵養が必要であると氣付いて、一八二八年の秋、初めてワーヅワースの詩集を読んだのである。それまでに、彼はバイロンを読んだこともあつたが、さほど感服しなかつたらしく、ワーヅワースに接して、大に感激したのである。だから彼はこの詩人の詩集を開いたことは、その生涯中の一重要事件であると言つてゐる。しかし、ミルの態度と疲れた連中のそれとを全く同一であると思ひ込んで、錯覺を懐くことにならうと思ふ。

科學的及び感傷的自然主義の奇異な交互影響を探らずに、第十九世紀を理解する望は立たない。第十九世紀の大代表者の一人で、また恐らく近世言語學者中の最大代表者たるルナンを取つて具體的に例證しよう。彼は言ふ、「人は理智的に發達するに従つて、益す正反對な極點、即ち不合理、完全な無智における安息、只女である女、即ち朦朧たる意識の衝動のみで動く本能的人間などを夢想する。推理によつて焦がされた腦が、單純を渴望するのは、恰も沙漠が清水を

求むるやうである」と。別言すれば、理智上の無抑制は、無抑制の情緒主義によつて緩和さるべきである。「思辨の不節制」は「乾燥の瞬間、無味の間」を生ずるもので、「自然が生存し、また笑つてゐる純樸な者のキス」で、埋合すべきである。これが第十九世紀タイタンの夢である。この巨人は天へ登らうとして、理智のピリオン山頂に、情緒のオサ山を重ね、或は萬事に——知識慾の上にさへも——適度を命ずる法則を認容することは爲さないで、その他何事をも爲さうとするのである。(ピリオンも、オサも共にギリシヤのセサリーに在る山で、傳説によれば、其昔巨人等がオリムパス山へ登るため、ピリオンの頂にオサを積まうとて、これを轉がして來たのだといふ)。こゝに輕卒と思はれる恐れはあるが、附言したくなる。宗教的抑制の代用としての「純樸な者のキス」すべては、頽廢の氣味があると。更にルナンの意味における只女である女は、截然たる一體制で、益す稀になる類である。どんなルソー徒も、その先生のやうに運好く、テレーズ、ルヴァシユールのやうな女性を見出し得ることは望み難い。(テレーズはルソーがパリの下層階級から拾ひ出した女で、無教育な、野鄙な、慾張な嫉妬深い性質の女であつた。ルソー自身は、自然のままの女はこれであると思つたのであらうが、誰が見ても彼等の同棲は、雙方のために

不幸であつた)。

ルナンが自然法則の研究と結びつけてゐる乾燥無味は、少くとも幾分かは、この法則を余り窮屈に解釋することに歸するのではあるまいか。第十九世紀人について記さるべき顯著な一點がある。若し彼等が人性の法則をだらしなく守るか、或は全く守らなかつたとすれば、彼等は物性の法則を嚴格過ぎるほど守つて、その埋合せをしたのである。別言すれば、この期間を通じて、人は人性の法則に關して印象主義者であり、物性の法則に關しては獨斷家であつた。人の法則と物の法則とは、多くの點において異つてゐやうが、重要な一類似點がある。いづれの法則も決定的に規定され得ないといふ事、その理由は簡單である。兩法則共に、無限に手を附けてゐる——前者は無限に大きなもの、後者は無限に小さなものにつかまつてゐる。パスカルの言つてゐる二箇の無限とは、この事である。彼は言ふ、人は堅固な地盤を發見し、その上に無限にさへ達する塔を建て得ると考へる。しかし、その希望が最高度にある瞬間において、地盤は割れだして、奈落へ迄も開くと。第十九世紀の科學的獨斷家等は、この種の塔を建てたと想像したので。彼等の或者は著者が理智主義の誤謬、或は形而上學的幻影と名付けたもの、好例であつ

て、中世紀のどんな神學者も亦この類であつた。さて公式の醜陋と呼んでも差支ないのを、テ—ヌよりも更に深めた神學者が會て在つたらうか。彼は當時の哲學及び科學の感化を受けて、一定の公式によつて、様々の歴史を説明しようとして試みた。その適例はイギリス文學史である。科學の思索の多くは無限に小さな物の究竟の眞理の要義を掴み、これを公式にしようとする人間精神の死物狂の緊張振りを現したものに外ならぬ。かやうな公式化は、これ永久に避けなければならぬ。これは恰も神學の或型が、無限に大きなものの要義を掴み、これを公式化さうと試みたと同じく徒勞である。しかし、幸に一の相違があることを録さねばならぬ。會て人は三位一體に關して正教派でなかつた爲に、火刑に處せられたが、今日は原子や電子に關して正當な見解を持たないからとて、その心配は無いのである。

さて今日では、科學者等自身の中に、獨斷的氣質が減少して來たのである。第十九世紀中頃の人々には、頗る堅固と見られた理智主義塔の基礎も、既に眼につくやうな割れ目を生じたのである。これは實際上では科學者等が法則觀念を一そう流動的に採るやうになつたことを意味する。例へばポアンカレ氏はその著『科學の價值』、これはフランスで通俗小説のやうに賣れ

廣まつたもので、その書中に言つてゐる、科學は決して精髓に達し得ない、科學的法則は高々關係状態の假りの、また大凡の表現だけのものであると。ポアンカレ氏の著を、ヘッケルの『宇宙の謎』のやうな書に比較すると、科學的獨斷主義には、なほ改善の餘地あるが、しかもそれが幾分か減少したことを認めるのである。若し人間の物性に關する知識は、人性に關する知識のやうに、常にたゞの瞥見、非常に小さな断片であるといふ認知が地歩を占めるならば、科學的タイタン主義と言ふべきものに對する反作用の希望があるのだ。そこになほ眞の謙遜、即ち精神が自身よりも高い或物に對する内的敬禮、これは殆ど失はれた美質の一つであるが、その美質の回復を見うるかも知れぬ。

勿論、科學的理智主義に關する信仰の減退は、單純にルソー主義的極端に赴く振子運動となることもあらう。實際のところ我々が、ジュームズ教授或はベルグソン氏のやうな現代哲學者に見るものは、これである。ベルグソン氏の見解は、或科學的獨斷家が、人間精神の上に強ひようとした苛酷な、狭苦しい決定論に對する反抗であると同時に、創造的自然發生の辯明である。しかしベルグソン氏は、自然主義の境界外に踏み出してゐない。彼の自然發生はルソー的で、

プレトオ的でない。即ちその狙ひ所は生動的膨脹で、生動的集中でない。この點においてベルグソン氏の用語で、大流行となつたもの、例へば生動的衝動及び内的推進などは意義がある。プレトオ徒の關與する要點は、人性の奥底から湧出すると思はれる或物、それは衝動としてではなく、むしろ衝動の上に法規と抑制を置くもの、即ち生動的衝動でなく、生動的抑制として感ぜられる或物であつたらう。硬い決定論に對するベルグソン氏の反抗はドイツ、ロマンティック哲學者の或者を思ひ出させる。この決定論では、科學的眞理に關する過度の分析的及び機械的概念が、自然も人生をも共にこの内に押し込めようとするのである。しかしベルグソン氏とドイツ哲學者等とは、相違してゐる點も多く、その一を挙げれば、ベルグソン氏の思想中に在るルソー主義的要素、その生動的及び自然發生を稱揚すること、これはシェリングやシュライエルマヘルが頻りに爲すやうな擬プレトオ假面を被つてゐないのである。世界はこの間に、ジュームズ教授の所謂『強靱な心』となつて、統一といふ口實をさへ取り除けた哲學を我慢するやうになつたのである。

さて今まで述べ來つた科學的精神の或誇張に對する反作用は、全く人文主義者を満足させ得

ぬことは明白である。この點は、誇張された科學、或は擬科學とも名付くべきものが、我々の問題たる體制の性質及び藝術の正當な境界に關する點について、どんな態度をとるか、暫時考察すれば明白になるであらう。附言して置かう。科學はそれ自身の法則を餘りに獨斷的に固守するか、或はこの法則を人間法則の代として、立てようとする試において偽物となるのである。著者は既に擬科學のこの兩種の途方もない例として一書を擧げた。即ちヘッケルの『宇宙の謎』である。ヘッケルの著同様なものは、かう言ふことを暗示する。今日我々が物性の辭を以つて人性を解説する誤謬に陥り易いのは、古人が曾てこの正反對なことを試みて、誤つたと同じやうである。古人はこんな學説を有つてゐた。エトナの山底に埋められた巨人エンセラダスが身返りしようとした時に、シシリ全島が震つたと。(エンセラダスはジュピター神に背叛した巨人中の豪勇な者で、罰としてエトナ山底に埋められた。噴煙は彼の氣息で、地震は彼が身動きをする時に起るといふのが傳説である)。ヘッケルの理論の或物は、人性を説明するに當つて、地震を説明する古人の學説に略ぼ近いものである。又ミルトンは彗星について『その恐しい髪から疫病と戦争を振り落す』と言つてゐる。しかし今では、彗星は人間の希望や恐怖と

は全く別物である法則に結び付けられてゐるから、凶事の前兆たるものでなくなり、『普通な事物の興味ない目録』中に繰りこまれてある。これは一進歩であるが、若し我々が彗星研究に使用したものと類似の方法に據つて、人性の軌道を推測し得ると假定するに至るならば、折角の進歩も不純である。

感傷的と科學的の兩自然主義者は、何事をも運動の辭で説明し、何物も殆ど不可見の差等で他の何物へも移り行くを見、そこに堅固な區劃線を拒みたがるのである。ドイツのロマンテック徒が各藝術が他の各藝術へ溢れ行くことを、如何に情緒的に感じたかは、既記の通りである(一三三八頁)。科學的自然主義者も同見解を有つてゐる。科學的であると共に傷感的自然主義者であつたデイドローは言ふ、『萬物は不斷の流轉である。各動物は多少人間であり、各動物は多少植物であり、各植物は多少礦物である。自然には、きまつたものは何一つ無い』と。物質世界で類と種がこのやうに進化し、混合するから、一步進めて、文學上の體制も亦このやうに進化し、混合すると臆斷するに至るのは容易である。これは生物學的類推と言はれてゐるものだ。しかし自然界の類と、文學上の體制の比較において、いくらか有用な比喩以外に何物かを爲さ

うとすれば、忽ち擬科學に轉落するのである。例へばブルヌチエールは、その文學的ダーウィン主義、即ち體制の進化説において、擬科學的である。その理由は明白である。體制は單に自然法則に關係あるばかりでなく、また頗る明白に、『人の法則』と關係あるものである。すべてはアリストートルの含蓄多い語に摘要されてある。『悲劇は徐々として發達した。その間に現れた各新要素は、順に發達した。かく多くの變化を経たところで、悲劇はその至當な形式を發見して、其處に止つた』(ブチャアの英譯)。悲劇はその眞性質を發見したのだ。何處がこの眞性質、即ち停止と完全の點であるかは、人の法則とその要求する統一、適度、目的に照し合せてのみ判斷されるもので、無限の流轉と相對的のみを與へる物の法則に照し合せてはならないのである。自然は『多』の區域である。若し藝術が人文化さるべきであるならば、それは單純に自然と共に流動してはならぬ。『一』に關する認知に依つて抑制され、また鍛えられなければならない。ジニムズ教授及びベルグソン氏の哲學は、ブレトオが『多』と『一』の問題と稱したらうと思はれる方へ、思想界の注意を向けた點で功績がある。ただ全部の方法はソクラテイズ的でなく、むしろ詭辯家的であるのは遺憾である。自然主義的傾向は、『多』を眺めて、統一を人爲的と見なす

のであるが、『一』についても熟考する必要がある。人文主義的見解から見ても、自然主義的運動の兩極間における振子運動、即ちルソー主義極度に對して、科學的分析極度を立てること(及びその反對)は、特別の進歩でない。我々が論ずる藝術の混淆を溯つて見ると、主な源泉が二つある。即ち情緒の無抑制と擬科學がこれであつて、この兩源泉ともに自然主義の放縱に發してゐる。だから若し我々がこの混淆から逃れようとならば、自然主義の長所を保留すると共に、また人の法則を主張し、重要な點において、全自然主義的見地を超越する必要がある。別言すれば、有效である人文主義の復活は、ロマンティズムと科學の兩方、前世紀の特色であつた印象主義と獨斷説の兩方、それらに對する反作用の或度合を意味しなければならぬ。

こゝに残つてゐる點はかうである。自然主義の限界について略説した理論と、本書中に論じ來つた特別な問題の間に、密接な連絡を附けることである。同時に理論そのものに缺けてゐた明確さと具體狀態を、それに持たせようと思ふのである。換言すれば、形式と表現の關係について考究しなければ、本書の趣旨も漠然たるものとならう。

第二節 形式と表現

若し前記の分析が正確であるとすれば、第十九世紀は自然主義的放縱の時代であつて、偏に膨脹の長所を認め過ぎるやうになつたのである。過去が造り上げた總ての境界と限定は、たゞ桎梏と感ぜられ、人間精神が自由に徘徊し得るためには、これらを粉碎すべきであると見たのである。ここに、この膨脹的傾向が、或觀念に及ぼした結果について、暫の間、考究する必要がある。或觀念とは、藝術或は文學の創造的努力に、多少を問はず伏在せねばならぬもの、即ち美といふ觀念である。と言つて、ここに美について何等かの抽象的定義を下さうといふのではない。美學に關する非常に多數な著述を眺めると、美の定義を論じて見なくなるが、今はその誘惑に應ずまい。しかし、人々が一事を美として語る場合、其時代を異にするに従つて、どんな事を実際に意味したかを研究し、また美といふ語が、どんな時代にも流行した半眞理に合致するやうに歪められた、其奇體な方法を見れば、或興味ある結論が引き出せるのである。

新古典派の或者の見方では、美は殆ど全く均齊と鈞合に在るのである。しかし、その會得し

た均齊と鈞合は、生動的でなく、機械的であつた。若しルネサンスの理論の或ものを、その券面額から見るならば、かう結論すべきである。造形藝術の美は、定規とコムパスで拵へ得る或物であると。新古典派が常に形式と形式主義を混同する傾向を持つてゐたことは、既に研究した。第十九世紀へ降るに従つて、美の形式的要素を強調する事は漸次に衰へ、代つて生動的、特質、繪畫的、個性などいふ語——要するに表情的(或は表趣的)といふ語につゞめられる要素を強調することが、漸次に成長するのを認める。繪畫の方では、線に比して色彩が好まれ、すべての藝術において、靜止の原理よりも運動の原理、意匠及び布置よりも暗示的委曲が、益す優勢である。約言すれば、表現が形式に勝つのである。實に若し我々が、過去二三世紀間を通じて、人々が美を定義しようとした考試に附いて來るならば、その形式要素は、次第に消え失せ、遂に純表現の外に何物も残らなくなつたことを發見するだらう。(序に言ふ、カロールの書いたテニシャー猫の話は全くこれだ。註釋アリス参照)。極端なロマンティック派は、更に尙進む。美は表現に縮められたばかりでなく、表現そのものは、冥想に吞まれてしまふのである。美はキミーンラ(ギリシヤ神話にある怪物の名、獅頭羊身龍尾で火を吐くもの)。鶴。轉じて妄想

幻想の意)を追ふやうなものとなる。かやうで、ポーの見る最高美は、女性の眼の捕へ難い一瞥であり、しかも其上、夢中の女の瞥見、その足どりのやうな微かな閃きが美であると。

ポーによつて會得された美、また時には彼の詩中に巧みに表現された美は、音樂的懷郷病と定義して宜しからう。この概念と、ポーの詩の定義『美の節奏的創造』とを結ぶならば、ルネサンスの思想、即ち詩の要旨は『蓋然或は必然の法則に従つて』人間行動を模倣することである、といふ思想との興味ある對照を見るのである。

實際のところ、近世美學説の最も極端なものは、過去百年間、ポー及びその他の文學者や藝術家が、實際に成したことを、公式化さうとする企圖にほかならぬのである。その一例として恐らく現今のドイツにおいて最も好く目立つてゐる美學者リップス教授を挙げよう。リップス氏は我々がルソー主義的見解の究竟の誇張であると思ふ點まで、これを進めるのである。その説は、靜止よりも運動を稱揚し、催眠状態のやうな幻影と純暗示趣態を強調するのである。彼は美を單なる『感情移入』の過程にきめようとする。これは人間が、瞑想のやうなもので、外界の事物に融け込まうとする過程と近似してゐる。人間には自己の精力、活動力、或は感情を、

非我に歸する働きがあるといふのである。そこで、すべてこの主觀的たることに制限を置かうとする均齊の如何なる法則の壓迫をも、實際に排除する。實に外部の法則とも、また一個人の衝動とも異なる或物としての法則の感は、既記のやうに近代の全運動に著しく缺けてゐる。例へば、新古典派は韻文の法則を化して狹隘な訓戒の一組とする方に傾いた。この傾向の極端な例として見られるものは、エドワード・ビッシーの『イギリス詩の藝術』(一七〇八年第三版)である。この訓戒の結果として、韻律は機械的、固硬、無表情となつた。殊に小詩人の手においてさうであつた。我々はイギリス文學における聯句のシーソー(遊戯の名)を熟知してゐる。さてこの形式主義に對する反作用において、自由詩の味方多數は、正反對の極端に走つて、全くの無法則に陥つた。彼等はその廣々した夢に、障壁の影すらも、許すを好まず、韻文を、彼等の瞑想の迂曲すべてに適するやう柔軟ならしめたので、韻文は往々不恰好なものとなつてしまつた程である。彼等は或文學の作成に成功した。この文學は、ジュールダン君の分類あるにも拘らず(註釋ジュールダン参照)韻文でも、散文でもないもの、體制の混淆ではなく、どんな體制も無い妙なものである。ルメートル氏は、ボッシュエーが還元作用の或程度に達した屍體について言つた

詩を借りて、この韻文を評してゐる。『もはや、いかなる國語にも、その名稱のないやうな、名状し難い或物』であると。ドイツのロマンティック派は、その韻律上の試作においても、他の多くの點と同様に、フランス象徴派の先驅となつてゐる。ドイツ、ロマンティズムを評論したヘトナーは言つてゐる、自由詩形、殊にテイクはこれに迷ひ込んだのだが、その形式の詩は、全く堪へ難いものである。かやうなものが自由狂の最後の段階である。詩の自由狂者は、畫家で、その『幻想』を公平に取扱ふ爲に秋毫も疑ふ餘地のない意匠法則を破らざるを得なくなつた、と尤らしく言ふ人と同類である、或は、劇作家で、實質は人類の普遍的經驗の便利な要領であるものを、たゞの慣例として、事もなげに放棄する人と同類である。

美の觀念が、これを純粹に印象主義的或は表情的たらしめようとした人々によつて、どんな具合に腐敗させられたかを説かうと勉めたところで、容易な事でない。美を説明するに當り、この方向へ進んだもので、最も興味多いものの一例は、ネーブルスの哲學者ベネデットオ、クローチニ氏であつて、その美學に關する著述は、イタリーにおいて數版を重ね、またイギリスにも既に翻譯された。實に彼は、一部の熱心家からは、長い間期待された美學のメシアと稱揚され

た。クローチニ氏は美を純表現に歸してゐるが、形式を除去するのではなく、その形式といふ語に特有の意味をもたせてゐる。それはアリストトールのでもなく、學究の意味でもなく、また普通の用法とも違つてゐる。彼の定義では、形式とは只の様子アズペクトである。直觀即ち表現であつて、その眞正表現の必然の結果が形式であると。藝術の關する所は全く感官の新鮮な直觀である。理智の方から、これらの直觀に干渉することは輕視すべきである。人の心理は、形象を見るか或は形象間の關係を究めるかの二つであつて、前者は審美的活動、後者は論理的活動である。この審美的活動は、論理的活動なくとも成立するが、論理的活動は、審美的活動なしに成立するものでない。高等な、或は所謂理智的直觀は、クローチニ氏の拒むものである。彼は藝術における選擇の思想を冷遇する。人の受ける印象が變質され、而して最後に斬新な表現と成つて出て來る過程は、純粹に直觀的及び自然發生的で、意志の監督外に在るものであると。だから審美的活動から見れば、大きな哲學組織も亦一の形象に外ならぬ。

要するにクローチニ氏は、自然發生の使徒であるが、その自然發生は下級のものである。本能の自然發生で、智見のそれでない。彼の見解は、既記の獨斷的及び機械的科學に對する反作用

の特別な形式と密接に關係してゐる。彼は科學的理智主義を攻撃する點において、非常に鋭い理智主義者たることを見せてゐる。彼は我々が今日まさに必要とする種類の簡明な多くの差別をなしてゐる。だから著者は、彼と原理において甚しく意見を異にしなければならぬことを遺憾とする。(クロイチ氏に對するベビット氏の批評は、やゝ的を外れてゐるやうに考へられる。クロイチ氏の言ふ直観は必ずしも下級の自然發生でない。これは心理活動の根本的研究から説き出された觀念で、ベルグソン氏の言ふ直観、本能などと共に詳密に研究されなければならぬ思想である。しかし、今はこれを詳述する場合でないから、これを他日に譲り、たゞ一言して置く。所謂ロマンティック藝術觀以外に、確實な基礎を持つ藝術觀を建てようとするれば、此説から出發しなければならぬと思ふ。)とにかく純表現としての美の概念は、全く眞に近世的である。この説を維持するために、クロイチ氏はブレトオとも、アリストールとも別れ、また一般にギリシヤ人は美の理論に關して不適任であると排斥してゐる。彼が自身の上に輝きたした大光明の曙光を認めるのは、比較的近代に降つてからのことである。彼に従へば、詩と藝術の眞性質に突き入つた最初の人は、ヴィコーであると。ヴィコーには、自然發生及び原始衝動

關する思想で、ルソー及びヘルデルの先驅と見ても可いものがある。美に關する膨脹的見解を採るクロイチ氏は、文學及び藝術上の體制を立てる全努力は、智力が審美的自然發生の上に加へる不當な干渉であると見るのである。過去において、藝術の正當な境界及び諸藝術の混淆について述べられた言論すべては、たゞの言葉争ひであるとは、彼が我々に信ぜしめようとする所である。

擬古典派と、既記の種類の近世理論家との間に、重要な類似點ある事を見落してはならぬ。彼等は皆な美を或一事に歸着せしめる點において一致する。擬古典派は、たゞ形式のみを採らうとして、形式主義に陥つた。一方、近代人の多數は、擬古典派が輕視、もしくは拒否した表情的要素に、美の全部を見るのである。バトアとクロイチ氏は共に美學上の一元論者である。その相違は、すべての藝術においてバトアは只模倣を見、クロイチ氏は只表現を見ようとする點である。しかし我々は、美學上の一元論者、その他各種の一元論者に對して、健全な不信をもたうではないか。一元論なるものは、人が自身の怠惰と偏頗と、實在の多様にして相容れぬ各方面間に調停をなすを好まぬ事との爲に發明した美しい名に外ならぬ。ロマンティック徒と自

然主義者が、擬古典派と同じやうに、形式と形式主義の區別をなし得ないで、美を或一事に詰め込まうとしたからとて、我々までが彼等通りであらねばならぬといふ理由はない。健全な美の解剖ならば、いづれも常に美の二要素を認める。膨脹的、生動的であつて、表現といふ語で摘要して宜しい要素と、これに對する形式の要素、この二つである。この後の者は、むしろ限界及び圍繞の法則として感ぜられるのである。

さて形式は、かやうに限界し、或は圍繞すると言つても、その故にこれを無生氣、機械的、外面的の物と思ひなしてはならぬ。我々は擬古典及びロマンティックの見方に倣つて、集中を狭隘、收縮の意、或は傳統や常規におとなしく黙従する事と同一に見てはならぬ。自然法則と異つてある人性の法則は、それ自身集中の法則である。ただこの法則を保つには、形式的でなく柔軟であらねばならぬ。而してこの妙技は困難であるが、クローチ氏の蔑視する高尚な直觀の援助あらば、決して不可能でない。もちろん藝術は單に或は主として高尚な直觀ばかりで榮えるものでない。それは感官の最も鋭い直觀を要する。しかし若し藝術が、高雅な目的をもたうといふならば、この感官の直觀は、高尚な直觀の監督の下に立たなければならぬ。さもなければ

ば、藝術は狙ひ所のない表現、レッシングの言ふ粗野な表現となる危険がある。これに反して、眞の目的と選擇をもつてすれば、藝術は形式と本質的均齊を成就するのである。エマースンは靈魂に即刻附隨するものは形式であると言ひ、スペンサーもやや同じ氣持で、『靈魂は形式であつて身體を作る』と言つてゐる。若し靈魂なる語が、高尚な直觀の領域に屬してゐるものとすれば、我々はエマースン及びスペンサーに同意する。しかし現今、靈魂といふ語のみならず、『理想』とか、その他同様な語も、皆な奇異に變化させられてしまひ、それらは智性以上の物ではなく、智性以下のもの、著者のいふ下級な自然發生と關聯させられるやうになつた事は明かである。レッシングの言ふ理想とは、一定の標準に照し合はせての選擇と自己修養の嚴正な過程を意味するのである。然るにルソー以後、『靈魂』と『理想』は、情緒的膨脹といふこと以上の意義を包藏しない。人は感情の迸出に耽つて、靈魂を持つと證明し、また單にその熱情を放縱ならしめることで、理想家として通れるのである。要するに『靈魂』及び『理想』といふ語は、既に女性化されて、僅に警戒して用ひ得られるばかりでなく、やがてその使用は全く不可能となるのであるまいかと思はれる。實に感傷的自然派は、抑制の原理を排除して、人性の高尚

な價值すべてと、それを表現する言語とを信用しないやうになり、それと共に遂に默的實證主義の外は何物も存立しないやうになるのではあるまいか。

先に引用した語で見ると、スペンサーもエマースも共に意識的にブレットオ哲學を奉じてゐる。また著者は、高尚な直観とブレットオを連結した。しかし、著者はその直観をアリストートルとも同様に連結させても不都合はなからうと思ふ。綜合の大家に秋毫も劣らぬ分析の大家が、これらの直観に、最後の強調を置くといふことは、妙に考へられるのは事實である。しかし、仔細に研究して見れば、案外と思ふことがある。實にこの智見がアリストートルに現れてゐる形式は、ブレットオに現れてゐる形式よりも、一そう好く我々の目的に適ふのである。殊に藝術及び文學に關する總てにおいてさうである。例へば、普通の智性以上の領域を記す場合に、アリストートルは言つてゐる、それ自身は動かないが、しかも生命と運動の源泉であるのは、これであると。この概念は、全盛のギリシヤ彫刻に眞に實現されてゐると言つて宜しい。その彫刻は運動を暗示する藝術の略ぼ總てを完成し、同時にこの運動に、生氣ある安靜の背景を與へたものである。アリストートルの語は、それ自身において賞すべきであるのみならず、またこ

れは主要なロマンティック及び自然主義的混淆の語に對して、我々を警戒させるものである。ロマンティック派は集中といふ語を、狹隘及び收縮と同義に解しようとするやうに、安靜にはただ無生状態及び沈滞を見ようとする。ヘルデルは言つてゐる、レッシングは表現に嚴重な境界を定めて、「藝術を死物また無靈魂たらしめるだらう。藝術は中世紀の僧侶ばかりを喜ばせ得るやうな自動力のない安靜中に亡びてしまふだらう」と。さて著者一人としては、レッシングの安靜の概念は、或點において餘りに學究的であることを拒まぬ。しかし、若し藝術が完全であらうといふならば、表現のみならず、この表現を制限する形式がなければならぬ。而してその形式が純正であるに比例して、それは安靜を暗示するであらう。それは毫も無靈魂でなくして、しかも運動と變化の領域以上に出てゐる或物を暗示する。この形式と表現の完全な合一は勿論稀少である。しかし過去の文學藝術を顧れば、それが不可能事でないことの證明がある。例へばモーツァルトである。彼は音樂法則に自然發生的に服従してゐる。この點において彼は近世藝術家の或者とは、正反對の位置に立つてゐる。この近世藝術家等は、獨創的及び表情的といふ口實の下に、骨折つて法則の破壊に成功しただけである。若し眞の藝術は、語るべき或物を有し、そ

れを簡単に語ることで成立するものとするれば、近代藝術の特色は、語るべき何物をも有たず、而して不可思議な複雑な方法で、無いものを語ることである。

表現は決して形式となり得ず、形式は決して表現となり得ないことは、膨脹は集中となり得ず、また遠心力は求心力となり得ないと同じである。かやうに、形式と表現は、決して實際に混和され得ぬものであるが、この兩者は衝突する二律背反でなく、和解した對峙者として立つべきであることは、古來述べられた總てから明かである。コーリヂは『美』の論文中に、美の抽象的定義を下してゐるが、それは我々と特に關係あるものでない。これに附け加へて彼は言つてゐる、『具體美には、良形と生動の合一がある』と。この語は我々の目的には甚だ大切な事である。著者が示さうと努めたやうに、或意味において良形は又生動的であらねばならぬが、しかもコーリヂの語は、美に關する必然な二元論の公平な陳述で、恐らくイギリス文學中最善のものであらう。この兩辭——即ち一方には表現の外出的推進、他方には制限的法則、この兩方を調停する問題は、幾多の方法で解決されるであらうが、若し人にとつて眞に適切な美を表はすべきであるとすれば、この問題は、何等かの方法で解決されなければならぬ。この問題は藝

術に關して正確に思考した人々の面前に常に在つたのである。一例を擧ぐれば、ホレースが詩は各行に文體の美を有するだけでは十分でない。それは情を動かす力を有して、其欲する處へ聽者を導かねばならぬ』と言つてゐる場合には、このやうな或對照を考へてゐたのである。今日若し或詩が、ホレースの述べてゐるやうな具合に、我々を魅するならば、我々はかれこれ言はずに、これを美と稱するであらう。しかしホレースは、かりそめにも偏頗といふ誤をなすには、餘りに教養があつたのである。すべて極端は野蠻であつて、若し藝術家が、良形か或は生動の一方に傾き過ぎるならば、彼は高雅を失ふ危険に瀕するのである。しかるに今日、極端に走る傾向のあるのは疑ないことである。イギリス評論雜誌の一は、先頃トマス・ハーディの『ダイナスツ』を稱揚して、最近二十四五年間における天才の最大傑作と言つた。此劇は三部、十九幕、百三十餘場で、また散文と韻文の混合體であり、その上甚しい惡韻文である。さて『ダイナスツ』は疑もなく天才の作であるが、たしかに訓練なしの天才の作である。それは生動的であつても、良形でないことは確かである。實にかやうな作が、今少し多く出てくると、我々はアリストートル派の形式主義と少しく和解するかも知れぬ。なほ他方面から例を取れば、

ダンの『娼婦であつた女』は生動的であらうが、良形とは見なし難からう。一般にロダン及び印象主義の彫刻家は、非常に努力して、生動的また表情的たらうと試みてゐるが、彫刻藝術の範圍を踏み出し、その特別な形式と均齊の法則を破り、遂に十分な安靜の暗示をもつて、生命及び運動の表現を調和する點において誤るやうな危地に臨んでゐる。全世界は、この均齊の事柄に關して、益す野蠻となりつつあるやうだ。著者は現にスカイ、スクレーパー（アメリカ式の摩天建築）に美といふ語の當てはめられたのを聞いた。スカイ、スクレーパーは繪畫的、或は生動的、又は何かであるかも知れぬが、それらは通例、誇大妄想狂と商業萬能主義の混合たる外、何物でもない。これらは、今日我々を引捕へてゐる産業及び財政上のタイタン人種を、遺憾なく表現してゐるとは言へ、なほ美たることには足りないものである。何となれば、タイタン主義は餘りに不規律また無抑制で、その表現は上出来であつても、眞の美にあつて和合されなければならぬ兩辭のうち、孰れか一方だけである。下部ニューヨークとパリのコンコード街からの眺望を比較して見よ。パリの均齊は全く巧妙であると言はれなからう。それには、尙ほ定規とコムパスで作られる種類の跡を残してゐる。しかも、この均齊のお蔭で、パリのこの

部は、下部ニューヨークにおける何物よりも、遙かに美に接近してゐるのである。（藝術の限界については、各藝術の特殊な手法や、その利用する材料や、或は時と場所の關係などの方面からも論すべきである。しかし今は、この方面に觸れない。これを研究したい人は、ルドウィヒ、ファルクマン氏の著書を参考するが宜しからう。ファルクマン氏はロダンを攻撃してゐる評論中に、繪畫と彫刻標準の混淆を指摘してゐる）。

しかし純膨脹派に向つて、形式と均齊を語るのは無駄である。既記のやうに、彼は安靜と不活動、集中と狹隘を同一視する。彼が我々に信ぜしめようとする所は、藝術は専ら生動的と表情的を狙はなければならぬ、さもなければ必ず模倣の轍を脱しないで、同じステロ版の形式を繰り返すやうな愚を演ずることにならうといふのである。ルナンの有名な一篇『アクロポリスにおける祈禱』の根柢に横つてゐる誤謬はこれである。ルナンは形式の見本である言語をもつて、あらゆる形式の長所を拒否する思想を言ひ表はしてゐる。彼はロマンティック常習に従つて、先づパルシノン、アセンズ人及びベラス、アシーニに對する同情と理解の迸發をもつて始めてゐる。然る後に、その熱情は途を反省に讓つてゐる。即ちアシーニ及び古典的完全の追隨

者は、終に人間精神を或特別な形式の檻に押し込めるであらう、彼等は藝術の他の變化たる無限な表情的及び暗示趣態を忽にするであらう、彼等は理性と良識外の事は、何物をも知らぬであらう、世界は彼等が假定するよりも廣大である、だから他日、彼等は『倦怠の弟子』と見なされる時が来るであらう、『若し汝が極地の雪と南方の空の不思議を見たならば』とルナンはアシーニに言ふ、『常に靜穩な女神よ、汝の額はそのやうに穩かでなく、餘裕ある汝の頭は、美の雑多な種類を包含するであらう』と。

本來は内的訓練であるものを、外部形式と見なすこと、別言すれば、形式と形式主義を混同する、このロマンティック傾向の例として、これ以上のものを求め難いであらう。若しパーシノンが價値を有するとすれば、それは、それ自身或は特殊形式の如何なる例よりも高い或物、統一、適度、目的の法則よりも高尚な或物の投影としてのみである。ルナンは外部形式を放棄すると同時に、内部訓練と反膨脹の何物をも斥けて、智性と感性の無限また不確定な放浪の途につくことになるだらう。彼は首尾一貫の自然科学者が達しなければならぬやうに、純變遷説に達する。即ち彼は何物も殆ど感ぜられない差等で、他の何物へも移り行くのを見る。この過程

中には、判然たる區劃線を引くべき點、確實堅固な差別をなすべき場所がない。一定の標準は普通の相對性中に呑み込まれてしまふ。ルナンは言ふ、『疑もなく、片意地の哲學は、私をしてかく信するに至らしめた、即ち善と惡、快感と苦痛、美と醜、理性と狂氣は、恰も鳩の頸筋のやうに、認知し難い陰影で互に變化する』と。かやうに、觀念に關するルナンの標語は、感覺に關するヴェルレーヌの語『常に微妙な濃淡』に似てゐる。ジョンソン博士は言ふ、我々は『微細な區別には構ふまい、チョリップの稿目は數へまい』と。然るに全近世派のなし來つたことはまさにこれである。これは實際には人格の男性的能力を越える女性的の昇進を意味したものであり、それで必要また正當な職能自身の活動は頽廢の様子を呈することになつた。ラセール氏が『人性の高尚な部分の完全な腐敗』と呼んだ様子がこれである。

かやうで、『アクロポリスにおける祈禱』は、第十九世紀後半に書かれた散文中、最も光彩あるものであらうが、人文主義の立脚地から吟味すれば、誤謬を含んでゐる。ここにルナンの誤謬と密接に關聯してゐる進歩といふ概念のために、測り難い害が藝術及び文學上加へられた事を記さう。進歩の理論はかういふ事を意味すると、頻りに解釋された、即ち人は一方向へ進

むことに因つて成長すると。然るに人が實際に成長するのは、同時に種々の方向へ動くことに因るのである。即ち種々な半眞理及び實在の一部分の微光の間に調停をなすことで進歩があるのだ。例へば、リヒアード、シトラウスの音楽は、ワグネルのよりも優れてゐる、それは一そう表情的で、一そう廣濶な自由を意味すると宣傳されてゐる。この喜ばしい報知で、無数の氣まぐれの一群は急いで行列に加はる。しかし世には、此行列と一緒に行くだけでは満足せず、この行列の行先は何處であるかを知らうとする少數の人々が、なほ居るであらう。高雅な目標に向つて進んでゐるのか、或はサント、ブーヴがロマンティック、カムチャカと呼ぶ極度の尖端に向つて、たゞ先へ先へと進むだけのことであるかどうか。さて我々の今の主題は、見張塔のやうなもので、此處から我々は廣い眼界を眺めて、現今の氣運と、その方向について、或推測を立て得るのである。既記のところから明白であるやうに、著者自身が、この種の觀測から結論することはかうである、我々が人間の努力の殆ど全範圍、即ち藝術、哲學、教育などの方面に見るものは、非常な極端、即ち科學的及び感傷的自然主義の極端である。勿論、現在の運動は際限なく續くであらう。教育に關する理論で、隨意選擇科制度の急進的形式よりも更に無紀律

なものも出よう、或は小説の一そう病的な横溢で、他の文學體制の排除となることもあらう、ロダン及びその門弟等の作よりも、更になほ印象的な彫刻、デブシーのものよりも更になほ上音と聲色の追求に耽る音楽、プラグマティズムよりも更になほ合理に無頓着である哲學、リップス及びクローチよりも、美の均齊要素に關して一そう顛倒的な思想が現れるかも知れぬ。約言すれば、人生及び文學に人性を喪失させる過程は、永く續くかも知れぬ。しかし我々は、これを氣にするに及ばぬ、若しフランスの格言、即ち良識は人道の守護神であると言ふ事が眞實であるならば。過去において、この種の極端に對して反作用の起つたことは知られてゐる。その反動は時に突然であつた。だから氣まぐれ者でさへも、此行列について往く熱心を調節する。それはどんな運動でも、その最後までこれに従ふことは、危険だといふ思想をもつて調節するのである。スペインの諺にあるやうに、最後の猿は溺死するのである。過去一世紀以上、遠心的勢力の殆ど排他的運動があつた。自然と人性の遠隔邊陲の地への探究があつた。他日、多分遠いことではあるまいが、中心に向ふ對抗運動が起るであらう。約言すれば、著者がさきに用ひた心理學的理論を、ここに再び用ふれば、世界はやがて、常識の『潜在意識突進』によつて

脅かされるであらう。但し、この豫想は、バーナード、シー氏及びその追隨者には不安なものであらう。

しかし、このやうな總ての豫測は無駄である。何事も嚮導者に依るので、その適當な人が出て来るかどうかは誰にも分らぬ。こゝで我々は一度だけユーゴーに同意して、未來は神に屬すると言ふ。もちろん今後世界は今一たび人文主義時代を見るだらうとは、確かに言ひ得ることでない。例へばサント、プーヴである。彼は人文主義者であると共に自然派の大家であるが、かう考へてゐた。フランスは既に古典時代を見た、而して今は頽廢の下り坂にあつて、眞の美の微光でも、これを認めることは困難になり、またやがて不可能となるであらうと。サント、プーヴは餘りに古典時代のこの思想に付きまとはれ過ぎてゐたやうである。一國には一個人のやうに、少年期、青年期、圓熟期、及び老齡の衰頹期があるといふ思想がこれである。この思想を應用して世間を感服させた最初の人、ヴァルテールである(その著『ルイ第十四世時代』)。これまた『生物學的類推』の一であつて、著者一人としては全然これを信用せぬのである。若し我々が一の理論を持たなければならぬならば、留保殘存物の理論の方が、古典時代のものよ

りも、我々の目的に好く適つてゐる。高雅な、また生動的集中のために踏み止る人は、誰でも幻影の普通量よりやや少い程度で、自己は留保殘存物に屬する一人と思つても可からう。少くとも彼は非常に僅かな少數黨に屬すると確信して可からう。マシー、アーノルドが『象のやうな幹體』と呼びさうな者は、人が完全になるには、第十九世紀のプログラムを際限なく續けさへすれば可いと、從來よりも一段と確信するやうに見える。これは、雑多の膨脹に従事し、若し必要あれば、これを後援するに、過去の形式すべてに對する騒々しい反抗をもつてすると言ふのである。誰でも異つた見解を持つてゐる者は、直ちに只のろまや、反動的とこき卸される。しかし、高雅な集中を主張する者は、却つて自身を顧みて、放棄された希望の先驅者であり、嚮導者であると思つて可からう。眞のろま、おまけに危険なろまは、永久の膨脹の使用徒、即ちそれ自身の完成を欲しない第十九世紀型と定義してもよい人々と成りがちである。この類の人々でも、集中は已むを得ない事と見るが、その集中は高雅なものでなく、頽廢時代に特有な軍事的及び帝國主義的的典型である。傳統的抑制と禁遏が遂に消滅して、生動的衝動が何等匹敵する生動的抑制なしに、大規模に進行しだす場合には、どの國民或はどの個人が生動的

及び無抑制に膨脹するかを決定し得る唯一の法則は、狡猾の法則か、然らずんば腕力の法則である。このやうな事は、純自然主義の避け難い結末である。ここに人道主義者は言ふだらう、この膨脹の氣勢は、利他主義によつて緩和されると。しかし、將來の人性は、過去の人性と根本的に異なるものとなりつつあるといふ證據は、不幸にして少い。これを具體的に例證すれば、國際間の善意の發生も、ドイツの生動的膨脹に關して、イギリス人に保證を與へるやうに思はれないのである。(これは世界大戰以前の觀察であつて今日から見れば、この大戦争を豫言したものと、思はれるのである。)

人文主義者にとつて前途は暗いものであるが、それにも拘らず、自然主義の波浪は、既に頂點に達し、今後多少下降するだらうと期待し得る或徴候がある。感傷的方面において、自然主義的運動は、最初自然發生及び原始情態の理論に有意義な表現を見出したが、今は一部、少くとも叙事詩の起源に關する方面において、ロマンティック原始主義は、明かに衰退しつつあるのである。既記のやうに、新古典派の叙事詩及びその他の體制に關する誇張は、これを轉じて智性の冷かな熟考からの調合物たらしめたのである。例へば、バッキンガムは、叙事詩に關する新古

典派の泰斗たるル、ボスイッが、ホーマーの「偉大な魔術」を説明したと信服したのである。そこで、これに對抗するロマンティック派の誇張は、ホーマーの詩から意識的及び熟考からの藝術要素を除去し、これは全く民族精神の無意識な流出であると見たのである。然るに、今日地歩を占めつつある意見はかうである、イリアドもオディシイも原始的でなく、磨き上げられた藝術であると。勿論この藝術といふ語は、ル、ボスイッの意と全く同一に用ひられたのでない。なほ我々は中世紀叙事詩の起源に關する最近の學說中にも、原始主義に對する反動の端緒を見るのである。

原始的と自然發生に關するロマンティック理論の衰退は、重要な可能性をもつてゐる。この學說は、近世運動の一面に明白に見える智性、性格、意志の致命的衰弱について尠からず責任あるものである。ロマンティズムのルソー主義面が、その最後において、オスカー、ワイルドや、ヴェルレーヌのやうな憫むべき代表者を出したことは、誰も知つてゐる。最近のロマンティック派は、自身等について疑惑を懷くやうになつた。これは、さほどに大切なことでないが、彼等が藝術及び文學についても、また或不信を懷くやうになつたことは、遙かに重大である。通

俗用法で『藝術家氣質』といふ語に附けられる様になつた意味について考へて見よ。眼前の緊急な仕事は、ルソー主義において種々の形で現れた智性及び智性以上の物を比較的輕視する傾向に反抗する事である。文學者は、すべて分析的鋭敏と理智的勇氣を、科學者に一任してしまふ程に謙遜であつてはならぬ。藝術は理智主義に生存し得ないが、しかも我々が要求する創造的藝術の種類に達する路は、智性を通つてゐるのである。我々は『差別を増加する偽の第二義能力』を避けるどころでなく、出來得るだけ多く、また明晰な差別を立て、またこれらを生々たる太陽光線のやうに、ロマンティック薄明に投射すべきである。これが實に現時における批評の職務であらねばならぬ。即ち明瞭な、男性的な、また強剛な差別を、今一たび名譽の位置に立たせることである。かやうにして我々は、本來婦女や、男性的でない氣分の男子——疲れた科學者、過勞の言語學者、或は退屈した實務家などに向けられるものでない文學の典型を見ることができよう。

近世の生活及び文學に侵入した混淆は、著者が探つた情緒的無抑制と擬科學の二源泉から發してゐるもので、これから我々を救済し得るものは、堅實で、男性的である差別の復活のみで

ある。手當り次第に例を取つて見よう。ゾラの小説論と、その作に、この兩者が如何に多く流れ込んでゐるかを思へ。擬科學者は、物質界のみならず、人間界においても、變化と運動のみを見るので、明白に劃定された境界は何處にもない。見方によれば、この科學者は無抑制の情緒的膨脹を欲するロマンティック自由狂と共同作業をなすのである。しかし既記のやうに、若し情緒が人文主義化さるべきであるならば、選擇的とならねばならぬ。而してそれが選擇的となるに正比例して、不定たることは止まり、照準と目的、形式と鈞合を獲得するのである。表現のただの外出的推進はそれ自身では十分でない。表現がそれ自身を表はす事物は、同時に本質的に價値を有たなければならぬ。而してこれは一個人の感情よりも、一そう高尚な他の數地において決定さるべきものである。ここに新古典街學の最惡なものの一と、外見上から思はれるものの下に横つてゐる眞理がある。即ち體制の階次^{ヘイアキ}である。體制は、それが取扱ふ事物の本質的價値と、人にとつての重要さといふ點に従つて排列さるべきだ。新古典派がこの眞理をただの慣例と化してしまつたからとて、繰りかへすが、我々も亦彼等の通りであらねばならぬと言ふ理由はない。アリストートルは悲劇に關して言ふ、緊要な事は善い脚色をもつことであり、

その善い脚色を立てることは容易でない。ロマンティック徒に従へば、我々が事物について十分深刻に感じさへすれば、どんな外部の事物でも殆ど皆な用をなすのである。ワーヅワースが我々を諭すやうに、情緒的反作用が正しいならば、我々は『各事物に物語を見る』のである。だから鶴嘴をもつて徒らに木の根に働いてゐる老人も、シブズや、ピロプスや、トロイ物語のやうに、詩に適する題材と見られるのである。

ワーヅワースのバラドクスは、他の多くのバラドクスのやうに、それ自身の眞理と効用を有してゐるものであるが、それを固持する人は、ラセル氏の言ふロマンティック浮誇に陥り易いのである。この浮誇は情緒と、それを表はす外の事物或は出来事の間における、非常な不釣合であると定義して可いのである。ユーゴーには、この種の浮誇が澤山にある。また音楽的浮誇の好例は、リヒアード、シュトラウスの『家庭交響樂』である。これには表現と、表現されるものとの間における不釣合が甚だ明白で、或批評家は、これについて、おなさげに亂心と諷してゐる。この樂曲のことを書いた一記事に、その演奏のためには、普通の絃樂器の外に、左の各種の樂器が入用だと書いてある。ハープ二箇、笛四箇、オーボイ二箇、オーボエ、ダモール一

箇、クラリネット四箇、低音クラリネット一箇、バスーン四箇、二重バスーン一箇、サクソフン四箇、ホーン八箇、ラッパ四箇、トロンボーン三箇、低音チユバ一箇、ケトルドラム四箇、その他三角繫樂器、タムプーリン、グロケンスピール、シムボル、それから大太鼓、これら多數の樂器を要する。而して總ては赤ちやんの入浴事件を記述するのである。この樂曲についてはシュトラウス崇拜家の間にも異論がある。しかし、どんな説明でも著者の論旨を動かすやうなものには有るまい。

つまり體制と藝術の境界の問題については、これを生動的に、而して形式的でなく考へれば何の不思議も無いのである。これはかう言ふ事に歸着する。明確な典型の人、即ち情緒的或は理智的混濁の孰れにも生活しない人は、當然藝術或は文學の截然たる典型を選ぶ。かくて彼は芝居じみた説教、或は説教する脚本には、先づ頓着せぬであらう。彼は多くの歴史小説中に、歴史が小説にとつて何等相應の利益なく改作されてゐることを感ずるであらう。彼は第一に音樂である音樂、及び殊に詩である詩を愛好するであらう。彼は或詩とか、繪畫とかに照し合はせてのみ會得される交響樂を信ぜぬであらう。彼は單に短詩の轉換トランスポジションである繪畫や、繪畫の

象徴的轉換に外ならぬ詩に頓着せぬのが常であらう。彼は各藝術と各體制とが、第一にそれ自身であり、またアリストートルが悲劇について言ふやうに、それ自身の特別な快樂を與へることを望むであらう。これが悲劇まじりの喜劇に對する眞面目な一議論である。それは、悲劇と喜劇の兩方の特別な快樂を與へようとするこの種の劇は、印象の最も完全な統一について誤るであらうといふ事である。統一された印象は、集中、適切、目的の或都合なしに得ることできないものである。藝術における男性的要素についての強調は、必ずしも女性的長所の嫌忌、或は灰色意匠の學究的過度への嚮導を意味するのでない。正當な意匠は最初に要求されるものであるが、これに色彩、運動、幻影、また一般に表情趣態が加味されなければならぬ。またこれが多いに従つて益す善いのである。各藝術と體制は、他の藝術と體制を暗示すると同時に、それ自身の形式と釣合に依然として忠實であり得よう。しかしながら、意匠の上に色彩を置き、目的告知の上に幻影を置き、均齊の上に暗示趣態を置くのは、男性的長所を越える女性的の優勢を奨励すること、これが前世紀における文學と藝術の腐敗、即ちロマンティック若しくは更なる的確に、ルソー主義的誤謬と稱しても可いものの主な原因である。

明確な典型の人は、藝術の明確な典型、即ち截然たる體制を好む傾があるが、彼は十分に明確なもの、是認すべからざる雜種とを判別するに、分別と適度感に導かれて、いかなる經驗法にも據らぬであらう。マシュー、アーノルドは、ワーヅワースが新案によつて、その詩を分類しようとして失敗したことに、評釋を加へながら言つてゐる、ギリシヤ人は、この種の差別をなすに當つて、殆ど誤らない分別を示してゐると。我々は附言して可い、ギリシヤ人は彼等の定めた體制においてのみならず、その分類を流動的に保つ點においても、その分別の優れてゐる事を表はしたと。例へば、ギリシヤ悲劇には諸種藝術と體制の自由な交互作用と協力がある。これらはアンドレー、シニエーの言ふやうに、細い、蜿蜒たる絲のみで區別されてゐるが、その絲は決して切れないのである。

約言すれば、ギリシヤ人はその全盛において、高雅な標準を有し、またこれを柔軟に保つたのである。かくして彼等は或程度において「一」と「多」の調停を成し遂げたのである。これは人生の最高智慧である。この調停は人間のやうに半眞理を好む者には、かなりの難事であつて、我々は今日なほ、その遂に可能なることの主な例證として、ギリシヤ人を振り返つて見るほど

である。ギリシヤ人が兩極端の調停を具體にした實際の形式は、相對的のものであつて、それを文字通りに復活させる必要はない。個々の形式は常に相對的であらねばならぬやうに、ギリシヤ人のもも相對的ではあるが、しかも絶對的である法則の方を指してゐるものである。現代人で眞にギリシヤ生活の教課を學んだ者は、表面上パーシノンや、ソファクリーズの劇や、或はプレトオの對話に似てゐないものを作らうが、その作は生動的統一、生動的適度、生動的目的を有する點で、これらのギリシヤ形式に類似するであらう。著者は勿論ギリシヤ人に對する盲目的崇拜を奨励するのでもなく、また古典時代以後、人生を擴大豊富ならしめた總ての物を見下げるのでもない。ギリシヤ生活は全體として一見本であると同時に、少くとも一の警告たる務をなすものである。この警告は我々の現代世界には、見本同様に適切なものである。ギリシヤ生活の危機は、現時のやうに、自然主義的解放の時代に在つたのである。この時、多數は標準なしの生活に満足し、ただ少數の者が、その失つた外部標準に代るべき内部標準を、盲探しに尋ねてゐたのである。ギリシヤ人の問題は、また我々自身と同じく、無抑制といふ問題であつた。なぜなれば、我々が近代社會の諸方に見るものは、其科學的進歩といふ外飾を除

けば、適度法則に對する野蠻な違背であるからだ。ギリシヤ社會は、自然主義の過甚のために亡びた。我々の近代社會も亦この様に滅亡するかも知れない。しかしギリシヤ藝術の頂上は、高雅な抑制の勝利である。だからギリシヤ、殊にソクラテイズ、プレトオ及びソフィスト等のギリシヤは、その失策も成功も共に我々にとつて貴重な教訓である。過去のいかなる時代よりもギリシヤはかやうであると著者は考へたいのである。今は、ギリシヤ研究から轉じ去らうとする瞬間である。しかし貴重な例を棄てないで、世界には他の時代が來て、ギリシヤ全盛期が爲したやうに、人は微妙な適度と完全な自然發生を結び得る、人は完全に訓練されると同時に、完全に靈感を受けることができると明白に證明するまで待つ方が、一そつ賢明であらうと假定されるのである。

著者は最初に示した聲明を正當であると、今迄に證明したと信ずる。即ち體制の性質と藝術の境界に關する證議は、遠方に及ぶもので、たゞに文學のみならず、また人生に對する人の態度をも含んでゐるのである。この問題を徹底的に取扱ふには、各藝術の一般原理の會得と、その歴史の知識を要するのであつて、著者はこの點について自信あると言ふのでない。著者はこ

の意味において徹底的たらうとさへ試みなかつたのである。著者は、全力を盡したレッシングの粗末な模倣者たらうといふのがせい／＼で、完全な、緻密な組織を成し遂げるのではなく、知識の酵母を播き散らさうと望んだのである。

(文藝思潮論終)

附 録

- (一) 人文主義とは何か
- (二) 人道主義派の二典型
- (三) ロマンティックの語史



第五十世紀の印刷所

(リヨ畫版の(1539)ンマアトスヨ)

(一) 人文主義とは何か

アメリカは勿論、他國でも大體に、世人は活動九分の、思索一分といふ有様である。人間は活動さへすれば宜しい、活動すれば、思索の方はどうにかなるものだ、全力を盡して活動せよ、然らば正しい思考が附いて來るといふのが、この形勢であつて、まさにソクラテイズの行き方は正反對である。だからソクラテイズは、人性中の推理の方面を餘りに強調し過ぎたと見られてゐるのである。そのために、思想の明確堅實といふことは、愈々稀少になるやうに思はれる。思考するといふ眞努力の暇が無いといふ有様であるから、言語の用法においても、甚しくだらしなく、従つて思想の混亂が愈々甚くなるのである。若し今日ソクラテイズが居るならば、彼は先づ流行語の意味について、嚴密な吟味をなすであらうと思ふ。例へば自由とか進歩とか、或は民衆的とか、奉仕とかいふ語について、明晰な定義を立てようと努力するに相違ない。自由な世の中であるために、各自が自分勝手に言語文字を使用するから、誰の用法が正しい

のであるか、全く見當もつかない。ヒュマニズム（人文主義）といふ語の如きも、昔から用ひられて来ただけに、尙更に各人勝手な意味をもつてこれを使用してゐる。オクスフォードの哲學者シラー氏は自ら人文主義者であると言ひ、ルナンは將來の宗教は眞の人文主義であると言ひ、ユトローピア黨もこの語を用ひて、その豫想を述べてゐる。またグラッドストーンはコントの人文主義と言ひ、ハーフォード教授はルソーの人文主義と言ひ、ドイツ人一般はヘルデルの人文主義と言つてゐる。然るにコントも、ルソーも、ヘルデルも、人文主義者ではなく、ヒュマニタリアン（人道主義者）であつたのである。また或有名な雑誌には、ハーヴァードには『ヒュマニタリオン精神』が衰へたと言つてゐるが、その意は人文主義のつもりであるらしい。かやうにヒュマニズムなる語は、明確な觀念なく用ひられて、ヒュメーン、ヒュマニスティック、ヒュマニタリアン、ヒュマニタリアニズムなどの語と混同されてゐるのである。文化について何事をか述べようといふ場合には、先づ此語の意義を明確に定めなければならぬ。さもなければ、徒らに思想の混亂をおこすばかりで、語の有つてゐる意義は隠れてしまふ。

これらの語はラティンの *Humanus, Humanitas* などから發生したもので、ガストン、ブアッ

エールの詳細な研究に據ると *Humanitas* といふ語は初から、かなり曖昧に用ひられたものらしい。晩期のラティン文學者ジュリアスは既にこの語が、眞の意味から離れて使用されることを歎じてゐる。彼はこの語が『ギリシヤ人の言ふ博愛、即ち無差別の慈悲』といふ意に用ひられるのは間違つてゐる、これは教理と訓練を意味するもので、人一般に用ふべきでなく、ただ選ばれた少數にのみ應用すべきである、即ち貴族的意義で、民衆的でないと言つてゐる。ジュリアスの言は我々にとつても意義淺からぬものである。彼の觀察によれば、ローマ人の頽廢したのは、今日でいふ利他主義、即ちすべての人間に對する愛を、諸徳中の最上と見たことから始つてゐると言ふのである。即ち人文主義と博愛とを混同したことから始ると。そこで我々の時代における博愛には、更に他の觀念が加つて、一種異つたものとなつてゐる。其觀念とは進歩といふことである。

ジュリアスは、普遍的慈愛と教養訓練の相違に氣付いたればこそ、上記のやうな考を述べたのである。彼の時代において、既にこの二つを言ひ表はす別々な語が必要であつたので、今日では尙更にさうである。人類全體に同情し、その將來の進歩を信じ、その進歩のために奉仕しよ

うといふ人はヒュマニストでなく、ヒュマニタリアンであつて、その主張は人道主義と稱すべきである。この人文主義といふ語は、ヒュマニタリアニズムを簡略にしたものと思つては誤解である。人道派は、知識と同情の廣潤を極力主張するのである。詩人シルレルが、數百萬を胸に懷き、全世界にキスすると言つてゐる場合は、人道主義的である。然るに人文派の愛撫は選擇的である。多少術學的であつたジュリアスは *Humanitas* なる語から同情の意味を明白に除去して、教養訓練がこれであると主張し、其證據としてシセロオを擧げてゐる。しかしシセロオは一方に偏倚するやうな人でなく、その思想は、紀律ある選擇的同情の必要を認めてゐた。選擇なしの同情は軟弱となり、同情のない選擇は倨傲となる。

人道派に對する人文派は、人類全體の向上の方法に力を注ぐよりも、一個人の完成に重を置き、同情を許容もするが、それを訓練し、判斷力によりて調節すべき事を主張するのである。ブルヌチエールは時代を超越した評論家と言はれたが、テレンスの語「人間に關するもので、私にとつて無縁の物は一も無い」に、人文主義の完全な定義があると言つてゐる所から見れば彼も亦知識と同情の無制限の擴張といふ思想に支配されてゐたのである。テレンスの語は選擇

の思想を含んでゐないから、人文主義を説明するものでなく、人道主義者の標語として適切である。人道主義者は自己を除いて、他の何物をも改善しようとして多忙を極める。彼等は知識の廣大を欲して、プレトオから日曜新聞の附録までを通讀する。しかし知識と同情の世界的たることは、人文主義的たることの必要條件でない。それは紀律と選擇によつて整調されなければならぬ。

人文主義者は同情と選擇の均衡を保つ者である。我々近代人は、これに反して同情の方に不當な強調をなすのである。古代のギリシヤ及びローマ人は、選擇のために同情を犠牲にする傾があつた。だからその人文主義は貴族的性質を帯び、その同情は狹隘な方へ流れるだけで、教養訓練を欲してゐる賤劣なものに對しては、倨傲な態度を見せたのである。無選擇な世界的同情、即ち四海同胞感は、キリスト教と共に流布したと、普通に言はれてゐるが、教理と訓練で補はれない愛と同情の稱揚は、近世の人道派の努力で優勢になつたと見て宜しいのである。キリスト教徒の同情は、同一の教理と訓練を奉ずる者の間にこそ、一般に行き渡つてゐるが、他に對する彼等の憎惡の態度は狂氣じみてゐる。實にキリスト教の一面は選擇の強調で「召さる

る者は多しと雖も、選ばれる者は少し』といふ語が、よくこれを證明してゐるのである。だから使徒パウロや、オーガスティンが、今日の人道派の社會改良とか、慈善とかいふ事業や談論を見聞するならば、衰弱、或は頹廢と評するかも知れぬ。

近代的同情の民衆的包容性に對して、古代人文派の貴族的超越性と卑俗に對する輕蔑感があるのである。この超越と輕蔑は、ルネサンスの人文派に現れてゐる。彼等は教理と訓練を有つと共に、それらを傳達する方法に熟達してゐるといふ點で、優越感を懷いてゐた。この尊大な人文主義の響はミルトンの詩中に在る。しかし、この人文主義も、後には社會の階級及び特權と結託するやうになつた。即ち理智的に優秀といふ事と、社會階級において優等といふ事とが密着して、人文主義の眞面目は蔽はれた跡がある。従つて有識階級の同情も、極めて狭い範圍に及ぼされただけで、同階級以下に對しては、ただ倨傲、尊大、冷淡、無頓着な態度を見るばかりとなつたのである。その例はイギリス人で、彼等は同情の範圍を狭めてしまつた。これは感服すべきことでないに相違ないが、その反對に、同情の範圍を大に擴張して、人文主義の傳統的訓練を弛緩し、或は衰弱させたとするれば、其は一そう感服されない事である。イギリスの

人文主義は同情の範圍を狹隘にしたとは言ひながら、しかも古代の典型から、全く離れてしまつたものでない。ブチャール教授が言ふやうに、紳士及び學者に關するイギリス思想と、往昔、アゼンズの貴族的民衆主義の時代にゐた教養ある人の見地との間には、眞の連絡があるのである。

古代の人文派或は人文主義と言つても、それらの語が、その時代に使用されたと言ふのでない。人文派といふ語は、ルネサンス初期から用ひられ、人文主義といふ語は、更にその後から用ひられたものである。ルネサンスの人文主義を研究するには、その頃一般に認められた人性と神性の對照を見なければならぬ。ルネサンスの要義とは、神性過多で人性過少の時代に對する反抗である。即ち中世紀の神學をもつて、人性の或方面を萎縮衰弱せしめたことに對する反抗、即ち純粹に人間的また自然的である能力に、致命的抑制を加へた超越的幻影に對する反抗である。さて人間的である能力の自由自在な活動のモデルは、古典中に探られたのであるが、古典尊重は、やがて一種の迷信となつて、遂には古代語の研究をなす者を人文派と呼ぶやうになり、その人が人文派たるに必要である教理と訓練を有するか否かを問はなかつたのである。だからその頃、人文派といはれた人々で、眞に高雅であつた者は稀少であつた。彼等にとつて

の人文主義とは教理と訓練を意味するのでなく、却て總ての教理に對する反抗、又は中世紀の極端から脱出して、他方の極端に走ることであつた。イタリアのルネサンス初期の大勢は五官や智性の解放で、北方諸國では良心の解放と言ふのが、その氣運である。これは近世史上における最初の膨脹時代、最初の個人主義進出の時代であつた。かやうな時代には知識と同情の擴張に重を置く傾の強烈となるのは當然である。この時代の人は、エマーソンの言ふ知識の病的食慾をもつてゐたのである。中世紀傳統の束縛から脱する熱情、自然と人性を和解させる喜悅、それらのために合法と選擇は一時姿を隠す有様であつた。ラベレーなどは、合法を守るでもなく、また選擇的でもなく、偉大な天才を有してゐたにも拘らず、高雅な趣を見せるよりも昔からの野蠻を栽培してゐる。かやうに個人能力の無紀律の發展、また抑制なしの自由を享樂することは膨脹時代に特有である弊害を生じたのである。即ち無政府的自己肯定と放縱であつて、これらは社會の存在を脅かすものである。だから社會はこれに反抗して、集中の時代が來たのである。この變遷は、時期も場所も各異つた有様で現れた。イタリアでは一五二七年のローマ掠奪及びトレント會議の頃と略ぼ時を同じくして、この變化が現れ、フランスでは、宗教

戰爭について、ヘンリー第四世の政策及びマレルプの文學に現れてゐる。

どんな時代にも暗流もあり、傍系もあるから、大勢と異つた例を擧げることまでできるが、大勢はやはり大勢である。そこでルネサンス晩期の大勢は何かと言へば、自由な膨脹を是認した人文主義から、訓練と選擇を嚴重にするといふ人文主義への推移である。この氣運は、フランス及びイタリアでは、個人に對立する社會擁護といふ思想と結んで、一そう複雑なものとなつてゐる。選擇と訓練は必ずしも個人主義と相容れぬものでないが、その頃の人文派の多數は、餘りに困苦しく、狹量になつて高雅を失つてしまつた。その訓練とは外部或は上部から來るもので、その教理とは詳細に編成された法典に外ならぬものであつた。當時の評論家で、ヨーロッパ諸國に感化を及ぼしたスカリジャーは言ふ、藝術の要旨は選擇と自己に對する潔癖であると。此潔癖な選擇は、ラベレーの膨脹的に反するマレルプの閉鎖主義的となり、遂に純潔主義を生じて、人の思想感情のみならず、語彙をすら貧弱ならしめる傾向を作つたのである。カステイリナーネは言つてゐる、紳士たるには超越と輕侮を有つべきであると。この語を嘯みしめて見れば、深い意義があるのであるが、不幸にして貴族的超越は、廣い同情と知識の酵母を有たず、

又潔癖な選擇と結んで、偏狭な人物を造ることになつてしまつた。ヴァルテールの攻撃した或人物はこの見本とも言ふべきもので、その人は同情の包容的といふことよりは、その排除する物の數の多いことで、紳士と見なされたのである。即ち潔癖な選擇を遺憾なく活用した人物がこれである。

後期ルネサンスにおける訓練と選擇と、初期の膨脹的傾向とは、甚しく異つてゐるやうであるが、兩者の根柢には同一目的があつたのである。即ち完全な人間を作るといふ事がこれで、後期の人文派及び新古典派は、一般に膨脹の長所よりも、集中の長所に依つて、その目的を達しようとして試みたのである。彼等から見れば初期ルネサンスの人々は、個人の氣まぐれと粹狂を許し過ぎた嫌があり、彼等は主題の選擇を嚴にし、教理と訓練に重を置いたのである。なほ古典の教理と訓練を、キリスト教の教理と訓練に應用して、その目的を達しようとして努めた。このキリスト教傳統と古典の調和を計らうとしたことは、カトリック教國ではジュズイット派に、新教國では古い大學科目に列べられてある研究題目に現れてゐる。もちろん神性及び人性兩方面の選擇は代表的のつもりであつたらうが、實は不適當であり、兩種の教理と訓練の調和といふも

のも淺薄であつた。もと／＼多くの點において異つてゐるものを、調和しようとして試みたのであるから、皮相的といふ非難を蒙つたのはやむを得ない。初期ルネサンスの人々は、彼等の解釋した神性と人性の相違に氣付いてゐて、妥協的でなく、いづれか一方に味方したのである。マキャベリーは、世界を柔弱にしたものはキリスト教であると言ひ、ルーテルは古典研究は狭少の範圍ならば格別、さもなければ有害であると言ひ、カルヴィンはラベレーを罵り、ラベレーはカルヴィンを詐稱者と難じてゐる。しかし彼等が古代の文學と表現の技藝をもつて、キリスト教に貢献したことは、多くの點において賞讃すべきである。

なほ紳士といふ概念の發達を辿ることも亦必要である。前記したカスティリオニーの書から第十六世紀イタリー人が禮法に關して記述したもので溯つて、紳士といふ概念と學者といふ概念が結び付いた跡を研究するのは、人文主義の正體を見る上に必要である。この學者と紳士の結合した理想の面影あるイタリーのカスティリオーネ、イギリスのフィリップ、シドニーのやうな人は學者及び紳士の理想と共に、ルネサンス時代の華やかな活氣を顯してゐる。スカリジヤなどは、選擇を主張したにも拘らず、すばらしい街學の徒である。一般に、學者が街學の臭

味を洗ひ落して都雅上品な趣を保ち、又人文主義の標準が世人と聯合したのは、フランスの感化である。しかし紳士と學者の理想が、外面的、慣例的となり、後の新古典派の或者に見ゆるやうな、紳士氣取りや、浮薄なものと下落し、元は深刻な智見であつたものが、ただ禮儀正しい僻見と變質してしまつたのも、亦フランスの影響である。さりとして我々はロマンティック派に倣つて、慣例すべてを排斥すると同時に、高雅な抱負までをも棄ててはならぬ。新古典の最悪な技巧においてすらも、彼等は古代の人文主義の脈を保つてゐる。即ち偏頗を恐れ、或能力の衰弱と共に他の能力が過度の發達をなすやうなことを嫌ひ、何事についても過度を避け、また平靜と熱狂は兩立しないから、その熱狂を信じない、と言ふ點は、とにかく古典に現れてゐる人文主義の命脈を傳へてゐるものである。彼等は感激から離れて自由な立場に在り、何事をも不思議がらぬ。これに反してロマンティック派は何事をも不思議がり、殊に自分自身と自身の天才を、驚異の念をもつて見る。新古典派は誤つた方向へ走つたと言つても、その様子や態度は人性の普遍性を失はぬもので、またその文章や談話に、術語や専門上の言語を用ひぬやうに努めてゐる。ジョンソン博士は言ふ、『完全な善い育ちとは、どんな職業のマークも無く、態度一

般に都雅なことである』と。そのジョンソン博士は必ずしもこの通りであつたと言はれないが、その言は紳士なる者を説明してゐる。この紳士の概念の根柢にあるものは、特別化を嫌ふことである。『何事につけても自慢せぬのが、眞の紳士と學者である』とは、ラ、ロシフコーの言である。この語とアメリカ實業界に時々聞かれる語を比較して見よ。二つの事を知る者は因果だと。往昔の人は、たとひ淺薄と見なされても、偏頗と言はれるを厭ひ、今日の人は淺薄と言はれるよりも、むしろ偏頗と見られたいのである。

歴史的に見れば、人文主義は同情の極度と、訓練と選擇の極端、この兩方の間を往來した。高雅といはれることは、兩極端を調和する具合に正比例して保たれたのである。これを一般的に言ふならば、パスカルの言ふやうに、優秀な人は、彼自身の相反する長所を調和して、中間の地を占有する者である。人はこの諸長所を統一する能力あればこそ、人性を發揮し、他の動物よりも優等たることを示すのである。傳へられる所では、キント聖徒フランソア、ド、サールは鷲と鳩の性質を調和した人、即ち柔和な鷲であつたと。ギリシヤ哲學史は概ねソクラテイズの人格は思想と感情の調和を保つたものであると言つてゐる。此ソクラテイズとルソーを對照して

見よ。ルソーの心臓と頭腦は同一人に屬してゐないやうに思はれるのである。對照は聖賢と詭辯家のそれである。人は一方面に傾き易い性質をもつてゐるが、その性向を統御するに従つて高雅となるのである。しかし、その長所相互の間に調和を保つことが、なか／＼の難事であつて、一の調和を完成すれば、更に他に調和すべきものが出て來るのである。

適度の法則は人生の最高法則である。これは他の法則を制限し、包容する。瞿曇佛陀が「急にこれ(心)を控きて放逸ならしむる勿れ。この心を縦にすれば善事を喪ふ。これを一處に制すれば、事として辨ぜざるなし。このゆるゑに勤めて精進にして、心を折伏すべし」(遺教經)と説いてゐるのは、この法則の概念をもつてしたのである。しかし印度は、この教訓を守る點において失敗した。ギリシヤは恐らく諸邦中、最も高雅であつて、適度の法則を明白に公式とした(何事も多過ぎず)のみならず、この法則を犯す者に復讐するネミシス神を知つてゐた。

そのギリシヤ人とても、すべてが適度の法則を知つてゐたのでない。その大多數は、やはり一方面に偏して、中庸の何たるかを知らなかつたのである。大體に高雅であつたギリシヤ人が尋常な調節において失敗する筈はなかつたが、しかもその文化は放縱、もしくは極端或は過度

のために悩んだといふのは、我々にとつての教訓である。この事の研究は容易ならぬ仕事であるが、大體を言へば、彼等は懷疑説の發生のために、傳統的標準を失ひ、その心理は危険な過敏状態となつて、個人に訓練を加へる新標準を發展させることが出来なかつたのである。別言すれば、彼等は統一と雑多、或は哲學者の言ふ絶對と相對を調和する事において誤つたのである。賢哲ソクラテイズやプレトオ等は、この問題の解決に努力したのであるが、アセンズはソクラテイズに死刑を宣告して、賢哲と詭辯派を區別し得なかつた愚昧を後世に遺したのである。プレトオは「フェドラス」中に、ソクラテイズをして言はせてゐる。「一」と「多」を結合してゐる人があるならば紹介を願ひたい。私は神に従ふやうに彼の足跡に附いて行かうと思ふと。此「一」と「多」の調和は至難の業であるが、また非常に重要な事で、その業に失敗した民族は滅亡したのである。印度人は「一」の壓倒的意義に押し潰されてしまつた。一方、ギリシヤ人は統一を仕損じて無意義なギリシヤとなつた。而して傳統的標準を失つて、個人の思想や感情を萬事の尺度となす傾向の強い今日は、往昔のアセンズに似てゐる。ヒュミニズムといふ名稱をふりかざしてゐるシラー氏は、何となくプロタゴラスを聯想させる。ジニームズ教授のブラグマティズム

も、雲をつかむやうなヘーゲル形而上學よりは明確であらうが、多元論に傾き過ぎてゐる。

健全な人性は統一と多との均衡を保つてゐるものである。人生には、絶對者と交感し、高尚な標準に服従すべき義務を感じる瞬間があると共に、永久の流轉と相對の内に巻き込まれた感のある瞬間がある。エマーソンの言ふ、諸神と共に在る感をもつ瞬間と、サント、ブーヴの言ふ無限の幻影中に在る刹那の幻影たる感をもつ瞬間がある。人間は「一」と親近たる點において高尚であると同時に、他の現象中の一現象であり、その現象的自我を等閑に附する所に危険が生ずるのである。その能力の高雅な鍾は、自然主義の過度からも、また超自然主義の過度からも憚む。ルネサンスは中世紀の超自然主義の極端に反抗して、自然と人性を接近させようと努めたのであるが、その後の世界は中世紀の正反對に走つて、自然と人性の調和でなく、兩者の相違を取消してしまつた。スピノザ哲學によれば、人間は身心共に自然の一部に外ならぬものである、別言すれば自然内の一獨立帝國でない。さて超自然主義が衰弱にまかせた人性の能力を復活させたものは自然主義であるが、こんどは自然主義のために、靜觀の生命が衰へたのである。人間は幾多の事實を獲得して多大の利を占めたが、群多のために「一」の姿を見失つた。こ

の「一」が曾ては人間の下級自我を威服せしめ、また抑制したのである。エマーソンは「人の法則」と「物の法則」は和解しないものであるから、この兩方を使ひ分けなければならぬといふ意を述べてゐる。エマーソンには統一と多とを使ひ分け過ぎてゐる嫌がある。そのため彼の言論は嚴肅であるにも拘らず、朦朧曖昧の趣がある。しかも彼は科學的唯物論の時代における精神の或眞理の證人である。人とその精神の産物たる言語や文學は、現象界を征服した科學の方法で研究されて、それら自身の法則を有する物として取扱はれぬ。茲に危険があるのである。

往昔、人文主義は神學の侵害に對して防備する必要があつた様に、今日の人文主義は科學の侵害に對して防禦の途を講じなければならぬのである。さもなければ、文學美術の生命は、危険に瀕することにならうかと思はれる。ヒューニズムを人文主義と譯すのは、必ずしも適當でないが、人本主義或は人性主義とするよりも、幾分か原意に近いと思つて、これを用ひたのである。「周易」の賁卦の象傳に「文明にして以て止まるは人文なり」とあるから、その人文といふ語を人倫の道とか、禮樂の教とかに限らず、廣い意味に用ふれば、ヒューニズムの意義を傳へ得ようかと思ふのである。ただし、この語も、ヒューニテリアン、ヒューニテリアニズムなど

いふ語と共に、今後原語のまま使用する方が至當であると思ふ。

(二) 人道主義派の二典型

ルナンに従へば、近世思想界の一大重要事は、第十六世紀に、人類本位の世界観の代りに、コペルニカス天文学を採用したことである。新天文学の進出と共に、人間は無限といふ感を抱き、また物質上の廣大といふことを味つたのである。このために、地球は宇宙の中心でなくなり、人間も亦世界の中心でなくなつて、人類は無邊無際的空間に漂泊するやうになつた。かうなつては、人類の優秀を肯定することが愈々困難となり、人は渾全の内に在る僅かな一部分のみとなつてしまつた。だから見方によつては、自然と人間は一であるだけに、まことに詰らなしいといふ感を起さざるを得ないのであるが、それには二つの慰藉があつて、超自然といふ特權を失つた感を癒すのであつた。これを感傷的方面に見れば、ワーズワースの言ふ『賢明な黙從』状態から生ずる恩恵によつて慰められ、科學的方面に見れば、ベーコン流を汲み、自然に服從

して、しかも自然を征服し得ると言ふ豫想によつて埋合せされるのである。

自然派は、これを主張する人の氣質によつて、感傷的及び科學的の二類に別れ、この自然主義と密接な關係ある人道主義者も亦科學的と感傷的の二種に別れるのである。實驗的及び功利的思潮は、科學的人道主義によつて鼓吹され、感傷的人道主義は、ロマンティック氣運の最大な要素でないにしても、その重要な一要素であつた。自然主義と人道主義の種々な形式が、近世思想と接近した徑路を十分に探究する暇はないが、この聯合に必要な要素は、進歩といふ觀念であつたことだけは明白である。古代ギリシヤにも、或はルネサンスにも、人文主義と自然主義があつたのであるが、人類全體の一般的及び組織的進歩の希望を明白に掲げたのは、比較的近世のことである。古來の哲學は進歩の觀念で改造され、その進歩の觀念は、自然との密接な共同作業の結果として獲得される人類一般の利益といふ信念の上に成立するのであつた。この新思潮における科學の役目は、情操の役目よりも遙かに大であつた。人間は昔から黄金時代を夢想したが、その黄金時代を將來に置くやうになつたのは、全く科學の勝利のお蔭であつた。ルナンの言ふやうに、近代を古代から區別するものは、人性といふ觀念と、その集合的業績の崇

拜である。傳統的標準の衰退と共に、この人性禮拜が、我々の宗教となりつつあるのである。

感傷的と科學的の兩人道派の説明については、歴史上から實例を取れば、一そう明白になるであらうと思ふ。さて科學的自然主義及び人道主義の人としては第十六世紀にベーコンといふ標本があり、降つて第十八世紀には、感傷的自然主義の異彩ある例としてルソーがある。この兩人は、その主張においても、生活と性格においても、これらの傾向を代表するに最も好く適してゐるのである。なほ以下ベーコン派とか、或はルソー派とか言つても、それらの人々が必ずしもベーコン或はルソーから直接の感化を受けたといふ意味を含めてゐるのではない。これらの語は、むしろ思潮の傾向を言ひ表はすものと見て欲しい。

ルソーの名に關しては、今日なほ熱狂的に意見が交換される。フランス人がルソーについて賛否の熱論を吐くのは、要するに、ルソーを中心として人生上の大問題があるからである。現代の各方面における急進主義について、とかくの議論をなすよりも、急進主義の元祖について討論するフランス人は聰明である。さてベーコンについての世論は、これと異つてゐる。ルソーに關しては、敵も味方も、その大影響を認めるが、ベーコンに關しては、その功績を輕視す

る傾がある。彼の努力は、ケブラー、ガリリオ、デカルト等以下であると評價してゐる人もある。しかし、何と言つても彼は人間王國の豫言者であつたのである。後の時代が試みたことは彼に藏せられてゐた混沌たる綜合中から、或物を引き出して、これを發展させたものである。なほベーコン、ルソーの外に近代の源泉となつたルネサンスの人を求むれば、ピトラークその人である。この三人は、それ／＼の行き方で近代思潮の源となつた者であるが、共に道徳上劣弱であり、また見方によつて賤むべき性格であつたのは、全く不思議な類似である。その道徳上の劣弱は偶然のことと見なす人もあるが、さうばかりとは言はれない。彼等は、その力量に於いても、また弱點に於いても、全く近代精神の豫言者の人物であつた。

ベーコンの悖德について、攻撃もあり、また多少辯護する者もあるが、その墮落はやはり進歩の觀念に基いてゐるのである。彼は自然法則の研究に夢中になつて、人の法則を忘れたのである。事物の征服に熱中して、自己の統御を怠つたのである。彼は自然主義的性質に支配されて、ただ権力と成功に心酔して、卑賤となつた者の見本である。實質上の收得を愛好するといふよりも、権力と成功に誘惑されて人の法則を忘却した者は、近代に降るに従つて、益す多く

なるやうである。ペーコンの生活の傾向は、實證主義へ向ひ、純粹に分量的及び力學的標準を立てるに至るものであるが、彼自身には、なほ人文主義の遺物がある。群衆を嫌ふ點はその一例である。なほ傳統的キリスト教の面影も残つてゐる。彼は物質上の進歩が人間の高尚な性質を害する懼あること、また物質研究のために、信念が衰へ、靈妙な神祕に對して盲目になる懼あることに氣付いてゐた。しかもなほ彼は誤つた生活に迷ひこんだのである。それは人の法則を忘れたからであつた。

科學的研究及び發見によつて、人類全體としての進歩を豫想する彼の思想、即ち人道主義の概念が、教育に影響を及ぼしたのは急速でなかつた。それが實際上有効となつたのは、第十八世紀のヨーロッパ、殊にルソーとデイドローのフランスにおいて、顯著となつた知識及び同情の博大を主とする氣運と結合してからのことである。この氣運は、近世における二度目の膨脹時代を作つたのである。自然と人間の間隙を閉ぢようとした無選擇の自然主義はラベレーに現れてゐるが、その氣運は、第十七世紀の集中時代には、蔭に隠れてしまつた。然るにデイドロー及びルソーの時代に至つて、これが再び表面に現れて、ルネサンスの自然主義と近世の自然主

義とが結びつたのである。この時代にあつては、選擇の原理は何處へか隠れてしまひ、代つて分量的力學的標準が、人心を支配し、適度と制限を缺く知識及び同情の擴張が重んぜられた。ここで、ペーコンの人道主義と、この氣運とが手を携へたのである。潔癖な選擇なしに、普遍的及び百科全書的好奇心の開拓に勉め、同時にこの好奇心を人類の進歩に奉仕せしめようといふのである。だからこの時代の學者といふ型は、百科全書に耽り、また百科全書に一部の位置を占めるだけの知識を貢獻しようといふ野心ある者であつた。しかし、この希望の二面、むしろ二部、即ち廣さと完全を兼備することは、殆ど不可能と思はれたのである。のみならず、知識の博大があつても、それから引き出される原理の間には、往々矛盾する點のあることを認めないのである。相反する種々の原理は、人文主義の立脚地から、調和されなければ、その矛盾は除去されるものでない。ところが、その人文主義はこの氣運の採らないものである。そこで人道主義者の進んだ途は、狹隘な専門的研究であつた。萬事を完全に知ることが不可能であると氣付く場合には、我々の吸収する知識に、選擇といふ高雅な原理を應用すべきであり、また、この原理の探索には、人類の智慧と經驗によつて、自己の智見を防備しなければならぬ。然るにべ

ベーコン派の試みた事はこれではなかつた。彼等は一個人が完全な知識を持つことは、望み難いとして、その希望を全體としての人類に委譲した。かなり空想的な考方である。彼等は人間の完成とか、諸能力の調和とかいふ方面には頓着しなかつた。その希望するものは、理想的均齊を犠牲にしても、或特別な能力の養成、又は或特別な問題の徹底的研究であつた。かやうにして彼等は、その專業について益す深い穴を掘らうと試みたのである。彼等から言へば、その研究は、たとひ一小断片であつても、夫が進歩の殿堂の壁を造るに役立つならば、満足するのである。彼等は最高の能率を得て、その能率が人類の進歩に有効であれば、それで満足するのである。その目的は奉仕と勢力の養成であるとは、彼等の言はうとする所である。

このベーコン派の主張も、若しルソー派との結合が行はれなかつたならば、人文主義の標準の基礎を動かし得なかつたらうと思ふ。科學的及び感傷的自然主義は、多くの點において異つてゐるが、教育上では不思議に合致してゐる。その好例としては、ハーバート、スペンサーの『教育論』と、ルソーの『エミール』である。スペンサーはルソーのこの書を読まなかつたと言ふことであるが、その教育上の主張は、ルソー主義と見ても差支ないのである。ベーコンの言ふ

科學的進歩の觀念と、ルソーの言ふ自由の觀念とが相結んで、教育上における隨意選擇制度が主張されるのである。その主張を推しつめて見れば、人間に對する一般法則なるものは無いから、或法則や慣例によつて、青年の教育を規定するのは間違つてゐる、青年は自身の好む所を知つてゐるから、その研究科目は、これを彼に一任して置けば宜しいと言ふのである。しかし青年は時の風潮に支配され易く、またその衝動に動かされ易いから、隨意選擇、或は自由選擇の制度といふものは、結局教育上の印象主義を獎勵することであり、また學生は、なるべく困難の少い途を選ぶことになつて、自己修養といふ大切な事が行はれなくなるのである。

ルソーは自由の使徒、或は新教育の主唱者と言はれてゐるが、其五人の子供を棄兒院へ送つてしまつた下劣な人間である。彼が親として、子供に對する義務を顧まないのは、偶然のことではなく、やはりその主張たる自由の觀念から來てゐるのである。彼はすべての制限や紀律を排斥するために、殊更に自由を主張してゐるやうにも見える。彼の好むものは、衝動のままの行動で、その衝動は善であると言ふのである。彼にとつては、何事も義務或は責任の形で現れるものは悉く呪ふべきであつた。その自由の精神は、倨傲といふことよりも、むしろ遊惰無性から

成つてゐるもので、文明社會における輕微な義務でも、彼に嫌忌の念を起させるのであつた。「普通の交際を嫌ふのは、この故である。親密な交際の尊いのは、何等の義務をも含んでゐないからだ。人はその心情に従つてゐれば、それで宜しい。だから私は恩恵を受けるのが嫌だ。恩恵は報恩を呼ぶ、その報恩は一の義務であるから、私は恩知らずの心情を持つてゐると思ふ」と言ふのが彼である。かやうな考には、人の法則も、紀律の觀念も、入るべき餘地がなく、ただ道德上の印象主義、しかも往昔の詭辯派が過度の理智的柔軟性に建てた印象主義と異り、感性に本づくこの主義を見るのである。即ち個人の感情以上に、嚴然として位する行爲の規範が無いのである。

學業の途上に在る者で、或は遊惰に日を送るもあり、或は非常な努力をもつて勉強するもあり、また或懶者は、或場合に臨んで、以前とは打つて變つて、極度の勉強を爲すこともある。しかし、人文主義の立脚地から見れば、彼等は遊び暮らす事と、餘暇を有つ事との區別を知らず、心の没利害な訓練といふ事をも知らぬ者である。その勉強といふものも自己の生存のためか、或は勢力を獲得するためか、或は實際的または科學上の結果を獲んがためである。だから

所謂文雅教育の觀念は、漸次に稀薄となりつつあるのである。この文雅教育、或は高尚な教化といふことは、人の法則を無視するベークン派に委せては實現されない。またこれを人の法則と自己の氣質を混同するルソー派に委せても効果があるまい。人文主義から見れば人間の重要事は、世界に働きかける勢力をもつことよりも、自己に働きかける能力を有する事である。この能力を養成することは、優秀であると同時に、非常に困難であり、高雅な選擇の原理と、眞正な制限の原理を要するのである。人は知識と同情の博大よりは、正當な選擇によつて、自然のただの勢力よりも、本質において優越であることを證明するのである。人は、その爲すことばかりでなく、爲すことを避けることによつて鑑査さるべきである。人文派は精力と意志を識別するが、近世人の多數はこの點を忘却してゐる。人は精力家であつても、精神的に懶者であることもある。ナポレオンはヨーロッパを席卷して、絶倫の精力を示したが、若し危機に臨んでその權力慾を抑制し得たならば、更に意志の力をも示し得たのであらう。人は、その主要な能力をも、また優勢な熱情をも或點において抑制し、その反對のものによつて、これを調節してこそ、最も人間的であるのだ。

ここに説く意味は、自然主義の評論家が、シェイクスピアについて述べた言を見れば、よく領解されようと思ふ。シェイクスピアの同情については異論がない。ところで科學的及び感傷的自然派は、シェイクスピアに選擇と抑制がないからとて、この詩人を稱揚してゐるが、實は、さう讚美するのは、彼の人文主義的面目を取り去ると同じことである。ユーゴーのシェイクスピア論と言ふものは、ユーゴー自身の藝術の辯護のやうなもので、その主旨は、ルソー主義の立場から、シェイクスピアの天才を、巨人的と云ひ、自然力的と持ち上げるのである。即ち放縱自在な天才が無限に飛行するといふのである。科學的自然派としてのテーヌは言ふ、シェイクスピアはルネサンスの純粹な産物で、ルネサンスは無抑制の精力の爆發であると。ユーゴーもテーヌも共に、シェイクスピア自身及び其表はした人物の無節制や強暴に就て、反覆力説してゐる。かやうな評言を読むと、ハムレットの俳優に對する忠告を想ひ出す、『畢竟、情が高ぶつて、早瀬暴風、乃至旋風のやうに狂ひ亂るる最中ちやとて、必ず程といふことを學うで、ふくらみを失はぬやうにするが肝腎ぢや。』シェイクスピアは一般に、この主旨を守つてゐたのである。勿論更に選擇と抑制を嚴にしたならば、彼の藝術は一そう輝いたらうと思はれる點もあるが、決し

て放縱無制限の藝術を用ひたのではなかつた。また或一派は、彼に宗教の缺けてゐる點を指摘してゐる。これは或點まで承認される。ホーマー、ソフォクリーズ、或はダンテと比較すれば、シェイクスピアは渾成體を見せるよりも、ロマンティック混沌體を見せる。しかしこれは神性に對して人性を強調したルネサンス時代の影響であつて、必しも宗教味が非常に乏しいからとは斷定されない。尚トルストイも同様な理由で、彼を非難してゐるが、シェイクスピアとトルストイの衝突は、人文主義と人道主義の争と見るべきである。人道主義の熱狂者たるトルストイは選擇の原理を無視して、同情の原則によつて四海兄弟主義の宗教を押し通さうとする。だから彼はシェイクスピアが少數のためであり、その人生觀が大體に選擇的、貴族的である點を是認しないのである。

人文主義者の立脚地は、同情の過度も、選擇の過度も、自由の過度も、抑制の過度も共に避けるのである。即ち抑制ある自由と同情的選擇を主眼とするのである。その信ずる所は、人は過去におけるやうに、一定の教理と訓練に服従することでないにしても、神と云はうが、大我と言はうが、或は法則と言はうが、とにかく普通の自我以上である何物かに對する尊敬の意を

持たねばならぬと言ふのである。この抑制の原理がないならば、人はルソーのやうに、極端から極端へ走るだけで、中間の位地を占め得ない。ルソーには、萬事と皆無の間に媒介者がないのである。心情の無法な慾望に何等の抑制をも加へぬルソーは、宗教的義務の代りに、人類に對する同情を力説し、同時に人の權利と自由を猛烈に主張する。彼は權利の感を義務の上に置くから、その結果は、無束縛の自己肯定となり、その自己肯定は、無選擇の同情となり、四海兄弟感となるのである。しかし、解放を欲する自己利益の原始的勢力と同情原理とは、よく調和し得るものであらうか。經濟學者は言ふ、自己利益といふことを適當に教化すれば、博大な同情が行はれると。果してさうであらうか。宗教的抑制の除かれた今日、現に我々の見るものは無政府的個人主義の極端か、或はエトローピアの共產主義の極端ではあるまいか。世人はこの兩極端いづれへか走りつつあるのである。また美しい四海兄弟感の發言はあるが、實際に強く現れてゐる傾向は、帝國主義的集中である。フランスの道德論者が言ふやうに、人は義務の奴隷でなければ、腕力の奴隷である。

今日の形勢を見るに、道德が甚しく墮落したとは思はれぬ。これは一定の教理と訓練が、な

は多少の威力を保つてゐるからである。或一定の教理や訓練は、たとひその効力を失つても、それに養はれた習慣は、繼續するものだ。ルナンの言ふやうに、鶏の腦を除いても、或時間は何をなさるやうなものである。しかし實際において、傳統上の抑制禁遏は日々に衰へつつあるのである。なほ一方には、科學の進歩があつて、人はこの力に據つて文化が進歩しつとつあると信じてゐる。科學の進歩は歓迎すべきものであるが、そのために人の法則は等閑に附せられてしまふ傾がある。現代人は、電氣の法則を知らなかつた古人を蔑視すると同時に、人の法則について熟考した古人を忘れ勝である。科學の進歩と愛憐の念の普及は、喜ぶべき事であるに相違なく、またそれらが多いだけ益す喜ぶべきである。しかし、それらが自身で絶對であり、自足であると立てられる場合に、危険が伴ふのである。ベーコン派が分量及び力學的法則を以て人の法則となし、ルソー派が社會に對する愛憐をもつて宗教的抑制に代へようとする場合に、文化の危機が生ずる。殊にルソー派の主張には、宗教的情操が混入してゐるだけに、却つて徳性を不健全ならしめることが多いと思ふ。それは愛といふ觀念である。愛の法則を無制限に世俗一般に應用することは、却つて憎惡を發生せしめる。社會主義的思想を懐く者の情緒には、

階級制度に對する強烈な憎惡が蟠つてゐるやうに觀察される。なほ無制限な自由を推奨することとは無政府主義を發生せしめるのである。この愛の觀念と無政府主義的思想の結合したものが博愛的無政府主義である。その結論は何であるか。シルレルの『群盜』中にその答案がある。盜賊の一人は、その首領を讚美してゐる、その意はかうである。正しい人間は、かやうな首領に仕へるのを恥辱とせぬ。首領は掠奪のために殺害をやらぬ。金錢を十分に持つても、これを塵芥とも思はぬ。分捕物の三分の一は彼の權利に屬するが、彼はこれを身に着けようとはせずこれを孤兒に贈つたり、有爲な青年の大學教育費に充てるのだと。社會奉仕のための教練と、權力のための教練の結果は、大方こんな思想を發生せしめることになるのではあるまいか。感傷的と科學的の二自然主義の間に、高雅な抑制の原理を立てないならば、ただ博愛的無政府主義の増長を見るばかりになるであらう。今日必要なものは、奉仕の教練でもなく、勢力の教練でもなく、智慧と性格の訓練である。人のために働くよりも、むしろ自己のために、修養を勵行することが急務である。自己鍛鍊に力を注いでも、なほ他人と世界のために盡すべき餘暇はあるものである。ソクラテイズの青年教育の目的は、能率の高い人物の養成でなく、敬意と抑制

を涵養することであつた。敬意と抑制を缺いてゐる能率の高い人間を養成することは、彼等に有害な方法數多を教へるに外ならぬ。實に現今は、嚴正な人文主義の思想を普及する必要があるのである。

(三) ロマンティックの語史

ロマンティックとか、ロマンスとか或はロマンティズムとか言ふ語は、文學史上ばかりでなく文藝を語る場合には、必ず出て來るものであつて、しかもその意義は甚だ曖昧である。ロマンティズムなる語の意義を明確にすることは、結局古典主義に反抗して興つた近世文藝の特色を研究することで、それは僅少な紙數で言ひ盡せるものでなく、本書中に論述したことも、實はその全部に亘つた研究でない。全くこの研究のために、一生をささげても、或は十分といふまでに達し得ないかも知れぬ。また、ロマンティズムとは、大體どんな主張であるかを知らうとするにも、先づその語の歴史ぐらゐを心得て置く必要があらうと思ふ。

中世紀では、ローマ帝國即ちラテン語を用ひてゐる國土を Romania とし、その人民を Romani (形容詞 Romanicus) とし、その國語を Romanicum (Romanice から來たもの) と言つた。Romanice は副詞で「ローマ風で」或は「ラテン慣習で」の意味である。それから、Roman 或は Romanus 或は Roman などの語が生じ、後にそのロマン語とは、ラテン語から轉訛した國語を呼ぶ詞となつた。今日のロマンス、ロマンティックなどの語の起源はこれである。だからロマン語は、ラテン語系に屬すものに相違ないが、古典のラテン語から直接に發生したものと言ふよりも、日常使用されたラテン語、即ち文章上のラテン語と異つた法則をもつてゐた言語から轉じたものと見る方が當つてゐる。つまり中世紀のローマ帝國領土に幾多の方言が生じ、その方言がロマンと稱されたと見て差支あるまい。然るに何時の間にか、このロマン語で書かれたもの、殊に古代フランス語で書いたものをロマンスと呼ぶやうになつたのである。更に第十五世紀の文獻に、フランス語(その頃の)で書いた兵事上の詩にロマンティックがあり、その記事は大體に假作であると言ふ意を述べてあるものがあるさうだから、その頃既に今日で言ふロマンティック、即ち事實よりも假作物の多いものと呼ぶのに、この語を用ひた

らしい。其後一般にロマンティックといふ語は、冒險を主として、原因結果の連続を無視したものを形容する場合に用ひられた。即ち奇怪、意表、不思議、並はづれなどは、ロマンティックと見られたのである。人心の一面である異常好みから、尋常でない想像上の産物の出るのは何處にも見る例であつて、中世紀人の想像から作り出されたものが、ロマンティックと言はれた。ここに既に古典主義に對するロマンティズムの芽が出てゐると見て宜しからう。

近世に入つて、右のやうな意味で、この語を用ひたのは、先づイギリス文學中に見られる。グレヴィルの『シドニー傳』(一六二八年前に書かれたもの)中にはアーケディアのロマンティックスといふ語がある。恐らくこれが印刷された此語の最初のものであらう。次いで、イヴリンの『日記』(一六五四年)には、風景の上にこの語を用ひてゐる。かやうに、この語で風景を形容したことは、ロマンティズムの發達を見る上に特に注意しなければならぬ。この他、異常、粗暴、奇怪などの意味で、この語を用ひた例は、ビープスの日記(一六六六年)、トマス、シナドゥールの一脚本(一六六八年)中に見え、一七〇〇年頃には、かなり廣く用ひられたのである。フランス及びドイツでは、イギリス文學の影響を受けて、この語を用ひだしたやうである。

もつともフランスは *Romantique* の前に *Romanesque* といふ語があつて、粗野、異常、冒險的の意に用ひられ、今日なほ *Romantique* と並び用ひられてゐる。*Romantique* なる語は、一六七五年頃に、用ひられた例もあるが、それが流行し始めたのは、第十八世紀の中頃、イギリス好みの盛になつた時代からで、更に非常な勢をもつて普及したのは、ルソーからである。彼はその晩年の作第五ブロムナド中、ビエン湖畔を賞した文章に、この語を有力に使用してゐる。なほ一七八五年頃から以後、この語は主として風景に用ひられ、それが文學上の氣運に用ひられたのは、後のことである。ドイツ語の *Romantisch* (フランス語の *Romanesque* と同義のもの) は第十七世紀の末から用ひられ、第十八世紀の初めには、奇怪、粗野、空想的などの意で使用された。なほこれを自然の風景に應用したのは、フランスにおけると同じくイギリスの影響で、殊にトムソンの『四季』の翻譯或は模倣が出てからのことである。

第十八世紀の後半になつてから、ゴシック、熱狂的、感傷的、繪畫的などの語が漸次に流行すると共に、ロマンティックなる語が、それらと結び付いて新氣運を代表するやうになつたのである。しかし第十八世紀の末、或は第十九世紀の初めまでは文學上重要な地位を占めず、一般に

は依然として粗野、空想的、並はずれ、奇怪などと同義に用ひられた。即ち、想像が合理よりも多量であるものをロマンティックと言つたのである。だから、この語が文藝上、重要なものとなつたのは、第十九世紀に入つてからのことである。但し、その思潮の發生が、ずつと以前にあることは言ふまでもない。序に一言する。これらの語を、日本語に翻譯する必要はなからうと思ふ。『維氏美學』の譯者中江篤介もロマンティック派の譯字には餘程困つたと見え、原語そのままを用ひ、その下に『新調派』と割注を入れてゐる。またロマンティズムを傳奇主義とか、中世主義とか或は熱情主義などと譯して見たところで、結局十分に原意を傳へることは出来ない。その原語そのものからして曖昧であるのだから、無理に翻譯しないで、原語そのままを我々の語彙中に取り入れる方が便宜であらうと思ふ。

(附録終)

註釋及び索引

APOPHTHEGMES,
 that is to saie, prompte, quicke, wittie
 and sentencious saynges, of certain
 Emperours, Kinges, Capitaines, Philoso-
 phers and Oratours, aswell Grekes, as Ro-
 maines, bothe veraye pleasaunt & profita-
 ble to reade, partly for all maner of
 persons, & especially Gentlemen.
 first gathered and compiled
 in Latine by the ryght sa-
 mous clerke Ma-
 ster Erasmus
 of Rotero-
 dame.
 And now translated into
 Englyshe by Nico-
 las Udall.

Excusum typis Ricardi Graecor
 1542.

Com privilegio ad imprimendum solum.



Title-page of Erasmus' "Apophtegmes," 1542

著スマズライ
 扉題の(集言金)「ズムセボア」
 (版出國英年二四五—)

凡例

一、固有名詞及び特殊の語は、すべてアルファベット順に排列してある。固有名詞から作られた語も、元の固有名詞の下に入れてある。例へば、ルソー派、ルソー主義など、皆なルソーの下に在る。

一、名詞其他、誰も熟知してゐるもの、また本文に説明してあるもの、或は容易に知り得るものには、すべて註釋を省いた。

一、固有名詞に次ぐ括弧内の數字は、生歿年で、□□と記入した以外は、皆な紀元後である。書名に次ぐ數字は出版年代、各項の終にある數字は本書の頁數である。

一、各項に掲げた書目は、本書と關係あるものを主としてあるから、有名な著作で、掲載されてないものもある。

一、生歿年不明の人もあるが、その生存時代は判明してゐるから、其儘にして置いた。また現

註釋及び索引

に生存中のやうに書いてある人で、既に故人となつた人もあらうと思ふ。調査不行届の點は他日補修しよう。

一、此處に掲載した書は、英、佛、獨、伊、互に翻譯してあるから、この内一ヶ國語を知つてゐる人は、どれをも讀み得ると思ふ。また我國にも、此内の多數は譯されてある。

A の 部

Actaeon.

アクティオン。ギリシヤ神話にある獵夫。アーティミズ女神の沐浴の様子を覗いたので、鹿に化せられ、自分の犬に咬まれて死す。(一四一)

Acropolis.

アクロポリス。上市の義。一般には衛城を言ひ、特にアセンズのもの指す。これはアセン

ズ市よりも二六〇呎高い處に在り、アセンズ人の祖先の住地であり、その後神聖の地として、パーシノン又はイレクシアムの神殿が建てられ、此處にギリシヤ美術の精華たる幾多の彫刻が置かれた。(パーシノン参照)(一四二、一四三)

Addison, Joseph (1672—1719)

アディソン。オクスフォード出身。雑誌「タトラー」に寄稿し、後「スペクテーター」を發行。論文、詩、脚本等の著がある。優美雅潔の文章と輕妙な諷刺で有名。Dialogues upon the usefulness of ancient medals は、一七〇三年から同五年の間に書かれたもので、出版は著者の死後。主としてローマ風俗の興趣を述べたもの。(一四四)

Alcina.

アルチーナ。肉慾の化身たる女。アリオスト Orlando Furioso 中にある妖女で、情人に飽くと魔法をもつて彼等を樹木、石、獸類などに化す。(一四五、一四六)

Alice.

アリス。リュイス、カロール作「不思議國におけるアリスの冒險」と「鏡の中」(Lewis)

Carroll's Alice's Adventures in Wonderland, 1865. Through the Looking Glass, 1871) 中の少女。二書共に少女小説で、不眞實を眞實と見せる空想の妙を極めたもの。前書の中に、尻尾や胴體が消えて、妙な顔ばかり残るチェシャ猫の話がある。英語で To grin like a Cheshire Cat と言へば、齒をむき出して妙な笑顔をすることであるが、何故にさう言ふのか、起源は不明であるさうだ。カロールは此笑、即ち表現だけ残つて、正體の分らないものを利用したのである。(三五・三九)

Antigone.

アンティゴニー。ソフォクリーズの作「アンティゴニー」の大立物で、エディパスとジョカスタ(實はエディパスの母)の娘。其兄弟ポリニースとイテオクリーズが相争つて共に死んだ時、クリオン王は、命じてポリニースの屍を野に捨てさせ、是を葬る者は嚴罰に處すと布告した。アンティゴニーは、屍を野に捨てさせたが、事露はれてクリオンの面前に引き出されて、訊問された時に、本書中に引用してある語をもつて、自己の行爲を辯明した。之はギリシヤ文學中、最も有名な語である。天の不文律は國王の法律よりも尊嚴である、人の倨傲な意志に屈

從して、天の法廷において刑罰を受けるに忍びない、と言ふ聲明である。此作はギリシヤ劇中、殊に有名で、紀元前四四〇年或は四四二年頃の作であらうと。(二〇八)

Antinomianism.

徳則廢棄主義、唯信仰論、道德無用論等の譯語がある。此語はルーテルがアグリコラ一派の主義に冠した名稱で、アグリコラ (Johannes Agricola, 1494-1566) はドイツにてルーテルと共に新教を唱へ、宗教改革に盡した人だが、信仰本位の説を立て、舊約聖書中の道德則無用を主張したので、終にルーテル、メランヒトン等と別れた。彼等の意見の相違基點は、道德則に據つて悔い改めるか、或は信仰に依るかと言ふことで、ルーテル一派は道德則の必要を主張し、アグリコラ一派は信仰に重を置いて、道德則の效力を認めなかつた。(五〇)

Aphrodite.

アフロダイテ。ギリシヤ神話。戀愛、美、夫婦仲、多産などの女神。(二二〇)

Apollo.

アポロニヤス。キーツの詩「レミア」の老哲人。キーツの詩は、フィロストラータス (Philo-

stratus 第三世紀初期頃のギリシヤ、ソフィストで修辭學者)の傳へてゐる Apollonius of Tyana の傳記中の奇談に本いたもの。アポロニヤスは新ピサゴラス派の哲學者で、紀元前數年に生れ、印度からスペインに至る間を漫遊したらしく、其一生には奇蹟を行つた話が多い。レミアに關する物は其一つである。(レミア参照)(三三)

Apuleius, Lucius (125?—?)

アプリーヤス。アフリカ北岸、ヌミディヤ(今のアルジェリア)に生れ、アセンズに學び、諸方を遊歴してローマに居住し、後カルセイジに歸つて哲學、修辭學を講じた。生歿年共に不明。プレトオ派の學者。有名な *Metamorphoses* 別名 *The Golden Ass* (英譯名)の著者。是は空想的、諷刺的ロマンスで、ボッカチョーは之から或場面を借り、「ドン、キオテ」「ジル、ブラス」中にも、之を參考として跡がある。(八七)

Arcadia.

アーケディア。古代ギリシヤの一地方名。ペロポネーサスの中央、四方山に圍まれた地で、風景の佳絶と、質朴淳良な住民の平和な生活で名高い。古代の詩人が理想の仙郷とした處。ア

ーケディア的は純樸、簡素、無邪氣、田園生活、或は自然のままな生活の意。此名詞を標題にした有名な文學には、Sannazaro, Sir Philip Sidney, Robert Greene, Lope de Vega, Shirley などのロマンス或は脚本がある。(六九、七三、七五、一七六、二九五)

Argos.

アーゴス。ギリシヤ地名。有名な彫刻家を出し、又古代劇場の遺跡ある地。古代から繁榮の町で、殊にローマ時代には殷賑であつた。(九三)

Artosto, Ludovico (1474—1533)

アリオストオ。伊國詩人。武人の子であつたが、劍よりもペンを取つた。傑作はロマンス詩 Orlando Furioso (一五三三年完結)で、アルチーナ物語は此詩中に在る。詩は Boiardo (1434?—1494) の Orlando Innamorato の續きで、豊富な想像と雅美で傑出してゐる。此他、諷刺詩、喜劇の著作がある。(キ、一六四、二〇一)

Aristotle (384—322 B. C.)

アリストートル。マセドニアのストリモカス灣に近いスタギーラに生る。父ニコマカスはマ

セドニア王アミンタス二世の侍醫であつた。アセンズに遊學してブレトオの門に入り、歸國してアレグザンダー(後の大王)の師傳となつた。五十歳の時、アセンズに出で、その郊外アポロオ、ライシ阿斯神殿の林園ライシアムに學を講じた。ライシ阿斯はアポロオ神の敬稱で、狼を殺す者、或はリシアシ神、或は光明神の義などと、種々の説明がある。ライシアムはライシ阿斯に屬すといふ意。大王の歿後、反マセドニア熱の起つた時、彼は危険を感じて、ユーピア島のカルシスに隠退して、此處で一生を終つた。

『詩學』は、彼がライシアムで講じたものの覺書か、或は門弟の書き取つたノートであらうと。とにかく未定稿である。彼の著述に關する傳統的分類中の藝術といふ部に掲げてある書目には、此書の外に *Rhetoric* 及び *Rhetoric to Alexander* の二冊がある。此内後の方は、彼の著でなからうといふ意見もあつたが、今日では、やはり疑の無いものと言はれる。彼の死後、『修辭學』或は雄辯學ともいふべき書は、諸家によつて研究されたが、『詩學』の方は不思議にも殆ど顧られず、ダンテ、ボッカチョーなども、是を知らなかつたらしい。とにかく中世紀には、此書を知つてゐる者は、殆ど無つたものらしい。然るに不思議にも東方には研究者があつて、

シリア語に譯され、更にアラビヤ語に重譯され(九三五頃)其後二世紀、回教哲學者 Averroes (1126-1198) が抄譯し、之を本として一二五六年にドイツ人 Hermann がラティン譯を作り、第十四世紀にスペインの Martinus がラティン譯を作つた。ヘルマンの譯は中世紀に多少流布したらしいが、文藝思想に何等の影響も及さなかつた。イタリー語の翻譯者セニエーが「長い間見捨てられ、顧られなかつた書」と言ひ、タソオが「長い間、愚昧の暗い蔭に葬られた」と言つてゐるのを見ても、此書が殆ど注意されなかつた事が分る。之が識者の間に注意されたのは、コンスタンティノブル陥落(一四五三年)以後の事で、一四九八年ヴェニスで Giorgio Valla のラティン譯が出版され、次いで一五〇八年同地の學者で、また出版者であつた Aldo Manuzio がギリシヤ文の本書を出版した。是がアルダイン版である。此原文も翻譯も不完全であつたが、劇文學には相當の影響を與へた。一五三六年に Alessandro de Pazzi の訂正ラティン譯と原文が出版されてから、漸く一般の注意を引き、一五四八年 Poggio によるラティン譯と註釋を出版し(フロレンス)、其翌年 Bernardo Segni が初めてイタリー譯を出版した。早い頃の佛譯は Cassandre (1654) Norville (1671) Dacier (1692) などのもの。英譯では一七〇五

年出版されたのがあり、次で Willis (1775) H. J. Pye (1788) Thomas Twining (1789) など
 が古く譯。獨國では Curtius (1753) J. G. Buhle (1798) の譯が最初のものである。是等翻譯
 の出版後、今日に至るまでの翻譯及び研究を列擧すると、餘りに繁雜になるから之を省略する。
 なお本書に引用してある『詩學』の文章は、ブチャーの英譯第四版に據り、レクラム版の獨譯
 を参考にしたものである。(八一三、二四一九、三一四、二六、二七、三〇、三三、三六、三九、
 四〇、八〇、八六、八七、九〇、一〇〇—一〇二、一一五、一二三、一二四、二九、三四、三六、一〇〇、一〇一、一〇三、一〇四、
 一一一、一二三、一三六、一三九、一五一、一五五)

Arnold, Matthew (1822—1888)

アーノルド。英國ラグビー校長トマス、アーノルドの子。オクスフォード大學で詩學を講じた。
 著述には評論及び詩。Essays in Criticism (1865), Study of Celtic Literature (1867), Literature
 and Dogma (1873) 等は廣く讀まれる。『ラオコオン』に關する詩は Epilogue to Lessing's
 Laokoon と云ふ題である。(七〇、七六、八二、八五、一〇九、一四四、一五五、一五七、一五五)
 Athenaeum.

アテネウム。シュレーゲル等の發刊したロマンティック派の機關雜誌(一七九八—一八〇〇、
 ベルリンで發行)屢ば不可解の語多しといふ評を受けた雜誌で、其終刊號に、フリードリヒの
 語がある。新世紀と共に不可解の謎は解かれよう、『其時之を讀み得る讀者も出て來よう。第
 十九世紀には、何人も暇の時、是等の警句を讀んで楽しむであらう』と。知己を後世に待つので
 ある。獨國ロマンティック派の機關誌には、此他 Corcordia (1820—23), Deutsches Museum
 (1802—3), Europa (1803—5), Kynosarges (1802), Poetisches Journal (1800) 等がある。(一三八)
 Athens.

アセンズ。古代ギリシヤ文化の中心。語源は不明であるが、恐らく花といふ語から轉じたも
 ので、守護神アテナの名も之から來たものであらうと。アクロポリスを中心として發達した都
 會で、傳説によれば、太古、半人半龍體のシクロポスなる者が、イジプト植民を率ゐて、此
 處に居を定めたのが、都の起源であると。(一〇六、一四一、一七五、二七五)

Augustine, Saint (354—430)

オーガステン。Confessions (三九七年頃の著) (一六六)

B の 部

Babbitt, Irving (1865—)

バビット。本書の原著者。米國オハイオ州デイトン市(Dayton)の人、ハーヴァド大學出身。

佛國に留學。一九一二年同大學佛文學教授。一九二三年ソルボンヌ大學講師。著書は *Literature and American College* (1908), *The New Laokoon* (1910), *The Masters of Modern French Criticism* (1913), *Rousseau and Romanticism* (1919), *Democracy and Leadership* (1924) の外に、テーム、ルナン、ヴォルテール、ラシーヌの著述の校訂出版がある。ロマンス語及び佛文學には造詣の深い學者である。(三〇、三三、三三、三三)

Bacle.

バクル。(九二)

Bacon, Francis (1561—1626)

ベーコン。ケムブリヂに學ぶ。一六一八年大法官に任ぜられ、同二年授爵 Viscount St.

Albans. 同年收賄事件の爲に官職を褫かれて隠退。歸納法的推論を鼓吹した哲學者であつて、科學上の發見、或は哲學的組織に貢献したと言はれないが、其鋭い智見と博識をもつて、智性を先入觀念から解放し、偏見なしに事實の研究に向はしめた功績は大きい。著書 *Advancement of Learning* (1605), *Essays* (1597, 1612, 1625), *Novum Organum* (1620), *New Atlantis* (1624) (四一、二五—二八、二〇、二七、二六—二四、二七、二九)

Baroque.

バローク式。第十七世紀末から第十八世紀中頃まで、伊、佛に流行した美術工藝様式の名稱。重に建築、家具、室内裝飾に用ひられた。非常に奇怪な、空想的な、仰々しい、不規則な、殆どでたらめとも言ふべき様式で、抑制と簡素を全く缺いてゐる。此語の起源はスペインの Barocco (大きな、不恰好な眞珠) から出てゐる。此様式を Jesuit style とも言ふ。ジェズイットの建立した教會に此様式を用ひたものが多いからである。なほ此語をロココと同様に用ひる場合もあるが、ロココ式は此様式程に醜惡でない。(ロココ参照) (40)

註釋及び索引

Batteux, Charles (1713—1780)

パトア。佛國ツ・ジエル附近に生る。一七六一年佛國アカデミー員となる。Les Beaux-Arts réduits à un même Principe (1746), Cours de belles-lettres (1750), La Construction oratoire (1764), Histoire des causes premières (1769) 單一原理に還元せる美術論に、彼は模倣論を述べてゐる。藝術の諸法則は要するにアリストートルの模倣論に歸着すると。然るに彼は此模倣論を「自然美の模倣」と説き出してゐる。藝術の目的は自然から最も美な物を選び、これを擬めて、自然でありながら、なほ自然以上に美である一體を作ることであると。完全な美しい自然は何かと言へば、要するに統一、雑多、均齊、均衡ある面白いもの位の漠然たる考である。

【詩學】を本としながら、甚しく異つた議論を立てたものだ。(四、二〇、三、一三、一三三)

Baudelaire, Charles Pierre (1821—1867)

ボードレール。パリに生る。一時政治上の運動に参加したこともある。一八五七年 Fleurs du mal (詩集悪の花)を出して、平凡な批評家を驚かした。アラン、ポーの著作に接して、從來自己の胸中に在つて、然も未だ形を成さなかつたロマンスや詩があると感じ、其數篇を翻譯

し、又ポー論を書いた。其翻譯は實に標本的である。此他彼の著には有名な散文詩、フローベール、ゴーチエー、ワグネル論等がある。晩年はアヘン慣用の爲に憫んだ。本文に述べてあつた彼の詩の意味は明瞭であるが其諧調は譯し難し。左に原文と英譯 (Cyril Scott) を掲げる。(詩は「悪の花」による。)

Correspondances

La Nature est un temple où de vivants piliers

Laissent parfois sortir de confuses paroles;

L'homme y passe à travers des forêts de symboles

Qui l'observent avec des regards familiers.

Comme de longs échos qui de loin se confondent

Dans une ténébreuse et profonde unité,

Vaste comme la nuit et comme la clarté.

翻譯及び解説

长德 阿那律

Les parfums, les couleurs et les sons se répondent.

Il est des parfums frais comme des chairs d'enfants,
Doux comme les hautbois, verts comme les prairies;
Et d'autres, corrompus, riches et triomphants,
Ayant l'expansion des choses infinies,
Comme l'anîre, le musc, le benjoin et l'encens,
Qui chantent les transports de l'esprit et des sens.

Echoes

In Nature's temple, living columns rise,
Which oftentimes give tongue to words subdued,
And man traverses this symbolic wood,

Which looks at him with half-familiar eyes.

Like lingering echoes, which afar confound
Themselves in deep and sombre unity,
As vast as Night, and like transplendency,
The scents and colours to each other respond.

And scents there are, like infant's flesh as chaste,
As sweet as oboes, and as meadows fair,
And others, proud, corrupted, rich and vast,

Which have the expansion of infinity,

Like amber, musk and frankincense and myrrh,

长德 阿那律

That sing the soul's and senses' ecstasy.

(11th EP 140—141—120)

Bayle, Pierre (1647—1706)

ペール。佛國の哲學者、評論家で懐疑的色彩が強かつた。セダン大學の教授。同大學閉鎖の後、ロッテルダム大學に聘され、同地にて終つた。著述、*Dictionnaire historique et critique* (1695—1697)。一六八四年には文藝批評雜誌 *Nouvelles de la république des lettres* を發刊した。是は數年間繼續し、文學思想の普及に功多かつた。(英)

Beatrice (1266—1290)

ビアトリス。ダンテが少年の頃から一生の間忘れなかつた女性。フロレンスの裕富な市民、ファルコ、ポルティナリーの娘。Simone dei Bardi なる者に嫁したが、數年も経たないで歿した。ダンテは此女性の名を *Vita Nuova*, *Divina Commedia* 中に傳へて不朽にした。神曲中のビアトリスは、ヴァジルに代つて詩人を天國へ案内する。ヴァジルは哲學(今で言へば自然宗教)。ビアトリスは神學、天啓宗教の寓意である。クロイチ氏はダンテ論中に言ふ、彼女はダ

ンテが考へ或は解説者が想像したやうに、神學、天啓、靈智などの寓意であるかも知れぬが、詩においては、やはり女性、往昔の愛人に對して深切な女性である。ビアトリスは實在の女の模倣か、理想的創造物か否かの議論は、要するに、詩中の彼女は冷靜な智性の作つた形象か、或は詩的溫熱と眞實を有する者かどうかと言ふ點に歸着すると。氏の美學説から出さうな論旨である。(10p)

Beers, Henry A. (1847—1926)

ビヤーズ。第十八及び第十九世紀英國ロマンティシズム(二卷、一八九九年及び一九〇一年)の外に英米文學の研究數種がある。米國バファローの人、エール大學教授。(三四)

Beethoven, Ludwig van (1770—1827)

ベートーヴェン。獨國ボンに生れ、獨國ヴァインにて歿。四歳の時から父について音楽を學ぶ。一八〇二年頃から耳を病んで遂に聾となる。加ふるに訴訟事件があつて晩年は暗い生涯であつた。(14p、17p、18p、19p)

Bergson, Henri (1859—)

ベルクソン。パリに生る。佛國現代哲學界の泰斗。Essai sur les données immédiates de la conscience (1889), Matière et mémoire (1896), L'évolution créatrice (1907), Le rire (1900), L'énergie spirituelle (1919). 本書に引用した語は、右の最初の著第一章にある。なほ氏の藝術論を知るには『笑』を見よ。『藝術の目的は、實際上必要な諸象徴、慣例的或は社會的に承認されてゐる一般性、即ち我々から眞實を隠蔽してゐる諸物を除いて、我々を眞實其物に直面させること以外に何も無い。』此點で藝術と哲學の關係如何と言ふ問題が生ずるのである。(121)

121' 120' 121' 122' 123'

Berlioz, Hector (1803—1869)

ベルリオス。異彩ある佛國音樂家。所謂標題樂を創始した一人。(121、127—128)

Bernini, Giovanni Lorenzo (1598—1680)

ベルニーニ。伊國の建築家、彫刻家、畫家。ローマ法王アーバン第八世の愛顧を受けて、聖ピーター寺院建築最後の技師として働いた。また佛國王ルイ第十四世に招かれて、ルーヴル宮殿一部の改築設計も作つた。英王チャールズ第一世はヴァンダイクの描いた自己の肖像三枚も

送つてバストを依頼したと。とにかく當時全盛を極めた藝術家。(71)

Bertin, Edouard (1797—1871)

ベルタン。ベルタンといふ家名は佛國ジャーナリズムには重をなすものだ。Louis François (1766—1841) は、弟 Louis François Bertin de Veaux (1771—1842) と共に、一八〇〇年 Journal des Débats を發刊して時事を論じたが、ナポレオン時代に Journal de l'Empire と改題を命ぜられ、しかも嚴重な檢閲の下に漸く發行を許されたのみならず、一時は發行權を政府に取り上げられた。一八一四年再びベルタンの手に歸し、以來發行を繼續し、兄弟の歿後、兄の二子 Edouard 及び Louis Marie Armand (1801—1854) が發行の任に當つた。エド。アールは文筆の人であると共に、畫家としても有名であつた。(120)

Blake, William (1757—1827)

ブリーク。ロンドンに生れ、同市にて歿。詩人、彫版家、畫家。Songs of Innocence (1789),

Marriage of Heaven and Hell (1790), Songs of Experience (1794) 等。(12)

Blue-Stocking Club.

一七五〇年頃、ロンドン社交界の名流モンタギュー夫人の催した集會を指した名稱である。文學、哲學など、凡て卑俗でない事柄を話題とした。此種の集會は第十四世紀の頃ヴェニスに催され、第十六世紀末から第十七世紀初め、パリにも催された。夫人は此事から思ひつき、しかも青色の靴下をはくことまで昔に倣つて、此會合を起したと。或は夫人自身が別に意味もなく、此色の靴下をはいたのを、來會者が眞似たのだと言ひ、或は來會者の一人某が常に、此色の靴下を用ひたのが元であるとも言ふ。兎に角簡單質素を旨とし、文化上の事を話題とした社交園で、レノルヅ、パークなどの名家も出席した。今日では女流文學者、女流學者、或は學者、文學者ぶる女をブルー、ストッキングと言ふ。(六)

Blümmner, Hugo (1844—1919)

ブリュムネル。古代美術研究の大家である。ラオコオンの校訂編纂(1880 第二版) Laokoon Studien (1881—1882) の外にギリシヤ、ローマの美術に關する研究が數種ある。(六五、六六)

Boccaccio, Giovanni (1313—1375)

ボッカチー。伊國フロレンスから、二十マイル程隔つたチェルタルドオといふ小さな町に

生れたのであらうと。相當の商人の庶子である。フロレンス政廳の外交官ともなり、晚年同地の大學で、ダンテの講義をした。有名な Decamerone の全部纏つた出版は一三五三年である。ピトラークと親密に交際した。ギリシヤ古語及び文學(殊にホーマー)研究を刺激した有力な一人である。しかし其事よりも、デカメロンを以つて人間性の復活を見せた點でルネサンス氣運の先驅者である。(一四)

Böcklin, Arnold (1827—1901)

ベクリン。瑞西バーゼルの人。怪異、深刻な想を表現した畫家。(一七)

Boileau-Despreaux, Nicolas (1636—1711)

ブアロー。パリに生る。法律を學んだが、文學界の大家となつた。彼の歐洲文學界における影響は甚だ大。L'Art poétique, Le Lutrin (1674)。ロンジヤイナス莊重論の翻譯(1674)。本書四五百頁、二行目の一六七三年は、一六七四年と訂正。(九、四〇、五—五、六、八、九、二〇〇)

Boissier, Gaston (1823—1908)

ブアシエー。佛國古典學者、史家、アカデミー理事、Cicéron et ses amis (1865), La Religion

- romaine d'Auguste aux Antonins (1874), La Fin du paganisme 1891), Tacite (1908), Le Con-juration de Catilina (1905) 等。(一六三)
- Bosquet, Bernard (1848—1923)
- ボーズンゲート (ボーズンギート)。英國唯心主義の哲學者。A History of Aesthetic (1892), Three Lectures on Aesthetic (1915)。(一六四)
- Bossuet, Jacques Bénigne (1627—1704)
- ボシユエー。佛國神學者、史家また説教者として高名あつた。ルイ第十四世の王子の師。モ一の司教。(一六五)
- Braitmaier, F.
- ブライトマイエル。(一六六)
- Brandes, Georg Morris Cohen (1842—1927)
- ブランドス。コペンハーゲンに生る。第十九世紀文學思潮は、佛、獨、英諸國に互つて、ロマンティック運動の潮流を評述した大著。其幼時から中年に至る迄の回想録は興味多いもの。此

- 他、イブセン、シェークスピア、ニイチェ論等がある。彼の弟 Edvard (1847) も亦文壇の名家で、評論の外に脚本、心理小説の著がある。(一六九)
- Browne, Sir Thomas (1605—1682)
- ブラウン。英國醫學者。Religio Medici (1643) は神祕的思想とブレトオ的思想を述べたもので、同時代の人から不可解と見なされたが、今日では神祕主義の貴重な表現として研究される。殊に醫學者の一讀すべき書である。(一七〇、一一〇)
- Brunetière, Ferdinand (1849—1906)
- ブルヌチエール。ツローンに生れ、パリにて歿。Revue des Deux Mondes の主筆。アカデミー員。フランス文學史の外に L'Evolution des genres dans l'histoire de la littérature (1890), Études critiques (1880—1898), Le Roman naturaliste (1883) 等。(一七四、一七五)
- Buckingham, Villiers (1628—1687)
- バッキンガム。同公爵第二世。英國宮廷及び政界に活動した人で、文學上の著がある。脚本 The Rehearsal (1671) は有名で、其中にドライデンを諷刺しむる。ドライデンは Absalom, and

Achtophel 中じ Zimzi と S 4 名で此公爵を嘲つてゐる。(一四八)

Buddha, Gotama (565—485 B. C.)

佛陀。常盤大定著『佛陀之聖訓』、ポール、ケールス著『佛陀の福音』。(一七四)

Buffon, George Louis Leclerc (1707—1788)

ブフオン。佛國の自然科学者。Histoire naturelle は一七四九年以來、彼の一生の事業であつた。Discours sur le style (1753). 彼の著は文章の美で名高し。(一五)

Burke, Edmund (1729—1797)

バーク。ダブリンに生る。英國政界及び政治文學史上重要な位置に在る學者。其文章は緻密精巧。A Philosophical Inquiry into the Origin of our Ideas of the Sublime and the Beautiful (1756) は美學思想の發達に非常に深刻な跡を遺した程の著でないが、暗示を與へる點は決して少くない。殊に此書は獨國における美學研究を刺激したもので、『ラオコオン』研究者は、レッシングと此書の關係を見なければならぬ。佛國大革命論(一七九〇年)は、時の英國王や露國カサリン二世から賞讃の辭を送られ、今日尙研究される名著である。(一五)

Butcher, Samuel Henry (1850—1910)

ブチャー。アリストートル『詩學』の英譯者。エディンバラ大學ギリシヤ文學教授。『詩學』訂正第四版(一九一一年)。(一〇、一三、二五、二四、二五)

Byron, George Gordon (1788—1824)

バイロン。ロンドンに生る。ギリシヤ獨立戰爭の際、義勇軍の將となり、ミッソロンジ一陣中にて病歿。Childe Harold (1812), The Prisoner of Chillon (1816), Don Juan (1824) 等。(一三、一六、一〇、一三)

Bysshe, Edward.

ビッシー。生歿年不明。一七二二年頃評判高かつた。(一五)

Byzantium.

ビザンシウム。東ローマ帝國の首都。三三〇年コンスタンティン大帝遷都。以後コンスタンティノープルと改稱。紀元前七世紀頃メガラ人の開いた地。一四五三年トルコ軍に占領さる。(一五、一六)

ウの部

Calvin, John (1509—1564)

カルヴァン。一五三六—同六四年間、ジュネヴワにおける宗教改革運動の主腦。(二七一)

Carlyle, Thomas (1795—1881)

カーライル。(101)

Carroll, Lewis (1832—1898)

カロール。Charles Lutwidge Dodgson のペンネーム。オクスフォードの數學講師。有名な少女小説アリス冒険物語の著者。(アリス参照)(三七)

Castel, Louis Bertrand (1688—1757)

カステル。佛國數學者。一七〇三年ジズイット教班に入る。また文學を研究す。Optique des couleurs (1740)。(ウ—カ、三三、三六、三七、一四)

Castiglione, Baldassare (1478—1529)

カステリオーネ。伊國諸邦に仕へた外交官。英、佛、スペインに駐在。著書 Il Cortegiano (一五一四年作、一五二八年出版)は The Perfect Courtier の題名で、英譯された(一五六一年、Thomas Hobbes 譯)。ルネサンス紳士の理想を説いた書で、文章の高雅をもつて知らる。(ウ—カ、一四〇)

Casuistry.

カジュイストリー。決疑論、或は善惡判定法と譯してある。種々な場合の正邪善惡を普遍的道徳法則或は良心に照して判断する法で、太古から種々な形式で試みられた。その爲に論理を用ひて邪を正とすら辯明する傾向も生じたので、この語を詭辯、ごまかし、強辯の意にも用ひる。本書では強辯家として詭辯家と區別した。(ジズイット参照)(三二)

Caylus, Comte de (1692—1765)

ケールス。佛國の考古學者で文學者。名門出で、母はルイ第十四世宮廷の回想録をもつて有名である。英、獨、伊、希諸國を巡つて古代の遺物を蒐集して其研究を發表。又彫版術に長じ、

美術家を保護した。Recueil d'antiquités égyptiennes, étrusques, grecques, romaines, et gauloises (1752-1755), Nouveaux sujets de peinture et de sculpture (1755), Tableaux tirés de l'Iliade, de l'Odyssée, et de l'Enéide (1757). (註一、註三、註五)
Chapelain, Jean (1595—1674)

シ・フラン。佛國アカデミー最初の會員の一人。叙事詩 La Pucelle (1656)。擬古文學の大家として、一時は非常な勢力があつた。フアローは極力彼を攻撃した。劇法則三箇條(スリー、ユニティズ参照)を理論から、實際へ移したのは、此詩人であると言はれる。著述には上記の外に De la lecture des vieux romans がある。(註三、註五、註六)

Chateaubriand, François René (1768—1848)

シ・トリアン。佛國北部サン・マロに生る。青年の頃軍隊に入る。米國へ行き、大革命當時は英國へ逃る。後ローマに外交官として赴任し、更に駐英大使となる。Atala (1801), René (1802), Génie du christianisme (1802), Les martyrs (1809), Itinéraire de Paris à Jérusalem (1811), Les Natchez (1826), Les aventures du dernier des Abencerages (1826), Mémoires

d'outre-tombe (1819-50)。彼はロマンティック文學のみでなく、第十九世紀佛文學の父と言はれる。第十九世紀を酔はせた文學者、佛人の想像を復活させた人とは、諸家の一致する批評である。次の語は彼の藝術觀であると共に、新興文學の進路を指示したものである。祖先等は自己を離れて非我を描いた、だから文學を乾燥無味ならしめた。「自身の心情と相談せよ。其處に靈質が発見されよう。兎に角、人性の最深また最も豊富な家は其處である。自己の宗教觀に表現を與へよ。フアローやヴァルテルと共にキリスト教は美を缺くと信するな。是は全く美である。愛國心に表現を與へよ。國民の歴史を復活せしめよ(中略)。祖先等のやうに感性或は想像を抑壓するな(中略)。眞の想像は感性と混和してゐるもので、兩者の分離は不可能である。没個性の藝術とても決して擯斥すべきでないが、其藝術も作家の個性の干與によつて新しい高尚な美を得る。我々は非我に對する同情或は反動で非我を描き、此同情或は反動に最善の表現を與へるのである。個性を加味する文學はなほ創造さるべきであるとすれば、没個性の文學は、新藝術に據つて若返り、元氣を恢復し、新光彩を放たなければならぬ」全くロマンティック文學の要領を説いてゐる語である。本書に引用してある語は「森の定めなき頂き」といふ意味

で、アーノルドがゲーラン論中に、シェークスピア、ワーヅワース、キーツ、セナンクール等の名句と共に、詩の描出力の例として引用したもので、詩の描出力とは、我々に事物の完全な、新しき、親密な感を起させる妙力である。此句は『森の頂きが無限に連続してゐる』或は『際てしない森の頂き』の意で、古典主義の思想から見れば、明かに觀念上の矛盾を含んでゐる。しかしロマンティック立場から見れば、好く森の觀念を起させる語である。(二頁—一五、一六)

Chaucer, Geoffrey (1340—1400)

チューサー。(三)

Chénier, André Marie de (1762—1794)

シニエー。佛國外交官の子、コンスタンティノブルに生る。母はギリシヤ人。最初軍隊に入り、後外交官、ロンドンに赴任。佛國大革命の際、恐怖政治に反對した爲に捕へられて、一七九四年七月二十五日斷頭臺上に死す。ロマンティック文學の先驅者と言はれるが、衷心は古典美、純美の追求者で、レコント、ド、リール或はエレディアの先驅者である。其詩は露國に影響を與へた。生前に出版された詩文は極めて少し。Jeu de paume (1791), Lames (1792). La

jeune captive (1794) 等。(一〇六—一〇七)

Chesterfield, Philip Dormer (1694—1773)

チェスタフィールド。同伯家第四代。都雅の偽裝が半ば本性となつた人。上流社會の名士で、才智も優れ、文學保護者を以て任じた。Letters to his son (1774)の著あり。ジョンソン博士の辭典發行の後援に關して、種々の事情のため、ジョンソンから怨まれた。都雅でなかつたジョンソンと禮儀作法を重んずる伯とが相容れなかつたのは無理もない。(一〇六)

Chopin, Frédéric François (1810—1849)

シューマン。ポーランドのワルソー附近に生れ、パリにて歿。George Sandの小説Lucrezia Floriani中のPrince Karolは彼である。彼と此女流作家の關係は文藝史上、有名な挿話である。(一〇七)

Cicero, Marcus Tullius (106—43 B. C.)

シセロ。(一〇七—一〇八)

Claude (1600—1682)

註釋及び索引

クロード。本名 Claude Gellée 或 Gellée. 佛國ローレンの一小村に生れ、ローマ、ネーブルスにて繪畫を修め、ローマにて歿。(二三)

Coleridge, Samuel Taylor (1772—1834)

コリーヂ。英國デヴンシャーの人。宗敎家の子。ケムブリヂに學び、後獨國ゲッチンゲン大學に學ぶ。サウシー、ワーツワース等と親しく交る。Biographia Literaria (1817). 詩は Ancient Mariner, Christabel, Kubla Khan 等。Literary Remains (1836-39). (四〇) 一〇一 一三二 一三三 一四〇 一四一 一四二 一四三

Collins, William (1721—1759)

コリンズ。英國ロマンティック詩歌の先驅となつた一人。(三三)

Conte, Isidore Auguste Marie François Xavier (1798—1857)

コント。佛國實證哲學の創制者。(三六)

Constantine (288?—337)

コンスタンティン大帝。(二五)

Constantinople.

コンスタンティノープル。(ピザンシム参照)(五)

Copernicus, Nicolaus (1473—1543)

コペルニカス。Koppernigk, Kopernik と書く。(二六)

Corot, Jean-Baptiste Camille (1796—1875)

コロ。佛國風景畫家。彼の作は、テオドール・ルソーよりも個性的、ドーニイよりも詩的、ミレーよりも美と言はれる。裕曲の家に生れ、一生金のために苦んだことなく、また慈善事業に盡した功は多し。(二六)

Cowper, William (1731—1800)

クーパー。カウパーと發音する人もあるが、詩人自身はクーバーと言つてゐたと。第十八世紀末の英國詩に新調を起した詩人。The Task (1785). (三二)

Creon.

クリオン。ソフォクリーズの劇中人物。エディパスの二子の死後シプズの主權を握る。(二〇)

Croce, Benedetto (1866—)

クローチエ。伊國現代哲學界の大家。美學(附美學史)、美學要綱の外に、ダンテ、アリオストオ、シェークスピア、コルネーユ、ゲーテの評論、唯物史觀論評、第十九世紀ヨーロッパ文學に關する評論集あり。(三、二五、二二〇—二二四、二五)

Cupid.

キュビッド。ギリシヤ神話、愛の神イーロスのラティン名。ハーミーズとアフロダイティの子。語源 Cupido は慾望、情慾の義。キュビッドの姿は、今日神話から離れて藝術的に用ひられる。(六八)

D の部

Daniello, B.

ダニロネ。La Poetica (1536). (一七、二七)

Dannreuther, Edward (1845—1905)

ダンロイテル。Oxford History of Music (1901-1905) 第六卷の著者で、ワグネル研究の權威。(一四、一七)

Dante, Alighieri (1265—1321)

ダンテ。(一四、一七)

Darwin, Erasmus (1731—1802)

ダーウイン。進化論で有名なチャールズ、ダーウインの祖父。長女はフランシス、ガルトンの母。自然科學者又詩人。The Botanic Garden (1781), Loves of the Plants (1789), The Economy of Vegetation (1792). (三二、六)

David, Félicien César (1810—1876)

ダヴド。佛國音樂家。コンスタンティノーブル、スミルナ、イジプトを漫遊。一八四四年「Desert」を發表して、名聲一時に揚つた。(二四、一八三)

Debussy, Claude Achille (1862—1918)

デブシー。佛國音楽家。ローマ、露國に遊學。殊に露國音楽から學ぶ所が多かつた。音楽界に新氣運を起した一人。Pelléas et Mélisande (1902), Images, Trois Nocturnes, Verlaine's Fêtes galantes, Cinq Poèmes de Baudelaire 等。(1411—1414)

Delille, Jacques (1738—1813)

デリール。佛國詩人。或は Delisle と書へ。Les jardins (1782), La pitié (1803). 外にヴァジルの翻譯。生存中は非常に評判高かつたが、其詩は感情、想像、智見を缺き、今日では叙述詩史の好例として見られるだけである。(131)

De Quincey, Thomas (1785—1859)

ド・クインシー。The Confessions of an English Opium Eater は一八二二年の出版で、ロンスル、ロマーヌス云々の條は同書の The Pains of Opium と題する中に在る。單行本として出版したものは、Klosterheim (1832), Logic of Political Economy (1844) など、他の著作は大抵「ブラックウッド雜誌」「エッセイ・インズラ文學新報」等に掲載されたもの。Dream Fugue

デ The English Mail-Coach といふ。(1411—1412)

Descartes, René (1596—1650)

デカルト。(デ・カルト・デ・レズ)

Des Esseintes.

デエゼント。ノイスマンの小説中の人物。(デ・レズ・エゼンテ)

Desportes, Philippe (1546—1606)

デポルト。佛國詩人。伊國詩人の模倣者であつたが、短詩には佳作がある。技巧に長じた人で、佛語の進歩には貢献してゐると。(1414)

Dickens, Charles (1812—1870)

デ・ケンス。(1110)

Diderot, Denis (1713—1784)

デ・ドロ。佛國ラングルに生れ、パリにて歿。Lettre sur les aveugles (1749) で獨創的思索家たることが認められ、次いで Lettre sur sourds et muets (1751) を出す。其一代の著述

は多し、Encyclopaedia 編纂事業は永久に記憶されるものである。最初は Ephraim Chamber の百科全書の佛譯を出版者から依頼されたのであつたが、彼は新編纂を出版者に薦め、數學者で又哲學者の D'Alembert (1717-1783) の協力を得て、一七五一年に第一卷を發行した。以後二十年間に二十八卷を出して完結し、更に附録六卷(一七七六—七七年) テーブルズ二卷(一七八〇年) を出版した。所謂アンシクロペディストとは、此百科全書に寄稿した一群の學者を稱した名で、チュルゴー、ホルバハ、グリム、ルソー、コンドルセー等も筆を執つた。彼は、露國のカサリン女帝の後援を得たので、一七七三年露國に赴いて謝意を表し、翌年歸國した。フッゲーは言ふ、「彼はヴォルテール、モンテスキュー、ルソーよりも、哲學、科學、藝術、文學、歴史、法律、其他何事をも包容した人である」。彼が、各種の問題について、暗示を與へたことは少からぬもので、その感化は英獨までも及んでゐる。實に文字通りの百科全書家で、各方面の思想界を刺激して活躍せしめた一種特別の人物である。彼の哲學についてはヘッフェイング氏の紹介が要を摘記してゐると思ふ。「自然の解釋」(一七五四年) 中には、地上における生活の連續進化に關する思想が出てゐて、之はラメトリ(一七〇二年—一七五一年) の唯物説に

酷似してゐる。彼はライプニッツから深い影響を受けてゐる。殊に繼續(或は連綿)及び勢力の概念について左様である。「ダランベルとディドロの對話」及び「ダランベルの夢」の二篇は一七六九年に書かれたものだが、出版は一八三〇年である。此二書中には彼の巧妙な思想が顯出してゐる。彼はラメトリ及びホルバハ(一七二三年—一七八九年)とは正反對の立場に在つて言ふ、心理過程は物質元素の相互作用の結果のみとは適當な説明でない。原子の轉換は決して意識を生じない。心理生活起原に關する唯一可能の説明は、下級状態における幼芽體或は性向の存在を假定する事で、是は進歩的統合の過程に據つて發達して高級の意識的生活となるものである。ディドロは自然の萬物に感性を認めるが、其感性に潜在と現實の區別を立てる。彼は心理元素の非常に雜多なものから、如何にして統一ある意識が構成されるかと言ふ事は容易に會得し難いと言ひ、又之を解決してゐない。彼は繼續といふ觀念に執着して、實際に差別ある要素を容れる餘地を有してゐないと。フアルケンベルヒは言ふ、彼は最初に、考へる物と物質を區別し、靈魂不滅を感覺の統一及び自我の統一の上に建てたが、後の彼は、感覺は物質の普遍的、本質的特性であると言ひ、靈魂の單純を説くのは形而上學的神學的愚論と言つてゐ

る云々。文章上のディドロよりも談話上の彼が有力であつたと。彼の聾啞論は一の言語學論であり、また文學論である。(五二、五三、三三一—三五、二六、二九、一四、一五、一四、一六、一八、二〇、二二、二三)

Don Quixote.

ドン・キホーテ。或は「ドン・キホーテ」(二三)

Dryden, John (1631—1700)

ドライデン。英國王政復古時代の文學界の大立物。ブアローの詩論の翻譯(一六八三年)はサフォク卿ウィリアム・ソームズの譯を彼が訂正したもの。Absalom and Achitophel (1681), The Hind and the Panther (1687), Alexander's Feast (1697), An Essay of Dramatick Poesie (1668). (一四、三〇、三三)

Dufrenoy, Charles Alphonse (1611—1665)

デュフレンワ。佛國畫家、詩人。De arte graphica (1668). (一四)

Dupin, Auguste.

デュパン。ポーの小説中の人物。探偵小説家の模範とする異常な推理力の人。(二九)

E の部

Eldorado (El Dorado).

エルドレードオ。スペイン語、黄金を塗つた者の意。最初は南米の或種族の酋長を意味した。其故はボガタ附近の種族は年々祭禮の時、酋長の體に金箔を塗る習慣を傳へてゐるからだ。次で、マノオ或はオモアといふ傳説上の地を言ひ、更に黄金寶玉が豊富であるといふ荒唐無稽の地の義となつた。南米のエルドレードオ探検隊は第十六世紀の中頃に數回企てられたが、皆な失敗に終つた。(一六)

Elizabeth (1533—1603)

イリザベス。英國女王。在位一五五八—一六〇三年(我國永祿元年—慶長八年)女王の世に

英國の國威發展し、文藝史上亦異彩を放つた。(三七)

Emerson, Ralph Waldo (1803—1882)

ハーモン。Ode, inscribed to W. H. Channing. (三六、三〇、三三、三六、三六、三六、三六)

Enceladus.

エンセラダス。(三三)

Epicurus (342—270 B. C.)

エピキュラス。エピキュラス學派の祖。此學派の標語と言はれてゐるのは、Post mortem nulla voluptas (死後に快樂無し)。(二二)

Erasmus, Desiderius (1466—1536)

イラズマス。或はエラズマス。ロツテルダムに生れ、バーゼルにて歿す。人文派の碩學。Encomium Moriae (The Praise of Folly, 1509) は僧俗の愚を嘲つた諷刺。此他 Adagia, Apophthegmata, Colloquia は一般的に讀まれるもの。其事業中特に録すべきはギリシヤ語バイブル

(新約、聖書ラテン譯附) の出版である。彼は私生子であつたと言ふ。英國小説家 Charles Reade (1814—1884) の小説 The Cloister and the Hearth (1861) は此學者の父なる人を主人公とし、イラズマスの誕生から幼年時代を書いたものである。ルネサンスの曙光は既に輝きそめたが、中世紀の傳統は尙強固な權威として尊重され、印刷術は發明されたが、未だ一般に利用されないのみならず、ややもすれば、是は悪魔の仕業と、見なされた時代を背景とした小説である。ルネサンス氣運の勃興した具體的光景を見るには、此小説を一讀する必要あらうと思ふ。これは小説であるだけに、史實に據つた研究書とは自ら異つた趣を呈してゐる。(二九、二九七)

Euclid.

ユークリッド。幾何學の元祖。紀元前三〇〇年頃アレグザンドリアに住す。(五〇、二〇〇)

Evelyn, John (1620—1706)

イヴリン。英國王黨の人、ロイヤル、ソサイテイ建設に功があつた。園藝、農業、建築、藝術を研究。日記は一六四〇年から晩年に至る半世紀間の政治、社會、宗教各方面の觀察を書いたもので、貴重な史料。出版は一八一八年。別發音、エヴリン或はエヴリン。(二九五)

F の部

- Faguet, Émile (1847—1916)
 ファゲール。ソルボンヌ大學教授。アカデミー員。Histoire de la littérature française (1900).
 コルネーユ、ラフォンテーヌ、ヴォルテール、フローベル、ニーチェ等の評論。(二三、三三)
 Fénelon, François de Salignac de La Mothe (1651—1715)
 フェノン。ルイ第十四世の王孫の教戒師。カマブレの大司教。Les adventures de Télémaque (1699), Lettre à l'Académie française (1714). (二三、三三)
 Ford, John (1586—1639)
 フォード。英國劇作家。熱情と周囲の事情の衝突から生ずる悲劇を作り、或はユーモアに富む喜劇に、常軌外れの題材を用ひた。また非常に肉感的な衝動も現れてゐる。 Lover's Melancholy (1629), 'Tis Pity She's a Whore (1633), The Broken Heart (1633) 等。(二三)

- France, Anatole (1844—1924)
 フランス。Jacques Anatole Thibault のペンネーム。Les Opinions de Jérôme Coignard (1893), La Vie littéraire (1883-92) 等。(五六、一三)
 French Academy.
 フランスアカデミー。Académie Française. 最初は有志八名の會合、一六三五年一月宰相リシュリューの盡力によつて公の設備となり、會員數を四十人と定む。佛語と佛文學の統制を目的とし、一六九四年アカデミー辭典初版を發行した。一七九三年閉鎖、同九五年、他の機關の一部として再興、一八一六年舊制度復興。一八七八年第七版の辭典を發行。(二三、二四)

G の部

Galileo (1564—1642)

ガリリオ。(一六二)

Gautier, Théophile (1811—1872)

ゴッテ、エー。最初繪畫を學び、後ロマンチック文學者として、言語の選擇と文體の美を以て特色を發揮した。辭書の研究を好んだと云ふ。Albertus (1833), La Comédie de la Mort (1838), Jeune France (1833), Mille de Maupin (1835), Emaux et Camées (1852), Le Capitaine Fracasse (1861—63), 彼の長女 Judith (一九一七年歿) は東洋學者で、又歴史小説と詩をもつて聲名があつた。(一六二、一六三、一六六、一七〇)

Gayley, Charles Mills.

ゲーリー。スコットと共に An Introduction to the Methods and Materials of Literary Criticism (1901) を著述す。文學の研究に必要な書目を詳細に掲載すると共に、研究方針を示したものである。同氏には此他ヤング氏との共著 English Poetry, its Principles and Progress (1912) がある。英詩の形態研究には簡便な書。(一〇、四)

Gellius, Aulus (130?—180?)

ジェリアス。ローマの著作家。其著 Noctes Atticae は二十卷の隨筆で(内第八卷は目錄のみ傳はつてゐる)。文法、幾何學、哲學、歴史等各般に亘つてゐる。此書は其頃の學術及び文藝界の事情を覗ふ上に貴重な材料であるばかりでなく、埋滅した古書からの引用文があるので、一そう貴重である。(二六三、二六四)

Ghile, René (1862—)

ジール。佛國象徴派には、旋律派メロディストと諧律派ハーモニストの別があり、ジールは後者に屬すと言はれる。(二六五)

Giorgione (1477—1511)

ジョルジオーネ。彩色の技巧に優れたヴェニス畫家。(二七六)

Gladstone, William Ewart (1809—1898)

グラッドストーン。(二七六)

Goethe, Johann Wolfgang von (1749—1832)

ゲーテ。彼がナポレオンから招かれて會見したのは、一八〇八年十月二日で、場所は史上有名なエルフルトである。佛帝は Vous êtes un homme の語を以つて詩人を迎へた。文字通りで

は「貴方は第一人者だ」であるが、敬意をこめた意味で、あなたが有名なお方である、と解すべきである。なほデュンツェルのゲーテ傳には、此時の佛帝の語は、Voilà un homme と書いてある。之なれば「此人を見よ」の意である。しかしデュンツェルの英譯者は言つてゐる、「貴方が云々」の方は、ゲーテが來た時、佛帝が詩人に向つて言つた語で、「此人云々」は、詩人が去る時に、佛帝が近臣に向つて言つた語であらうと。リュイスのゲーテ傳にも此通に書いてある。其後(同月六日)ワイマルのナポレオン歓迎の席上で再び會見して、親しく談話した(ヴェラントも同席した)。此時演ぜられた劇はヴォルテールの *Mort de César* であつた。此際シエクスピアについての二人の談話中に、本書の序文にあるナポレオンの意見が出たのである。(七、二、四、三三)

Gomperz, Theodor (1832—1912)

コムベルツ。ブルュンに生れ、バーデンにて歿。Griechische Denker: Geschichte der antiken Philosophie (1893), (104)

Goncourts.

コンクール。Edmond de (1822-1896), Jules de (1830-1870) 兄はナンシー、弟はパリに生る。兄は日本美術の愛好者。合作小説。Soeur Philomène (1861), Renée Mauperin (1864), Germinie Lacerteaux (1865), Manette Salomon (1867), Mme. Gervaisais (1869)。兄の遺言により、其遺産をもつてコンクール・アカデミーを設立し、文學者を奨励す。兄單獨の作 *La Fille Elisa* (1878), *Les Frères Zemganno* (1879), *La Faustin* (1882), *Chérie* (1884), (143, 144)

Görres, Johann Joseph von (1776—1848)

ゲーレス。コブレンツに生れ、シュンケンにて歿。ハイデルベルヒ、ロマンティック黨の一人で、また愛國主義の鼓吹者。Der Rheinische Merkur (1814-16) を發行。Athanasius (1837), (46)

Gottsched, Johann Christoph (1700—1766)

ゴトシエッド。キヨニスベルグ附近に生れ、ライプチヒにて歿。佛國古典主義に據つた評論家。(46)

Gouyon, Count of.

グーテン伯。(三二)

Gray, Thomas (1716—1771)

グレイ。ロンドンに生れ、ケムブリヂにて近世史を講じ、同地にて歿。英國ロマンティック派の先驅者。Elegy written in a Country Churchyard (1751), Ode on a distant Prospect of Eton College (1747), Progress of Poesy (1757), Letters. (三二・三三・三六)

Gregory, Pope.

グレゴリー法王。ベット氏の索引には單に法王とのみ書いてあるが、グレゴリーと稱した法王は十六代あつて、誰を指すのか不詳。本書中の引用語は、餘程昔から格言として傳はつてゐる。(三二)

Greville, Fulke (1554—1628)

グレヴィル。英國政治家また詩人。イリザベス女王の寵臣、フィリップ、シドニーの親友、其傳記を編纂。(三五)

Grieg, Edvard (1843—1907)

グリーク。ノルウェー音楽家。Peer Gynt, Norwegian Folk-Songs, Sigurd Jorsalfar 等。(一四一)

H の 部

Haeckel, Ernst Heinrich (1834—1919)

ヘッケル。ポツダムの人。進化論者。Die Welträtsel (1899), Die Lebenswunder (1904). (三〇・三三)

Hamlet.

ハンムレット。(三六)

Hardy, Thomas (1840—1928)

ハーディ。The Dynasts (1903-1908). 彼の小説で傑作と言はれるものは、The Return

註釋及び索引

of the Native (1878), Far from the Maddening Crowd (1874), Tess of the D'Urbervilles (1891), Jude the Obscure (1895), The Woodlanders (1887), The Mayor for Casterbridge (1886) 等。彼の小説の一特色は、文明の空氣に觸れないで、自然のままに生活してゐる農民の描寫である。(三六二)

Hazlitt, William (1778—1830)

ハズリット。英國評論家。Lectures on English Poetry (1813), Spirit of the Age (1825), Table Talk (1824). (二二七、二三三、二三四、二三五)

Hegel, Georg Wilhelm Friedrich (1770—1831)

ヘーゲル。Aesthetik (1835). (一三六)

Heine, Heinrich (1797—1856)

ハイネ。フェルザルマンに生れ、パリに客死。Gedichte (1822), Buch der Lieder (1827), Die Romantische Schule (1836), Reisebilder (1826—1831), Die Lorelei, Du bist wie eine Blume は有名な詩。(三七、一三五)

Heinsius, Daniel (1580—1655)

ハインシウス。和蘭ルネサンスの學者。ジョセフ、スカリジャアの門弟。シャプランは、此人を文學批評の豫言者と崇め、其著 De Tragœdiæ Constitutione (1611) をアリストートル『詩學』の精髓と稱した。ラティーン詩集の外に英譯名 The Massacre of the Innocents (1613) と題する悲劇があり、またアリストートル、ホレース、セニカなどの校訂出版がある。彼の子 Nikolaes (1620—1681) も亦有名な學者である。(一一)

Helen.

ヘレン。(六一)

Henry IV. (1553—1610)

ヘンリー第四世。(佛、Henri アンリ) 在位一五八九—一六一〇年(我國の天正十七年—慶長十五年)。ブルボン王家始祖。國內の大整理と統一を企て、一五九八年四月十三日ナントの勅令を發布して舊新兩教徒の調停を謀つた。このため宗教戦争は終止した。(二六九)

Hercules.

ハーキ・リース。(一六八)

Herder, Johann Gottfried (1744—1803)

ヘルデル。東プロイセン、モールンゲンに生れ、ワイマールにて歿。Fragmente über die neuere

Deutsche Literatur (1767), Kritische Wälder (1769), über den Ursprung der Sprache (1772),

Ideen zur Philosophie der Geschichte (1784-91)。 (一三三' 一三三' 一三三' 一三三' 一三三)

Heredia, José Marie de (1842—1905)

エルディア。サンテマム附近に生る。スペイン人と佛人兩血統の混つた人。Les Trophées

(1893) をもつて聲名を博す。レコント、ド、リールを中心とした詩人等の一人で、寶石の如く

磨き上げた詩を作つた。(一六八)

Herford, Prof.

ハーフォード教授。(一六九)

Hermogenes.

ハーモジニス。生歿年共に不詳、第二世紀後半のギリシヤ修辭學者。(一四)

Herodotus (484?—425 B. C.)

ヘロドトス。ギリシヤ史家。(一七)

Hettner, Hermann Julius Theodor (1821—1882)

ヘトネル。ドイツ文學史家。ヘナ大學教授。Literaturgeschichte des 18ten Jahrhunderts

(1856-70), Griechische Reiseskizzen (1853), Das moderne Drama (1852), Die romantische

Schule in ihrem Zusammenhang mit Goethe und Schiller (1850)。 (一七〇' 一七〇)

Hoffmann, Ernst Theodor Amadeus (1776—1822)

ホフマン。キニヒス・ユ・ト・シ・ヤ・ン・ト・フ・フ。Phantasiestücke in Callots Manier

(1814), Die Elixiere der Teufels (1817), Nachtstücke (1817), Das Fräulein von Scuderi

(1819), Lebensansichten des Katers Murr, nebst fragmentarischer Biographie des Kapellmeisters

Johannes Kreisler (1821-1822)。 (一三三' 一六八)

Homer.

ホーマー。(一八' 三三' 六三' 三三' 三三' 三三' 三三' 一四九' 一六八)

Horace (Quintus Horatius Flaccus) (65—8 B. C.)

ホレース Ars Poetica は全部四百七十六行の韻文で、問題となつた有名な句は、其三百六十一行目にある。Francis Howes (1776—1844) の英譯にはかうある。

For poems are like pictures: some appear

Best in the distance, others standing near;

This lo es the shade, while that the light endures,

Nor shuns the nicest ken of connoisseurs;

This charms for once, and then the charm is o'er,

While that, the more surveyed, still charms the more.

なほ James Lonsdale 及び Samuel Lee 二氏の散文譯には、かうある。「繪畫のやうに詩も以下の如し。或ものは近附くに從つて益す嗜好に適し、或ものは少しく離れて宜しく、或詩は陰暗に追従し、他の或詩は強い光で見られるのを好み、批評家の鋭利な判断を恐れぬ。或詩は只一度だけ樂ましめ、他の或詩は數回讀んでも尙ほ樂ましめる」。

ホレースには、此著の外に Satires, Epodes, Odes, Epistles (I, II) Carmen Seculare 等の著がある。詩話は『詩學』のやうな運命に遇はず、常に愛讀もされ、研究もされた。これに倣つた有名な韻文の詩論は、伊國の Marco Girolamo Vida (1489—1566) の De Arte Poetica (1527)、フアローの詩論、ホープの批評論等である。(セ一〇、二三、二元、西、六、三、三九)

Huber, H.

フーベル。(一四)

Hugo, Victor (1802—1885)

ユーゴー。佛國ロマンティック文學の巨人で、我國にも廣く紹介されてゐる。La Légende des Siècles (1859—1883), Hernani (1830), Notre Dame de Paris (1831), Les Misérables (1862), 全集五十八冊(一八八五—一九〇二年)。(二〇、八五、一六、一八、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五)

Hume, David (1711—1776)

ヒューム。エディンバラに生る、一七三四年佛國に赴き、同三七年迄滞在。同六三年再びハ

リを訪ひ、諸方より歓迎された。溫和であつた此哲學者の一生の一挿話がルソーとの不和である。J. H. Burton's Life and Correspondence of David Hume (1846). (二三三—二三六)

Hutten, Baroness v. n (1874—)

フッテン。米國の獨系の女流詩人。(二三三)

Huyssmans, Joris Karl (1848—1907)

ユイスマン。晩年熱心なカトリック教徒であつた。L'Art moderne (1883), A Rebour

(1884), La Bas (1891), En Route (1895), La Cathédrale (1898), Sainte Lydwine de Schie-

dam (1901), L'Oblat (1903). ミンクル、アカデミー會員。最後の作は Les Foules de Lourdes

(1906)。死去前に、未刊の原稿を破棄したといふ。(二八九、二九〇、二九一、二九二)

一の部

Ibsen, Henrik (1828—1906)

イブセン。(一〇九)

Jの部

James, William (1842—1910)

ジェームズ。心理學の大家で、プラグマティズムを主唱した。彼は、人の氣質の相違に因つて、其人の人生觀が異ると言つて、左の二型の心理状態を區別した。(一)柔かい心 (二)強硬な心。(一)は合理主義的(原理に従ふ)、理智主義的、唯心主義的、樂天主義的、宗教的、自由意志論的、一元論的、獨斷的などに傾き、(二)の方は、實驗的(事實に従ふ)、感覺主義的、物質主義的、厭世主義的、非宗教的、運命論的、多元論的、懷疑的などに傾くと。プラグマティズムには、實用主義、實際主義、實行主義などの譯字が當ててある。小説家 Henry James

註釋及び索引

(1843-1916) は、此哲學者の弟。(110° 111° 112° 113°)

Jaubert, Mme.

ジョーベル夫人。(一六七)

Jesuit.

ジェズイット。一五三九年ロヨラ (Ignatius Loyola, 1491-1556) が、ローマ法王の裁可を得て組織した宗教團の名稱は、*Societas Jesu* (イエス協會或は隊) である。ジェズイットといふ語は、其反對派の名づけたもので、カルヴィンの文中に初めて見えてゐるさうだ。貧困、清淨、服従を誓つて、世界的に活動した團體である。第十七世紀から第十八世紀の中頃までの活動は目覺しかつたが、一七七三年ローマ法王によつて解散を命ぜられてから衰微し、一八一四年再興を許された後も昔日のおもかげは無い。天文十九年(一五五〇年)鹿兒島に上陸してキリスト教を傳道したザヴィアー(スペイン人で、同國發音ではハヴィエル)は、ジェズイット僧である。此教團は宗教改革に反對して、ローマ教擁護に全力を注いだのであるが、ローマの教理、教則中、明かに朽腐したものをすら、巧妙な決疑論的推理によつて正理と辯證しようとする努め

た。これが此派の強辯と稱せられるものである。(八、三、三、二六、三七、空、100° 110°)

Johnson, Samuel (1709—1784)

ジョンソン。英語辭典の編纂者として、また文豪として有名であるが、性格の方から見ても餘程面白い人である。彼の後進で、又親友であつたボズウェル (James Boswell, 1740-1795) のジョンソン傳が、また傳記として不思議な妙趣をもつてゐるものだ。Letter to Lord Chesterfield (1755), Preface to Shakspeare (1765). (チェスタフィールド参照) (三〇° 五五° 五六° 五七° 一四三° 144° 145°)

Joubert, Joseph (1754—1824)

ジョーベル。バビット氏言ふ、『第十九世紀初期におけるルソー崇拜家の最良の典型がスタエル夫人であるとすれば、ジョーベルは、異つた方面を代表する。即ちブレトオの崇拜家である』。Pensées, essais, maximes et correspondance (1842). (113° 114° 115° 116° 117° 118° 119° 120° 121° 122° 123° 124° 125° 126° 127° 128° 129° 130° 131° 132° 133° 134° 135° 136° 137° 138° 139° 140° 141° 142° 143° 144° 145° 146° 147° 148° 149° 150° 151° 152° 153° 154° 155° 156° 157° 158° 159° 160° 161° 162° 163° 164° 165° 166° 167° 168° 169° 170° 171° 172° 173° 174° 175° 176° 177° 178° 179° 180° 181° 182° 183° 184° 185° 186° 187° 188° 189° 190° 191° 192° 193° 194° 195° 196° 197° 198° 199° 200° 201° 202° 203° 204° 205° 206° 207° 208° 209° 210° 211° 212° 213° 214° 215° 216° 217° 218° 219° 220° 221° 222° 223° 224° 225° 226° 227° 228° 229° 230° 231° 232° 233° 234° 235° 236° 237° 238° 239° 240° 241° 242° 243° 244° 245° 246° 247° 248° 249° 250° 251° 252° 253° 254° 255° 256° 257° 258° 259° 260° 261° 262° 263° 264° 265° 266° 267° 268° 269° 270° 271° 272° 273° 274° 275° 276° 277° 278° 279° 280° 281° 282° 283° 284° 285° 286° 287° 288° 289° 290° 291° 292° 293° 294° 295° 296° 297° 298° 299° 300° 301° 302° 303° 304° 305° 306° 307° 308° 309° 310° 311° 312° 313° 314° 315° 316° 317° 318° 319° 320° 321° 322° 323° 324° 325° 326° 327° 328° 329° 330° 331° 332° 333° 334° 335° 336° 337° 338° 339° 340° 341° 342° 343° 344° 345° 346° 347° 348° 349° 350° 351° 352° 353° 354° 355° 356° 357° 358° 359° 360° 361° 362° 363° 364° 365° 366° 367° 368° 369° 370° 371° 372° 373° 374° 375° 376° 377° 378° 379° 380° 381° 382° 383° 384° 385° 386° 387° 388° 389° 390° 391° 392° 393° 394° 395° 396° 397° 398° 399° 400° 401° 402° 403° 404° 405° 406° 407° 408° 409° 410° 411° 412° 413° 414° 415° 416° 417° 418° 419° 420° 421° 422° 423° 424° 425° 426° 427° 428° 429° 430° 431° 432° 433° 434° 435° 436° 437° 438° 439° 440° 441° 442° 443° 444° 445° 446° 447° 448° 449° 450° 451° 452° 453° 454° 455° 456° 457° 458° 459° 460° 461° 462° 463° 464° 465° 466° 467° 468° 469° 470° 471° 472° 473° 474° 475° 476° 477° 478° 479° 480° 481° 482° 483° 484° 485° 486° 487° 488° 489° 490° 491° 492° 493° 494° 495° 496° 497° 498° 499° 500° 501° 502° 503° 504° 505° 506° 507° 508° 509° 510° 511° 512° 513° 514° 515° 516° 517° 518° 519° 520° 521° 522° 523° 524° 525° 526° 527° 528° 529° 530° 531° 532° 533° 534° 535° 536° 537° 538° 539° 540° 541° 542° 543° 544° 545° 546° 547° 548° 549° 550° 551° 552° 553° 554° 555° 556° 557° 558° 559° 560° 561° 562° 563° 564° 565° 566° 567° 568° 569° 570° 571° 572° 573° 574° 575° 576° 577° 578° 579° 580° 581° 582° 583° 584° 585° 586° 587° 588° 589° 590° 591° 592° 593° 594° 595° 596° 597° 598° 599° 600° 601° 602° 603° 604° 605° 606° 607° 608° 609° 610° 611° 612° 613° 614° 615° 616° 617° 618° 619° 620° 621° 622° 623° 624° 625° 626° 627° 628° 629° 630° 631° 632° 633° 634° 635° 636° 637° 638° 639° 640° 641° 642° 643° 644° 645° 646° 647° 648° 649° 650° 651° 652° 653° 654° 655° 656° 657° 658° 659° 660° 661° 662° 663° 664° 665° 666° 667° 668° 669° 670° 671° 672° 673° 674° 675° 676° 677° 678° 679° 680° 681° 682° 683° 684° 685° 686° 687° 688° 689° 690° 691° 692° 693° 694° 695° 696° 697° 698° 699° 700° 701° 702° 703° 704° 705° 706° 707° 708° 709° 710° 711° 712° 713° 714° 715° 716° 717° 718° 719° 720° 721° 722° 723° 724° 725° 726° 727° 728° 729° 730° 731° 732° 733° 734° 735° 736° 737° 738° 739° 740° 741° 742° 743° 744° 745° 746° 747° 748° 749° 750° 751° 752° 753° 754° 755° 756° 757° 758° 759° 760° 761° 762° 763° 764° 765° 766° 767° 768° 769° 770° 771° 772° 773° 774° 775° 776° 777° 778° 779° 780° 781° 782° 783° 784° 785° 786° 787° 788° 789° 790° 791° 792° 793° 794° 795° 796° 797° 798° 799° 800° 801° 802° 803° 804° 805° 806° 807° 808° 809° 810° 811° 812° 813° 814° 815° 816° 817° 818° 819° 820° 821° 822° 823° 824° 825° 826° 827° 828° 829° 830° 831° 832° 833° 834° 835° 836° 837° 838° 839° 840° 841° 842° 843° 844° 845° 846° 847° 848° 849° 850° 851° 852° 853° 854° 855° 856° 857° 858° 859° 860° 861° 862° 863° 864° 865° 866° 867° 868° 869° 870° 871° 872° 873° 874° 875° 876° 877° 878° 879° 880° 881° 882° 883° 884° 885° 886° 887° 888° 889° 890° 891° 892° 893° 894° 895° 896° 897° 898° 899° 900° 901° 902° 903° 904° 905° 906° 907° 908° 909° 910° 911° 912° 913° 914° 915° 916° 917° 918° 919° 920° 921° 922° 923° 924° 925° 926° 927° 928° 929° 930° 931° 932° 933° 934° 935° 936° 937° 938° 939° 940° 941° 942° 943° 944° 945° 946° 947° 948° 949° 950° 951° 952° 953° 954° 955° 956° 957° 958° 959° 960° 961° 962° 963° 964° 965° 966° 967° 968° 969° 970° 971° 972° 973° 974° 975° 976° 977° 978° 979° 980° 981° 982° 983° 984° 985° 986° 987° 988° 989° 990° 991° 992° 993° 994° 995° 996° 997° 998° 999° 1000°)

Jourdain.

ジュールダン。モリエル喜劇 *Le bourgeois gentilhomme* (成上り紳士) の主人公。四十年間、

散文を語つてゐて氣付かなかつたと言ひ、また散文でないものは韻文、韻文でないものは散文であると説明した人物、本文のジュールダンはジュールダンと訂正。(二三)

Jupiter.

ジュピター。(二四六、二三)

K の部

Kant, Immanuel (1724—1804)

カント。規則正しい生活を送つた哲學者も、一生に只一度午後の散歩に出なかつたことがあつた。それはルソーの『新エロイズ』に讀み耽つた爲であつたと。(六七)

Keats, John (1795—1821)

キーツ。ロンドンに生れ、ローマに客死。Endymion (1818), Lamia (1820), Isabella, or The

Pot of Basil (1820), The Eve of St. Agnes (1820), Ode on a Grecian Urn (1819). (キツ、ポツ、バシル、イブ、セント、エグネス、オード、オン、ア、グリーシアン、アーン)

Kepler, Johann (1571—1630)

ケプラー。(二七一)

Kipling, Rudyard (1865—)

キプリング。(二七二)

Kircher, Athanasius (1601—1680)

キルヘル。哲學及び數學の獨逸碩學。ジェズイット教班に入る。ウルツブルグ、又ローマにて講義。象形文字及び考古學を研究。博學であつたが批評や判斷の方には特長がなかつたと。Musurgia Universalis (1650). (キフ)

Klinger, Max (1857—1920)

クリンゲル。ライプチヒ近くに生る。彫刻、繪畫、エッチングを兼ねた藝術家で、ベートーヴェン像(色彩あるもの)は、彼の特色を發揮した作。(二七七)